

インフィニット・ストラトス —名も無き武者は悪鬼となる—

4696猫

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

自身と周りの差が怖くなり、剣道を辞めた織斑景秋に待っていたのは罵倒と暴力の嵐だった。

誰にも助けを求められず、誰にも声が届かない孤独な世界で独り、孤独に耐えながら幼馴染みとの約束を果たそうと戦った

姉の威光を曇らす為、誘拐された景秋を助けたのは――

これは果たせなかった約束を果たすため、甦った男の物語。

# 目次

原作前

プロローグ	I	1
プロローグ	II	7
プロローグ	III	13
キャラ設定	更新あり	19
I S 学園編		
第一話：入学	—	23
第二話：武者は轟き、空を駆け	—	33
第三話：武者は戦鬼になっていく	—	42
第四話：戦鬼でも教えるのは優しい	—	51
第五話：編入生は戦鬼を知っている	—	57
第六話：戦鬼は新たな力に目を輝かせ	—	64
第七話：乱入者	—	71
第八話：戦鬼は真実を語る	—	79
第九話：絶望を知って	—	84
第十話：戦鬼と出会う銀髪の兎達	—	89
第：十一話：放つ一撃——電磁抜刀	—	97
第十二話：戦いに正義を飾る者達へ告げる	—	105
第十三話：鬼は涙を流さない	—	112
第十四話：男装貴公子の涙	—	120
第十五話：黒銀の兎、訣別の時	—	128

## 原作前

### プロローグ・I

#### プロローグ・I

それは、ドイツで行われた第二回モンドグロツソの決勝戦。

その日は姉の晴れ舞台だった。

『白騎士事件』なる世界を震撼させた事件が7年前に起こり、IS——インフィニット・ストラトスと呼ばれる兵器が台頭した。

その兵器は既存の兵器全てを凌駕し、圧倒した。そして、世界の新兵器になった。

ただ欠点があつた。それは女性にしか動かせず、乗れないという事。この制約のせいで女尊男卑なる風潮が横行し、男性にとっては暮らし辛く、生きにくい世の中になった。

それは些末事だろう。今の状況に比べれば、どんなことでも些末事だ。

目の前にはガタイのいい黒服の男が二人、オレンジ色のISを纏っている女が一人。

そして俺こと——おりむらかけあき織斑景秋の腕には手錠をかけられ、その上から縄で縛られ、足にも拘束具。

廃ビルということから、誘拐されたのだと思う。輝かしい姉の威光を曇らせるために。

俺の姉はISによる国際大会、モンドグロツソの初代優勝者、二連覇がかかるこの試合で妨害してやろうという考えなのだろう。

何故こうも落ち付いていられるのかって？

どうせ、俺が死んでも代わりは居るからだ。双子の弟、織斑一夏っていう姉に愛され、大事にされてる弟がいる。むしろそっちと間違えられなくて良かったって言っても良い。

一夏を好む人間は多い。姉の言うことを守り、剣道では優秀な成績を残し、顔も良い。この『顔も良い』と言うのが引つ掛かるのだ。

俺と一夏は双子なのだから顔も似ている。なのに何故アイツだけが良いと言われるのか……。理由は解ってはいる。覇気や纏っているオーラが違うのだ。

対する俺は剣道を辞めてから一気に変わったと言われる。幼馴染みの箒には「なつてない」とか「全然ダメだ」とか色々言われた気がする。

辞める前は結果を残していたけれど……。辞めてしまえば意味が無い。

それに、やる気の無い俺を無理矢理連れていこうとするのは心底ウザかったし、殺意も湧いたものだ。

そんな物思いに耽っていると、黒服の一人が景秋に声を掛ける。

「お前、静かだな。もつとリアクション取つたらどうだ？」

「この状況で騒いだ所で誰かが助けに来る訳でも無いですし」

「この坊主、随分と達観してんのな」

景秋の言葉にもう一人の黒服が会話に混ざる。だが、ISを纏った女性が会話を止めた。

「喋ってないで、しつかり見張りなさいよ」

「了解」

「あの女の人に頭が上がらないんだな、あんた達」

「そりゃ……。IS乗ってるからな」

「そうそう。ISにやどれだけ戦車用意しようと勝てやしねえんだ」

景秋の言葉に黒服二人はそう答えた。景秋は黒服二人の言葉にも言えなかった。

「それよりも、貴方は本当に人質として価値があるのか私は気になるのだけど」

「それは解りませんよ……。いや、最悪の場合は無いかもしれませんがね」

「どういう意味よ。家族でしょ？」

女性の言葉に景秋は少し黙って考え、言葉を発した。

「家族……。ってなんですか？血が繋がってれば家族なんですか？」

「……。それは……。貴方、何があったのよ」

「剣道が… 怖くなつたんです…。強くなつていけばいく程、周りとの差がはつきり見えてきて…。俺が強くなればなる程、弟への風当たりが強くなった。だから俺は剣道を続ける気にはなれなかった」

景秋が自身の思いを話す。黒服の男やI Sを纏った女性も黙って聞いている。

「そして、剣道を辞めた俺に待っていたのは罵倒と暴力の嵐だった。何をやっても「お前は弱い」「お前はそんなだからダメなんだ」とかの罵倒を受けて、殴る蹴るの暴力は日常的に起こった。そんな家族の事だ、俺が死んだ所で喜ぶだろうな」

「酷いな、そりや家族とは言えねえな」

黒服の一人がそう呟く。他二人もそれに同意するかのように相槌を打つ。

「別にお涙頂戴で話した訳では無いので、同情とかは要りません。強いて言うなら最後に、幼馴染みの女の子に謝っておきたかった位ですかね。心残りがあるとしたら…。その位なものです」

「そうか…。まあ遺言位は聞いてやるさ」

「ありがとうございます」

黒服の言葉に景秋は頭を下げた。

「貴方達、準備しなさい。そろそろ時間よ」

「了解」

女性がそう言うと黒服の男達が忙しく動いている。男達が用意したテレビにはモンドグロツソの中継が映っている。

「何言ってるのか全くわかんない」

「英語で話してるのよ。簡単に言うと貴方の姉は凄いつてさ」

「そうですか…」

そこで男達の声が聞こえてくる。

「こつちには織斑景秋がいるんだぞ！ハア!?ならこの声でも聞いて確かめるんだな」

景秋は嫌な雰囲気にも襲われる。男の言葉から察するに、イタズラ電話とでも思われたのだろう。

男が胸から拳銃を取り出し景秋に向け、引き金を引いた。景秋の左

太ももに被弾した。

「あゝっ、かゝあゝあゝあゝっ!!」

..... 熱い、焼ける様な熱さだ..... それに痛い!.....

景秋は声にならない叫びを上げる。額から汗は溢れ落ち、涙も滲み出す。

「..... これでも信じねえのかよ!..... ああ、そうだったな。お前ら日本人の一人がこんな世界にして、メチャクチャにしたんだっただな!」

男は半ば自棄になって電話を切って、パイプ椅子を蹴り飛ばす。

「落ち着けて!」

「これが落ち着いてられるか!アイツら、そんな名前の奴は居ないと抜かしやがった..... アイツら、コイツを無かった事にしやがったんだぞ!」

そうしてテレビの中継には決勝戦に出る織斑千冬が映っていた。

「ああ..... 俺はまた間違えた..... 俺はまた..... 失う」

「最後だ。遺言を聞こう」

黒服の男が景秋にそう問う。激昂したもう一人は未だに壁を蹴っている。

「弟と姉には「地獄に落ちろ、クソツタレ」と。幼馴染みの篠ノ之箒には「ごめん」とだけ伝えて下さい」

「そうか。まあ、約束は約束だ。その遺言は伝えてやる。それじゃあ..... 来世があるとしたら、こんな事にはならねえように祈ってるぜ」

黒服の一人がそう言つて引き金を引いた。勿論、景秋は被弾した。だが、幸か不幸か景秋は息絶えなかつたのだ。

それを確認もせず、誘拐犯達は撤収していく。

「すぐに死ねないつてのも辛いな..... それに..... 血が抜けてく感覚があるつてのは..... 嫌なもんだ.....」

..... ああ..... これが..... 死ぬつて感覚か..... 心地は最悪だ..... チクショウ..... それに..... なんでIS引っ張つて来てたんだよ..... ごめん、箒..... 約束..... 守れそうにねえや.....

景秋は最後に箒への謝罪を心の中で呟き、自分の死を覚悟して目を瞑った。

…… 暗い。…… 体は石の様に重く、歩くことも儘ならない。神経には何かしら詰まっているのでは無いかと思うほどに何かが邪魔をする。

暗く、細く、長い道を只ひたすらに歩く。そして一筋の光が見えて手を伸ばした所で目を醒ました。

「…… 死ななかつたのか、俺」

「目を醒ましたんだ、かー君」

「俺、死んだ筈じゃ？」

「ならここは天国なんじゃない？」

目を醒ました景秋を待っていたものは白い天井と知った顔だった。

「束さん。冗談は止して下さいよ」

「アツハハゝごめんね。」

「でも助かつたのも事実です」

「そうだね」

景秋の言葉に束は相槌を打つだけだった。

「怒らないんですか？」

「怒るとしたら君にではなくて、あの姉弟と箒ちゃんにかな。君は箒ちゃんの事を守ってあげていたのにな」

「昔の話です。でも、その約束ももう守れない。口だけの男だったって話で終わりです」

「それでも君は独りで戦ってきたヒーローだよ。誰にも助けを求められず、声の届かない孤独な世界で、一人の女の子を守ろうと戦ったヒーローさ」

「そうですか。まあ…… その一人の女の子の姉に言われるのなら嫌な気分では無いですね」

束の言葉に景秋は少し笑った。

「さて、君は既に戸籍上では死んだ人間だ。社会もそう認識するだろう。君はどうしたい」



「俺に… 俺に力を下さい！ 果たせなかった約束をもう一度果たせるだけの力を俺に！」

景秋の叫びは束に届く。束は答え、景秋に手を伸ばす。  
「ならおいで、君は… まだ生きなきゃならないからね」

こうして織斑一夏の兄、織斑景秋は再び生きる道を選んだ。その道が正しいか否かはまだ誰にも解らない。

ただ、この選択が世界にとって大きな選択だと言えるだろう。

## プロローグ・ⅠⅠ

プロローグ・ⅠⅠ

東に助けられてから早いもので、景秋も14歳になった。助けられてからは、東不在の間の家事全般。東が居るときは勉強を見てもらい、ISについての訓練も積んだ。

「たっだいま〜！かー君、帰ったよ！」

「おかえり、姉さん。いつもよりテンション高いね」

「そりゃ、良いことあったからね！」

「それは珍しい。いつもなら仏頂面で帰って来るのに」

景秋は料理をしながらそう言った。

「ねえ〜！ご飯まだ〜！」

「少し待ってよ。予想より早かったからまだ出来てないんだ」

「ええ〜」

東の催促を聞き流しながら黙々と調理を続ける。料理を完成させ、席に座っていた東の前に皿を置いた。

「ほら、これ食って静かにしててくれ」

「いっただきま〜す！」

「全く…現金な人だこと…」

景秋はキッチンに戻り、調理に使った器具を洗う。

「あ、そうそう。後で呼ぶから来てくれない？」

「姉さんの部屋？」

「うん。それまでは自由にしてて良いからさ」

「わかった。それよりも、早く食べてくれ。皿が洗えない。」

「はいはい」

そうして洗い物を済ませた景秋は筋トレをして時間を潰していた。

「…99…100!…終わったあ〜！」

「かー君…丁度良い感じだね。来て良いよ」

「解った。今行くよ」

東に呼ばれた景秋は東の部屋に入る。そこには銀髪の少女がベッドに座っていた。

「彼女は？」

「彼女はクロエ、クロエ・クロニクル。今日、施設潰した時に保護した子だよ」

「初めまして、景秋様」

クロエと呼ばれた少女は綺麗に腰を折り、頭を下げた。

「様付けで呼ばれる程、立派な人じゃないから普通に景秋で良いよ」

「わかりました、景秋」

「うーん……仕方無いのかもしれないけど、敬語も違和感あるなあ」

「まあ、追々慣れてくよ。くーちゃん、少し外してくれないかな？ プライベートな話になるから」

「わかりました。話が終わりましたら、お呼びください」

クロエはそう言って部屋から出ていった。

「それで、話って？」

「くーちゃんの事。彼女は目が見えないんだ」

「何となく予想はしてたけど……そうか、治せないの？」

「不可能ではないさ、この天災に掛ければね」

東は自信ありげに自分の胸を叩いた。

「まあ、それだけ自信ありげに言うんだ。可能に出来るって信じるよ」

「それとね、くー君には妹がいるのです！」

東の言葉に景秋は首を傾げる。弟と姉は居た。だが、妹がいるなんて事は一度も聞いた事が無かった。

「姉さん、冗談止してくれよ。俺には弟しか居ない」

「厳密には姉のクローンだけどね、名前はマドカ。今は亡国企業にいる」

「……」

「会ってみるかい？」

東は景秋のどうすれば良いのかわからない表情を読み取って言葉を放った。東の言葉に景秋は答える。

「……ああ、会って話してみたい」

「なら早速明日会いに行こうか。彼女達の協力が無いと君はIS学園に行けやしないんだから」

「わかった。話は以上かな？」

「うん。おやすみ、かー君」

「おやすみ、姉さん」

こうして、景秋は眠りについた。

翌日早朝。景秋と東、クロエは亡国企業が隠れ蓑にしている企業、エヴァンスエレクトロニクス社に来ていた。

「おおくデケエビルだな」

「そりゃ、普通に大企業だもん。IS以外の電化製品は大体がこの会社の物だったりするし。まあ、いざ売るときは会社名変えちゃうから、誰も解らないけど」

「なんで名前変えるんだ、姉さん。そのまま売りや良いのに」

景秋の問いに、東が答えようとした時にクロエが横から答えた。

「それは・・・」

「それはバレないようにだと思えますよ、景秋。大企業とは言え、亡国企業が隠れ蓑にしている。何かの拍子にそれが露呈すれば困る・・・と言う事かと」

「言われてみれば、確かにそうだな・・・」

そんな会話をしながら社内に入る。ロビーには社長とその秘書の様な女性が座って待っていた。

「待っていたよ、博士。それに景秋君もね」

「どうして俺の名を？」

「マドカから報告は受けていたからね。心優しい兄だといつも言っていた」

「そ、それは・・・どうも」

景秋は引き気味に頭を下げた。

「まあ、ここでは込み入った話も出来ません。俺の部屋に」

「こちらです。着いてきてください」

秘書に案内され、景秋達は社長室へと入った。

「改めて。この会社の社長兼、亡国企業のメンバーを勤めているおわたりのぼる  
大鳥昇だ。こつちが・・・」

「社長秘書兼、亡国企業メンバーのスコール・ミューゼル。よろしく」  
二人の挨拶を終え、話が始まった。

「さて、景秋君。君には僕たちの目的を話しておこうと思う」 「知ってます。世界を元に戻す事でしょう？ I Sが兵器となる前に」

「丸は与えられないな、少し違う。 I Sを元の姿に戻す事だ。 I Sは本来、宇宙開発目的のプラットフォームでしょう？ 篠ノ之博士」

昇の問いに東は悲しそうな顔をしたが、何気無く答えた。

「そうだね。元々はそのつもりだった。けど、世界はそれを認めなかった。… そりゃそうだよね、白騎士事件であんなにも人を殺したんだ、兵器として使おうと思う気持ちも解らんでも無いさ」

「そう。だから兵器として使われる I Sを極限まで減らし、 I Sを宇宙開発目的として使用させるのが我々の目的。世界を元に戻す事もあながち間違いでは無いけどね」

昇はそう言って息を吐く。

「そうだ、君はマドカと話がしたくて来たんだったね。隣の部屋にいる。話しておいで」

「分かりました、それでは」

景秋は頭を下げ、隣の部屋に向かった。

「さて、景秋君とマドカを I S 学園に行かせるのは構わないが、何をさせる気だ？」

「取り敢えずは私達の味方になってくれる子を探させるのと、かー君を箒ちゃんに会わせる事かな。箒ちゃんなら絶対に仲間になれるしね」

東の言葉に昇が疑問を口にする。対する東はあつけらかんとしていた。

「まあ、仲間が増えるに越したことは無いが… 信用出来る仲間を連れてくるんだろうな？」

「さあ？ 知らないよ、そんな事。私は天災であってエスパーでもニュータイプでも無いからね」

「それもそうだ」

「でもかー君には人を見る目があると私は思う。なんせ私の箒ちゃん

の事好きになる位だし？」

「……今の言葉が無ければ、締まったのに」

「アツハハ」

昇は溜め息を溢した。

「えっと…初めまして…君がマドカ？」

「ああ…」

「……」

……会話続かねえ……

景秋は目の前に座る少女——マドカと自分のコミュニケーション能力の低さに頭を抱えたくなった。

……なんて言えば良いんだ？…久し振り…というか初対面だ。ご趣味は…つてのも違うよなあ…見合いじゃ無いし……

「おい、景秋」

「ん？」

話の内容に困っていた景秋にマドカは声を掛けた。

「お前は強い人間の筈だ。なのに何故弱く見せる」

「さて、なんの事かな？」

「誤魔化すな。お前が篠ノ之博士に拾われる前、お前は強かった筈なんだ。なのに自分からその強さを捨て、弱くなろうとした。私には理解出来ん」

「なら、しなくても良いさ」

マドカの言葉に景秋はそう言った。マドカはその言葉に驚きを隠せない。

「俺と君は兄妹なのかもしれない。けど、だからと言って全部を理解するなんて事は出来ない。でも、理解出来ないからと遠ざけるんじや無くて、知ろうと歩み寄る事も出来る筈だ」

「そうか…なら、なんでだ？」

「急だね。もっとゆっくりで良いのに…まあ、良いけどさ」

景秋は笑って言葉を続けた。

「俺は剣道やってたんだ。けど、自分と周りの実力差とか温度差が怖

くなつた。弟への風当たりは強くなる一方。そしたら勝つ事と稽古する事が怖くなつちやつて…」

「それで辞めたと？後悔は無いのか？」

「無いね。後悔も未練も無い」

マドカの問いに景秋はハッキリと答える。

「話はそれくらいにしてさ、二人で戦ってみない？」

話を終えた束と昇、スコールが部屋に入ってくる。

「戦うつても、俺にはI Sが…」

「私が用意しておいたから大丈夫だよ、かー君。さて、マドカちゃんは  
どうする？戦いたい？」

「私より強いのなら戦いたい」

「かー君は強いよ。少なくとも、この中では私の次に強い」

「なら戦いたい」

マドカの言葉に束は頷く。

「うんうん。ならここのテスト用アリーナでやろうか」

「人払いはしておこう。二人とも存分に戦えよ」

こうして景秋とマドカの模擬戦が始まろうとしていた。

## プロローグ・ⅠⅠⅠ

プロローグ・ⅠⅠⅠ

テスト用アリーナにて――

「これが、かー君の劔胄。武州五輪だよ」

「これが…俺の…劔胄…」

景秋の目の前にはシンプルながらも圧倒的な存在感を醸し出す劔胄に息を飲む。

「…千日の稽古を劔とし、万日の稽古を胄とす。以て此れ我が劔胄なり」

景秋が口上を唱えた途端に、景秋の体を劔胄が覆っていく。すると、束が景秋の肩を叩いた。

「マドカちゃんにも劔胄持たせてるんだよ。見せてあげて」

「分かりました…世に鬼あれば鬼を断つ。世に悪あれば悪を断つ。ツルギの理ここに在り！」

対するマドカも圧倒的な存在感を持つ劔胄を纏っていた。

「これが私の劔胄、相州五郎入道正宗。悪を断つ最強の劔胄！」

「俺に正義だの悪だのは似合わない。あるのはただ、人斬りの心と果たせなかった約束のみ！」

マドカと景秋は共に太刀と大太刀を八相に構える。そして、束のスタートの合図がアリーナに響いた。

「戦闘…開始！」

「ウオオオオオオ！」

「ハアアアアア！」

束の合図と同時に景秋の大太刀とマドカの太刀がぶつかり合い、金属音を鳴らしながら火花を散らす。

鏢迫り合い。機体性能はほぼ互角。残るは纏う者の力、鏢迫り合いでは僅かにマドカが後ろに下がった。

「クツ…まだまだあ！」

マドカの斬り下しを景秋は最低限の動きで回避し、逆に胴に横一闪。続けて景秋はマドカの背中に袈裟斬りの様に斜めに斬って、続け



て背中に蹴りを叩き込む。

「どうした、マドカ。こんなものか？強い奴と戦いたいと言うから、久し振りに覚悟して全開でやってるんだ。こんなので終わったら詰まらない所かアツプにすらならねえぞ」

「……」

景秋の言葉にマドカは言い返せない。だが、刀を支えに立とうとする。

「もう止めようか？今のかー君にはマドカちゃんに勝てない。食らい付いて惜しい所まで続けるって言うかもしれない。けどね、まだ刀一本でやってるだけマシだよ。二刀流になったらいいよ最後だ」

アリーナで試合を観ている東は昇にそう提案した。だが、昇は聞くとうとせず続行。東は何かを危惧して止める様に景秋の過去の一部を語った。

「まだやらせてみよう。マドカは諦めて無いようだし」

「それで心が折れるかもしれない。かー君は簡単に相手の心を折る。前、彼がまだ剣道を辞める前に見た試合もそうだった。

全国の決勝戦での話だよ。残り時間30秒、かー君が1本取られて不利。相手もそれで勝ちを確信したんだろうね、その気持ちをかー君は簡単に破壊した。

30秒も要らないと言わんばかりに構えを崩しては直してを繰り返して、結果残りは10秒。そのたった10秒で2本取り返して優勝を決めた。その後、相手の子は剣道を辞めたらしい。

そりやそうだよ、自分が1分以上掛かって、更にかー君に取らせて貰った形で1本取ったのに、相手はその半分以下のたった数秒で2本取ったんだもん。心位なら簡単に折れるさ。

かー君が剣道を辞めた理由も、気持ちも解る。だからこそ、マドカちゃんとこれ以上戦わせちゃいけない」

東の話を聞いた昇は少し考え込んだが、続行させると口にした。

「いや、続行させる。今のマドカに必要なのは敗けを知る事だ。敗けを知ってマドカは強くなる」

「知らないよ、それで再起不能になっても」

「その時はその時だ。それに、この程度で再起不能になる程度の奴ならこの先の戦いで勝てないさ」

昇達の会話はアリーナで戦う二人に届くことなく、終わった。

「まだやるか？」

マドカは無言だが頷く。

「ハア……。なら俺も二刀流で相手しないと失礼かな」

マドカは立ち上がり、刀を中段に構える。景秋は左手に小太刀を持ち、構えた。

「景秋……ここまでの強さがあつて、何を怖がる！」

「人との繋がりが切れるのが怖い。裏切られるのが怖い。失うのが怖い。俺は臆病者で、強者と呼ばれる部類に入ってた男だ。だからこそ、力の使い方を間違えるのが怖い……。けど、勝負においては、ギリギリの……負けるかもしれないって所で戦うのが心地良い。そんな自分が……怖い」

マドカは初めて他人の本心を聞いた気がした。先の会話でも景秋は本心と話さなかった。

景秋は全てが怖い。恐らく、本心を知られる事も怖いのだろう。そんな景秋が本心を語った。マドカにとって初めての事だ。

「怖い……か……」

「ああ、怖い。臆病者だと、腰抜けだと罵るか？」

「いや。お前の気持ち、解らないなりに理解するつもりだ」

「この短時間でよくもまあ、成長したもんだ。さて、いくぞ」

「ああ、来い！」

景秋の小太刀が振り下ろされる。それをマドカは受け止めるが、右の大太刀に斬られる。

「クツ……ッ！」

「今の俺が二刀流なのを忘れたか？」

「なら……これで！」

マドカの刀に熱を帯びていくのを察した景秋は距離を取った。

「おいおい……どうなってやがる…… 武州五輪、解析しろ」

景秋は今まで呼ばなかった名を呼び解析をさせた。

《御堂、奴の刀が熱源の正体だ。恐らく、一撃でも食らえば致命傷になりうる》

「コピー出来るか？」

《不可能だ。原理も理屈も不明な上にあれは能力ではなく武装だと思われる》

武州五輪の機械的な声を聞きながら、景秋は冷や汗を流す。

「これが私の武器の一つ。おぼろ・しょうしけん 隴・焦屍剣！」

「厄介な代物出して来やがって……」

《御堂、恐らくあれは使用者の手まで焼くぞ。使用者の事を思うなら早急に倒す事だ》

「わかってるよ、武州五輪。その為の力を貸せ」

《諒解》

武州五輪はその言葉だけを残し、声が消えた。

「自滅覚悟の一刀なんて恐ろしくない。もっとも恐ろしいのは、相手を殺す殺気が……意思が感じられる一刀だ」

景秋は覚悟を決めて飛び出した。

「今までの堅実な戦い方はどうした！」

「……」

マドカの問いに答えない。だが、マドカの灼熱の刀が景秋の肩を割く。

「ッ……ぐうッ！」

声を噛み殺し、灼熱の刀を左手で掴む。

「な、何をー！」

「これで……お前の攻撃手段は無くなったな……」

その光景を見れば誰もが思う【イカれている】と。灼熱の刀、使用者の手すら焼くそれを肩で受け、更には掴むのだから。

見えはしないが、仮面の奥にある素顔は歪で狂った様な笑みを浮かべているに違いない。そう思うしかない程までに景秋の行動は常軌を逸していた。

景秋の攻撃手段は至って簡単。近い間合いでの脇差による攻撃のみ。何度も斬り着ける。

稼働限界かエネルギー切れか、はたまたマドカの限界なのか、正宗の装着が解け、マドカがアリーナの地面に倒れた。

「はあ…俺も少し疲れた…」

景秋はそのまま眠るように気絶した。

「まあ、仕方無いかね」

気絶した景秋を束は呆れと安堵が混ざった様な表情で見ている。

「ッ…」

景秋は目を覚まし、起き上がる。

「お、目が覚めたみたいだな」

「昇さん…。マドカは」

「今はスコールが説教中。君も後で篠ノ之博士から説教だよ」

「アツハハハ…。ハア…」

昇の言葉に景秋は乾いた笑いと溜め息を吐く。

「あんな無茶したんだ、当然だろ？修理だって篠ノ之博士がするんだぜ？可哀想だろうが。後で謝つとけよ」

「は…はい」

「つたく…世話の焼ける小僧共だよお前らは」

昇はグチグチ何かを言いながら病室を出ていった。そこに入れ替わる様にクロエが入ってきた。

「景秋、束様がお呼びです」

「ハア…俺の人生もここまでか…」

景秋は何かを悟った様な表情で束の元へ向かった。

結果として景秋は束に殴られ、こっぴどく叱られた。その際、言われた言葉『自分の体をもっと労ってあげて』とだけ言われた。

そして現在、景秋は部屋にマドカと二人きりである。

「あの…迷惑掛けたみたいで…ごめん…なさい」

「気にするな。お前が勝とうと本気でやったのなら仕方無い。けど、二度と自滅覚悟の攻撃なんかするなよ」

「あ、ありがとう…。兄さん…」

「へ？」

景秋はいきなりの事で頭が追い付かず、変な声が出る。

「す、スコールに言われたんだ。この方が兄妹っぽいつて…。」

「プツ…アツハハハハハ。マドカ、お前そんな事気にしてたのか？」

「あ、当たり前だ」

「気にしなくても良いのに。俺は別に呼び捨てでも気にしねえよ」

景秋が笑いながらそう言った。だが、マドカは意見を変えようと思わない。

「兄なら敬わなければならぬから…それに、私なりの好意と思ってくれて良い…」

「なら好きにしな。俺はこれ以上何も言わねえよ」

景秋はそう言って部屋のベッドに横たわると、そのまま眠った

## キャラ設定 更新あり

キャラ設定 更新あり

名前：東雲景秋しのめかげあき

本名：織斑景秋

年齢：16

身長：175

体重：77

IS適正：C

国籍：日本（偽造）

趣味：ツーリング

特技：一度見たものを覚え、再現する

劔冑：武州五輪

〈プロフィール〉

織斑家に捨てられた元織斑家の長男。元々は姉である千冬以上に剣の才能の持ち主だったが、周囲との温度差や実力差、弟への風当たりが強くなるなどの要因によって剣道を辞める。

辞める前は全国大会で優勝するなど、実力は折り紙つき。なのだが彼独自の「負けるかもしれないギリギリの所で戦うのが心地良い」という勝負観により、心を折られた選手は少なくない。

現在の彼は全てに恐怖しながら、独自の勝負観を否定して戦う。當時を知る東曰く「今の方が断然強い」との事。

篠ノ之箒とは幼馴染みの関係で《何があっても俺は箒の味方で、何があっても守り続ける》と箒に約束しており、自身が剣道を辞めるまでは約束を守り続けた。辞めてから約束を果たせなかった事を悔いている。

東のIS開発を手伝ったり、劔冑の整備をしているため、整備士・開発者としても東の次位には優秀である。

両利きだが、普段は左利きとして生活している。容姿は一夏とそっくりだが髪が長く、どこか陰鬱な雰囲気を持っており、目付きが鋭い。

制服はIS学園の物ではなく、黒のボタン無し学ランを着用。

劔冑を装甲する為、IS適正は無いに等しい最底辺である。

銘：武州五輪

所属：―

生産国：―

種別：第3世代IS（建前上）

兵装：大太刀、小太刀、脇差

仕様：汎用／白兵戦

待機状態：刀の鏢

陰義：術理吸収

誓約の口上：千日の稽古を劔とし、万日の稽古を冑まもりとす。  
以って此れ我が劔冑なり

〈設定〉

景秋が装甲する真打劔冑。建前上は第3世代ISとなっている。  
束の自信作であり、どんなISよりも性能が高く、ISを越える為の劔冑。

顔はシンプルなデザインだが側面から生えた太く長い2本角と背面に円の様広がった母衣を持ち、存在感を放つ姿をしている。

陰義の《術理吸収》は他のISや劔冑が持つ単一仕様能力や陰義、専用武装を再現し習得する事が出来る能力。

使用時は口の装甲が開き、能力に応じて装甲の一部が変化する。

能力に欠点が存在し、習得には《技や武装の原理を理解する》事が必要である。それ故に受けた技であっても習得出来なかったりする。

名前：東雲円香しのめまどか

本名：織斑マドカ

年齢：16

身長：160

体重：46

IS適正：A

国籍：日本（偽造）

趣味：ゲーム・景明のツーリングに付き合う

特技：コインを縦に重ねる

劔冑：正宗

〈プロフィール〉

織斑千冬のクローンで、現在は景秋の妹。亡国企業のエンジニアとして働いていた時も景秋の監視を任されていた。

本来は冷酷な性格だが、景秋の言葉とスコールの言葉で寄り添う事も大切だと気付き、今では景秋にベツタリ。剣術も景秋に教わっている為、中堅以上の実力は持っている。

景秋曰く「才能は千冬譲りの所がある気がする。剣筋が似てる」との事。本人はその事に嫌悪感を持っていたりする。

容姿は本編通り、制服はIS学園のものを着用。

銘：相州五郎入道正宗

所属：―

生産国：―

種別：第3世代IS（建前上）

兵装：太刀、脇差、七機巧

仕様：汎用／白兵戦

待機状態：髪飾り

陰義：因果観面

誓約の口上：世に鬼あれば鬼を断つ。世に悪あれば悪を断つ。ツルギの理ここに在り。

〈設定〉

円香が装甲する劔冑。この劔冑も建前上は第3世代ISとなっている。濃藍の装甲を持つ劔冑。

元々は景明の劔冑になる予定だったが、景秋本人の特技との相性を考え、正宗が円香の劔冑になった。

陰義の《因果観面》は相手が放ったものをそのまま返す。その性質



の為、最低でも一回は受け耐えきる事が必要。その為、下手をすると返す以前に初撃で撃破、著しいダメージを負う事になるというリスクが存在する。故に治癒能力がとて高い。

名前：篠ノ之束

年齢：24

身長：171

体重：48

IS適正：S

国籍：日本

趣味：機械いじり

特技：色々

IS：無し

〈プロフィール〉

ISの開発者にして天才。白騎士事件を起こしてしまった事に罪悪感を持っており、毎年その時期になると慰霊碑に献花をして謝り続けている。

ISを本来の目的の為に使うと誓っている為、ISには兵器として乗る事は基本的にしない。

景秋とクロエの姉になってからは景秋と協力してクロエの目を見える様にするためのナノマシンの開発を行っている。

自分の妹である箒の事も溺愛しており、景秋と早くくっついてくれないかなあと四六時中考えている。

力こそが全てだと思っている千冬とは既に縁を切っているものの、連絡がくればそれなりの対応はしている。

## IS学園編

### 第一話：入学

#### 第一話：入学

「いよいよIS学園への入学しなければならない。そんな中、景秋とマドカは…」

「マドカ、なんで目覚ましを止めた？」

「嫌いから…」

「目覚ましはそういうものだ」

「うん…」

寝坊していた。会社側が社員の社宅として建設したタワーマンションの空き部屋に住み始めた二人だったが、結果は入学式を寝坊するというトラブルになっていた。

「ああ…クソ…モノレールの発車時間に間に合うか？」

「バイクなら間に合うんじゃない？」

「しようがない。バイクで行くぞ」

「やったね」

景秋の視界の隅でガッツポーズをするマドカをスルーして景秋はバイクの鍵とヘルメットを持って部屋を出た。

「鍵閉めたか？」

「閉めたよ」

「電気とか消したか？」

「消したよ…心配性過ぎ」

「念には念を…」

景秋はそう言いながらバイクのエンジンを掛け、スロットルを回す。

「スピード違反にならない程度で飛ばすからな、しっかり捕まっつけよ」

「うん」

マドカの返答を聞いた景秋はモノレールの駅までバイクを飛ばし

た。

「ハア… ハア… ハア… 間に合ったあ」

「ほ、本当に良かったあ…」

二人はなんとかIS学園に辿り着き、職員室らしき所へ向かう。

「すみませくん。企業代表の東雲です」

「同じく企業代表の東雲です」

「ああ、到着が遅れると聞いてましたが…。案内の教師を連れてきますので、お待ち下さい」

「わかりました」

そうして二人で待っていると、二人が良く知った顔。織斑千冬がやって来た。

「全く… 遅刻などしおって…。私が貴様らの担任になる織斑千冬だ」

「どうも、エヴァンスエレクトロニクス社企業代表の東雲景秋です」  
しののめかげあき

「同じく、東雲円香です」  
しののめまどか

二人はそう言って頭を下げる。そこで、千冬が反応した。

「景秋…？」

「はい？」

「お前、なんでこんな所に？」

「あの… 誰かと間違えてませんか？俺は確かに景秋ですけど」

景秋がそう言うのと納得していないような顔をした。

「そ、そうか… 居なくなった弟に似ていてな。すまない」

「いえ、他人の空似… と言うのもありますので。それで、案内は…」

「ああ、すまない。こっちだ」

千冬には（本当に別人なのだろうか）という疑問が残った。

教室に着いた景秋達を待っていたのは異様な空気だった。織斑一夏が自己紹介だったのか立っていた。内容が内容故に千冬は名簿で頭を叩く。

……  
口頭注意が先じゃないか？……

そう景秋が思った矢先。

「げえっ！関羽!？」

「誰が三国志の英雄だ、馬鹿者！」

更にもう一発。その時、景秋は思った。この人に口頭注意という言葉は存在しないのだと。

「東雲兄妹は、篠ノ之の後ろだ」

「わかりました」

円香と景秋はそのまま席に着き、自分の自己紹介を待っていた。

自己紹介の番が漸く回って来て、景秋は席を立つ。

「東雲景秋です。趣味はツーリング、ISについては未熟者故、ご指導・ご鞭撻の程、宜しくお願いします」

景秋はそう言うって頭を下げた。そこで名前を聞いた織斑一夏と篠ノ之箒はハツとするも、その場では黙っていた。

そして周りの女子達は景秋の持つ陰鬱な雰囲気と鋭い目付きに若干だが、萎縮していた。

「同じく東雲円香です。趣味はゲーム。宜しくお願いします」

円香の自己紹介も終わり、景秋はクロエのナノマシン開発の為に携帯端末を使って色々な計算を行うのだった。円香も既に携帯端末でゲームを始める。

「うくん…なるべく視界は自然に、そしてクリアに見えた方が良いやなあ…そうなるよ…」

景秋はそんな事をブツブツと呟くのだった。

自己紹介も終わり、休み時間。件の少年が景明の元にやって来た。

「俺は織斑一夏、宜しくー！」

「東雲景秋だ、宜しく頼む」

「お互いにIS動かしちまって散々だよな。まあ、二人しか居ないわけだし、仲良くやろうぜ」

「ああ…」

景秋は正直、仲良くしたいとは思わない。自分のお陰とは言いたく

ないが、それで風当たりが弱くなったのに自分の立場が大きくなった途端に本性を現したのだから。

そんな人間と仲良くしたいなんて微塵も思いはしない。

「それよりも、後ろにいる女はお前に用があるようだが？」

「え?… ほ、箒!？」

「一夏じゃ無い。東雲に用がある」

「ん? 俺か。まあ、良いが… ここでは嫌なのか？」

景秋がそう言うのと箒は頷いた。

「あ、ああ。頼む」

「なら早く移動しよう。時間が惜しいからな」

景秋はそう言うって席を立つと人気の少ない所へ向かった。

「それで、俺に何の用かな？」

「誤魔化さないでくれ! 景秋なんだろう!？」

「確かに景秋だけど、君達の言うてる景秋とは別人だよ」

景秋はそう言うって否定する。それでも箒は引き下がらない。

「いや、景秋だ。確かに、髪型も違うし目付きも鋭くなった。だが、目は腐っていない。あの時の景秋と同じ目だ」

「他人の空似ってヤツさ。俺は君の事を知らない」

箒の言葉を景秋は否定する。だが、否定出来ない事実を突き付けられた。

「昨日、姉さんから連絡が来た。見知った顔がIS学園にやって来ると」

「それって織斑の事じゃないのか？」

「それには写真も添付されていた。これがその写真だ」

箒が見せてきた写真を見る。その写真は正真正銘自分の写真だった。14歳の頃だが、今とあまり変化は無い。

…… 東姉さん… 帰ったら説教してやる……

「はあ… それで? お前は知ってて嘘付いてた訳か？」

「そ、そうなるな…。すまん」

「写真が送られてきた事を先に言えば誤魔化さずにすんだのに」

景秋は頭を掻く。その言葉に箒は問う。

「やつぱり… お前は…」

「ああ。この際だ、言った方が楽だろうしな。俺が織斑景秋だ。久しぶりだな、箒」

景秋はそう言つて微笑む。

「どれだけ…！どれだけ私が心配したと…！」

「ごめん、箒」

「景秋が死んだと聞いて、お前の遺言を聞いて、私は自分を責めた。お前は約束を果たそうとしていたのに… 私は…」

箒は景秋に抱き付いて涙を流す。今までの事を懺悔し、景秋へと謝罪する。

「気にするなよ、箒。終わった事だ」

「ああ、でもなんでIS学園に？」

景秋は気にするなと言つて笑う。

「箒、お前との果たせなかつた約束を果たしに来た。俺は何があつてもお前を守るし、お前の味方でいてやる」

「景秋… ありがとう」

箒の言葉に照れた様に景秋はそっぽを向く。そして時間を見て少し残念そうな顔をした。

「あく… この時間じゃ授業出れねえな」

「フツツ… そうだな」

結局二人は授業をサボり、次の休み時間に戻ることにした。

バレ無いように授業に戻った矢先の事。クラス代表を決める事になった。

「自薦他薦問わない。誰かいないか？」

「私、織斑君を推薦します！」

「私も！」

クラスの色々な人が織斑を推薦していく。そこで織斑が立ち上がり、辞退を申し出る。

「すみません、辞退出来ませんか？」

「無理だ。推薦した者の意見はどうなる」

「なら俺は東雲を推薦する！男ってだけで推薦されるなら東雲だって  
そうだろう」

織斑の一言で景秋は残りの生徒からの推薦を受ける。

「私も東雲君に」

「私も！」

ど……困ったなあ……そんなものになるつもり無いんだ  
け……

「すみません、俺も辞退で。企業の方があるので」

「さつきも織斑に言っただろう。推薦した者の意思を尊重すると」

「いや、俺企業代表の仕事が……」

「それでもだ」

千冬の否定の直後。金髪ロールの生徒が机を叩いて立つ。

「冗談じゃありませんわ！」

「なあ、箒。あれだれだ？」

「あれは確かセシリア・オルコットだな。イギリスの代表候補生だ」

景秋は席が前である箒に問い、答えに頷く。

「へえ、ありがとう」

「うん」

景秋は箒に礼を言ってオルコットの話に耳を傾けた。

「本来ならこの私が選ばれるべきなのに、物珍しいというだけの理由  
で無知な男が代表になるなど、いい恥さらしですわ！」

貴族である私に1年間味わえとおっしゃるのですか!?!大体、無知な  
極東の猿に代表が務まりますの？実力からいえば、私の方が上でして  
よ!!」

「……………」

オルコットの発言にあの千冬でさえ黙る。周りの生徒や教師です  
らオルコットを睨み付けている。

景秋は怒りよりも呆れの感情の方が強かった。

…………あの生徒。やらかしたな…………

「それに……」

…… いや、まだ続けるの？君？……

オルコットが言葉を続けようとした所で織斑が声を荒げる。

「いい加減にしろよ！黙って聞いてれば、好き勝手に言いやがって！イギリスだって同じ島国じゃないか！碌な料理も作ることもできないくせに！」

「なっ!?私の祖国を侮辱しますの!?!」

「先に言ってきたのはそっちだろ!!」

二人のやり取りを景秋は残念そうに見ている。

…… 話ややこしい方向に持って行きやがって… 收拾つかねえじゃねえか……

景秋は溜め息を吐きながら織斑達に聞こえる声で呟いた。

「ハア… あゝあゝ、高校生にもなつて何を低俗な口喧嘩してんだか」

「なんだと!?!」

「なんですって!?!」

食い付いてきたなど言わんばかりに景秋は笑って言葉を発する。

「だってそうだろ？この話し合いは本来、クラス代表を決める話し合いだった筈だ。」

それにメシマズだの極東の猿だのと… お門違いにも程があるぞ。

それにな、お前らが乗ってるISは誰が作った？篠ノ之束だろう。

そこで、東博士は日本人だ。オルコット、お前はISの開発者を猿って言ったんだぜ？そういうのって良くはないよなあ?」

景秋は元々の目付きの鋭さでオルコットと織斑を萎縮させる程に威嚇する。

「さて。これで謝って、はい終わりともいえないだろう？だから提案なんだけど、推薦された俺と織斑、オルコットで総当たりの決定戦をやれば良い。勝ったヤツが全部決める。それでどうだ？」

景秋の提案にオルコットと織斑は頷く。

「それで良いぜ。手っ取り早くてわかりやすい！」

「私も異論はありませんわ」

「これでどうですか、織斑教諭？」

景秋は千冬の方へ向いて問う。千冬は頷いて答える。



「あ、ああ。問題ない。なら一週間後、アリーナにて決定戦を行う！」  
千冬のその言葉で皆は意識を勉強へと移して行った。

授業を全て終え、後は帰るだけとなった。

「さて、マドカ。帰るぞ」

「うん」

「待って下さい！」

「ん？ああ、山田先生どうしました？」

景秋が振り返ると、山田先生が肩で息をしていた。

「ハア…ハア…ハア…お、お二人は寮で生活していただきます」

「いや、え…？俺ら社宅の方でって話では？」

「そう伺ってますが、それでも何かあったら困るとの事で…」

恐らく、景秋の目付きの鋭さに、今にも泣き出しそうな山田先生の表情を見た景秋は自分の目付きの悪さを恨み、溜め息を吐いて話を聞く。

「ハア…それで、俺らの部屋はどこに？」

「こ、こちらのメモに書いてありますから！」

……ああ、これは完全に俺の目付きのせいだな。ほんの一瞬で目を反らしたよ、この先生……

「そ、それでは…」

山田先生は駆け足でどこかへ去って行き、景秋は受け取ったメモと鍵をポケットにつっこんで寮へと向かった。

寮の自室に着いた円香と景秋は、いつの間にか運ばれていた自分達の荷物を整理したり盗聴機の有無の確認を終え、ベッドの上で休んでいた。

「円香、盗聴機はあったか？」

「えっと…蛇口の中に一個。クローゼットとかベッドの下に数個。でもそのくらいかなあ」

「コンセントの中とかありそうだな」

「でも盗聴機があるって事は危険云々は嘘って事になるよ？」

「盗聴機がある事も問題だけど、誰が何の目的で仕掛けたのかが問題だろ」

二人は全部の盗聴機を見つけたとは思えず、ハンドシグナルで話していた。

「どうせ、あの織斑じゃないの?」

「決め付けるのは良くないぞ、円香。この学園の生徒会長様だって確か日本の暗部の人間だ。可能性はある」

円香の言葉を否定して景秋はドアの方へ向かう。

「そつかく兄さんは博士に連絡?」

「一応な。外に出てくる。その間にも盗聴機探しておいてくれ」

「了解」

円香にそれだけ言い残して、一人きりになれる屋上へと向かった。

「さて、姉さん。どういう事だ。なんで箒に俺の写真を送った?」

「結局話すのなら早く正体を話すのが一番だと思ってね。別に送らなくても良かったけど、かー君と箒ちゃんの間トラブルが起きて、正体が解つてもギスギスしてるのなんて嫌だから。だから送った。ごめんね、嫌だった?」

束の答えを聞いて、景秋は一人笑った。

「いや、姉さんは無駄な事はしない筈だし、それに…後で叱ってやろうなんて思ってたけど、理由聞いて納得した自分がいるからさ。今は何とも思わないよ。……クロエは?」

「もう寝ちゃった。景秋が連絡をくれませんって拗ねてそのまま寝ちゃったよ。明日にでも謝りなよ?」

束の言葉に苦笑いを浮かべて答える。

「勿論。大切な家族なんだ、俺にやれることならなんだってする。後で俺なりに纏めた資料を送るから目を通しといて」

「はいはい、わかったよ。それじゃおやすみ」

「おやすみ、姉さん」

そこで電話を切る。景秋は背後にいる人に声を掛けた。

「盗み聞きとはあまり関心しませんよ、生徒会長殿」

「あら、バレてた?」

「当たり前でしょう。と言うか、わざとバレる様にしてましたよね？」  
「それもバレてるのね…。」

景秋は水色の髪色をした少女と対面する。

「それじゃあ、俺はこれで」

「あら、そう？なら、一つ忠告しておくわ。私の学園で好き勝手はやらせないわよ」

「さて、なんのことやら」

景秋は惚ける様に笑ってその場を後にした。

「さて、俺らの目的に気付けるかな？生徒会長… 更識楯無」

景秋は狂った様な笑みを浮かべて自室へと戻って行った。

## 第二話：武者は轟き、空を駆け

第二話：武者は轟き、空を駆け

クラス代表決定戦までの一週間。景秋は特に何もしなかった。いや、しなかったと言うよりは『出来なかった』と言う方が正しいだろう。

した事と言えば、オルコットの戦術を見た事と箒から少しばかり剣術を教わり、自分の勝てる方法を考えた程度のものだ。

「ハア… 結局、試験の映像見て箒から剣術教わっただけか… B T兵器についても調べはしたけど、コピーして使いこなせるかと言われれば自信は無いしな」

「ま、まあ、兄さんならなんとかなるって。それに私もピットに入つて応援するから。絶対に勝つてよね」

「可愛い妹の頼みだしな… 勝つてくるさ」

景秋はそう言つて腰を上げると、重い足取りでピットへと向かった。

「織斑はまだI Sの設定が終わっていない。先にお前が出る」

「あの… 俺は後つて話じゃ?」

「良いから出ろ、命令だ」

千冬のその言葉に景秋の表情は険しくなる。

「ここは軍隊じゃねえぞ。学校だ。テメエの指導方針にや目え瞑つてやるが、命令だとか絶対だとかそんな俺の知ったこつちやねえ」

「貴様…!」

「その貴様つてのも前々から気になってたんだよね。俺の名前は東雲景秋だぜ… まあ、良いや。さっさと終わらせられるならそれに越したことはない。先に行つてあげますよ」

景秋は優越感に浸つた様な顔で千冬に告げる。この表情は演技で相手が少しでも嫌だと思えば御の字のつもりでしたものだ。

だが、結果は激怒。もはや殺しに来る様な表情だった。

「オルコットの相手、してきますかね…!」

観客含めた全員に姿が見える様にピットの出口ギリギリに立つ。

実際、ISに乗っていない景秋を見て観客達はざわついている。

「あら？ISに乗らずに来るとは、勝負を諦めましたの？」

「いや何。俺のISは少々特殊でな、この姿で来なければ替え玉だのなんだのと言われそうだからな」

「なら勝負は諦めてない？私に勝てると思いで？」

オルコットの挑発。乗る必要は無く、その程度の挑発でと逆に嘲笑してやれば良い。だが、景秋は昔から変わらぬ歪で狂った様にクツクツと笑う。

「ククククク…フハハハハハ!!逆に問うが、俺がお前ごときに負けるとでも？」

「な、なんですすって！」

「まあ、やってみなきやわからねえよな……………千日の稽古を劔ちからとし、万日の稽古を胄まもりまもりとす。以って此れ我が劔胄なり！」

顔に右手を添え、口上を唱える。言い終わると同時に地面と平行に腕を伸ばし、握った拳を開く。そしてそこには鎧武者が居た。

「ふ…全身装甲…」

「さあ…殺ろうぜ」

景秋は大太刀を右手に握り、棒立ち。オルコットはライフルを構える。

『試合開始！』

アナウンスの声と同時にオルコットが動いた。

「さあ、踊りなさい。私、セシリア・オルコットとブルーティアーズが奏でる円舞曲ワルツで！」

ティアーズと呼ばれた兵器が景秋を襲う。爆発音と共に、土煙が上がる。

「景秋…」

「兄さん…」

ピットにいる箒と円香が共にある一人の男の名を呟く。土煙が晴れる——そこには先程と変わらず棒立ちの鎧武者が立っていた。

「な、なんで！どうしてティアーズの攻撃を受けて立っていられますの！」

「別にあんなの当たらなければ良いだけの話だろ。お前、むやみやたらに撃ちすぎなんだよ」

その言葉に観客含めて言葉を失う。皆が景秋の敗けを考えた。だが、予想に反して景秋は無傷で立っている。更に、攻撃は受けていない。避けたとまで豪語しているのだ。

「今度は俺の番だぜ」

景秋はそうオルコットに告げる。告げたと同時に大太刀を八相に構え、オルコットに迫った。

「ウオオオオオ!!」

勢い良く振り下ろされた大太刀がオルコットのIS、ブルーティーズの左腕部を襲う。だが、直撃する事無くシールドに阻まれた。

「これがISのシールド…厄介だな…」

「遅いですわ!」

距離を取ったオルコットのライフル——スターライトmark I I Iのビームが景秋の纏う武州五輪の頭部に直撃。景秋は堪らずよろけ、頭を左右に振る。

「武州五輪、損害は」

《損害は軽微。ビーム兵器の対策は束殿がしておいたぞ、御堂》

「ならあのブルーティーズとか言うBT兵器はコピー出来そうか？」

《可能ではあるが、如何せん兵器なのでな、時間が掛かる。そしてあの兵器の原理は理解しているか?》

「昨日、頭に叩き込んだ」

《諒解した。ならばやってみよう》

「頼んだ」

会話を終えた景秋はまたしてもオルコットに迫る。だが、スターライトmark I I Iの射撃に翻弄される。

「良くここまでついて来られますわね。称賛に値しますわ」

「そりゃ、どうも…ッ!」

景秋は自分の目の前にオルコットがやって来るまで耐えていた。そしてその時が来た。目の前に来たオルコット目掛けて一直線に飛

んでいく。飛んでくるビームも何もかもを避ける事無く。

大太刀の間合いに入った瞬間を見逃さず、躊躇い無く振り下ろす。大太刀と景秋の気迫に押され、オルコットは吹き飛ばされる。

「なんて馬鹿力… シールドエネルギーがかなり削られ…」

「来い、ブルーティアーズ」

オルコット含め、その言葉と行動を見聞きした者は驚愕する。景秋が纏う鎧の色が青色に変色し、周りにはブルーティアーズに似た兵器が数機浮いている。

「な… なんで… 貴方がティアーズを…」

「お前の武装をコピーしたからだ。ああ、名前は思い付かなかったからオルコットののをそのまま使わせて貰うぞ」

景秋の言葉にオルコットは言葉を失う。オルコットだけではない。その光景を見ていた観客すら言葉を失っていた。

「そ、それでも… 私は、負けられません！」

「そうか、そう来なくちやなあ！」

オルコットはライフルを、景秋は大太刀を再度構える。

「行きなさい、ティアーズ！」

「迎え撃て、ティアーズ！」

二人のティアーズがお互いに撃ち合いを始める。本人達はその場に佇んでいる。

「幾ら私のティアーズをコピーしようと技量が私に敵う筈がありませんわ！」

「なら、俺も俺なりの戦いをさせて貰うさ！」

景秋は大太刀を構えてオルコットへと突っ込んで行く。

「な、なんで!?! 同じBT兵器なら攻撃は…！」

「俺とお前のBT兵器が同じ物だったとしてもな、俺とお前は同じ物じゃねえ。テメエが攻撃出来なかつたら、俺には関係ねえ！」

景秋はそう叫びながら下段にしていた大太刀を振り上げる。轟音と突風を伴って振り上げられた大太刀はオルコットのライフルを掠める。

「チツ！まだまだあ！」

「私だって！」

二人は距離を取って空へと飛ぶ。景秋の元に戻って来たBT兵器は全6機中全機が破壊。オルコットも同様に全機大破。

「お互いにBT兵器は無くなりましたわ…。」

「ここからが正念場…とでも言いたげだな」

「勿論、狙い撃ちますわ！」

オルコットは言葉通りに景秋を狙い撃つ。だが、景秋は自分を狙い飛んでくるビームを大太刀で斬る。

「俺だって負ける訳にはいかない！俺が勝つ！」

「私だって負ける訳には！」

オルコットはライフルからビームを放つ。放たれたビームは景秋の左太ももに命中。景秋は堪らずバランスを崩した。

「損害状況は!？」

《損害は危険域突入手前だ。東殿が施したビームコーティングが剥がれ始めている。決着を付けねば先にこちらがやられてしまう》

「なんとかならないのか！」

《どうにもならん。やられるのは時間の問題だ》

武州五輪の言葉に景秋は苦い顔になる。武州五輪はそれでも言葉が続けた。

《それでも、御堂の力なら勝てる。短期決戦で一撃に全てを込めれば勝てるやもしれん…あくまで可能性の話だがな》

「ならそれに賭けるさ…さて、吉と出るか凶と出るか…ッ！」

景秋は放たれたビームを一つずつ避け、接近する。

「ならこれでも！」

オルコットはそう言って奥の手であるミサイルを景秋に向けて放つ。ミサイルは景秋に直撃。爆炎に包まれる。

それでも景秋は止まらない。爆炎を振り払う様にスピードを上げた。

《一撃に込めるは己の総て。力も精神も信念も意思も魂も…何もかも総てを込めて相手に最強の一撃をくれてやれ!》

「わかってる」



武州五輪の言葉に景秋は答える。自然と大太刀を握る手から余分な力が抜けていく。

景秋の間合いは、大太刀の刀身と自身の腕の長さの合計値。それは、ほんの数メートル。対する相手はビームライフル、リーチの長さでは圧倒的に負けている。

だが、景秋はただ無我夢中に自分の間合いだけを考え、その間合いに入る方法を眠る間も惜しんで模索し続けた。

そして景秋はその答えを見つけ、掴んだ。その答えとは――

「これが俺の総て――」

総てを置き去りにする加速。それこそが景秋が掴み取った答えだった。

「雲耀――迅雷ッ!!」

振り下ろされた大太刀の斬撃は音も光も何もかもを置き去りにして、オルコットのライフルごと斬り落とし、戦闘不能まで追い込んだ――

『せ：：せ、セシリア・オルコット、シールドエネルギーエンプティ!!  
勝者、東雲景秋イ!』

アリーナにアナウンスが鳴り響き、観客達から歓声が上がる。

「私の負け：：ですわね：：完璧に：：」

「いや、それでも無いさ。俺がテイアーズをコピー出来なかったら：：俺がお前と同じ弱点を持ってたら：：負けてたのはリーチと経験差で俺が負けてた。だから完璧って訳じゃ無い。だろ、セシリア」

景秋は劔冑を解除してセシリアに歩み寄ると、隣に座り込んだ。

「名前：：」

「ん？ああ、嫌だったか？あんな激闘繰り広げた相手に苗字つてのも締まらねえから。嫌なら苗字で呼ぶけど？」

「いえ、私もお名前前で呼ばせていただきますわ。景秋」

「そう来なくちゃな：：つと：：ライフル斬り飛ばしちまったが：：大丈夫：：じゃ無いよな？」

二人は立ち上がり、握手を交わす。その際に景秋は苦笑いを溢しながら問う。

「勿論ですわ。私のライフルにはまだ予備がありましたよ？」

「なら良かった… ティアーズの方は？」

「ティアーズにも予備はありません。景明の方こそ大丈夫ですか？」

「俺は元々ティアーズが無くても戦えるかな。そこんところは大丈夫」

二人はピットに戻って次の戦いへと備える。

「セシリア、負けんなよ？」

「景秋こそ、私に勝つたのに『織斑に負けました』なんて聞きたくありませんわ」

セシリアの言葉に景秋は笑って大丈夫と答えた。其々の支度をす  
る為に二人は別れた。

「よし、アイツらの所行こうかね」

景秋が一人呟いて円香らと合流しようとした時、千冬から声を掛けられる。

「おい、待て」

「なんでしよう。無駄話に付き合う程、暇では無いんですけど」

「あの最後の一撃はなんだ。危険だろう」

「御宅の弟さんの零落白夜… でしたっけ？あれに比べれば安全ですけどね〜」

景秋は薄ら笑いを浮かべながら答える。千冬もそれに反論する。

「一夏なら扱いきれる。お前のISの方がよっぽど危険だ。解析する、寄越せ」

「俺の専用機はちゃんと申請出してますよね？複製能力持ちの第三世代ISだって。解析するってんなら俺が立ち会っても構いませんよね？」

…… ISじゃねえから解析した所で無駄なんだけどさく。大方、姉さんに頼むだろうし、幾らでも誤魔化せるっちゃ誤魔化せるけど、面倒だしなあ……

景秋の心の中の声を当たり前だが、知らずに言葉を続ける。

「機密事項があるのでな、解析室には生徒は入れん。だから渡せと

言っている」

「なら俺含めたエヴァンスエレクトロニクスの開発部主任と社長に許可求めて下さい。専用機とは言え、社に所有権がありますので」

「話を聞かん奴だな。渡せー」

「ああ、連絡先解りませんか？なら俺が社長に連絡するので、説得してください。まあ、あの人に言いくるめられて終わりでしょうけど」

景秋はそう言って携帯電話を取り出すとどこかへ電話を掛け始める。

「もしもし、景秋です。学園の教師……かの有名なブリュンヒルデ様が社の専用機を解析したいと交渉を……はい、分かりました。変われとの事ですので」

「ツ……貸せッ！」

景秋から電話をひったくると電話に出る。景秋はその間、欠伸をしながら待っていた。電話が終わったのか景明に投げ返す。

「おっと……危ないなあ……分かりました……御忙しい時、失礼しました」

景秋は電話を切る。

「チツ……ならこうしよう。お前が勝てば大人しく引き下がる。だが、一夏が勝てばお前のISを超越せ」

「ハア……怒鳴られたのに良くそんな言葉が出ますね。まあ、良いですよ。俺、負けませんし」

景秋はそう言って歩き出す。

「織斑君に伝えて下さい。『殺すつもりで潰しに行くから覚悟しておけ』って」

「……ツ……」

景秋の目と雰囲気から放たれた殺気に千冬は少し怯んだ。

「おめでどう、兄さん」

「まずは一勝だな、景秋」

「おう、ありがとな。箒、円香」

景明は二人に礼を言っ頭を撫でる。

「さてと、箒。織斑はどんな感じだ？」

「あれでは勝機は無いな。お前と戦う前のオルコットなら勝機は多少なりともあったが…景秋と戦って油断も隙も無くなった。そんなオルコットに勝つのは無理だ」

箒の言葉を聞いた景秋は円香に渡されたスポーツドリンクを飲みながら試合が流れているモニターを見つめていた。

——結果として、セシリアの圧勝で勝負は幕を閉じた。

### 第三話：武者は戦鬼になつていく

第三話：武者は戦鬼になつていく

セシリアと織斑との試合が終わり、次は織斑と景秋の試合が始まるうとしていた。

「アイツの武器が刀一本だけつてのはわかったが：：厄介なのは零落白夜だな。シールドエネルギーを貫通する絶対攻撃。コピーするまで面倒だ」

「なら私の正宗を：：」

「使用者の負担が大きすぎる。それに正宗はお前の劔冑だろ」

円香の提案を否定しながら景秋は腰を上げる。

「けど、アイツの使う篠ノ之流がどんな剣術なのか知ってるだけ読み合いが有利に運べるのは利点だ。さて、どうやって潰してやろうか」

「取り敢えず、奪えるもの奪ってコテンパンのギツチョンギヨンで良いと思うよ。アイツの鼻っ柱粉々に粉碎してやろうよ、兄さん」

「そうだな。その意見には賛成だ：：時間だ、行つてくる」

「いつてらっしやい、兄さん」

景秋は円香の頭を撫でて微笑みながら歩き出した。

「よお、織斑。調子はどうか？」

先程と同じようにピットの端に立ち、ズボンのポケットに手を突っ込んでいる。

「さつき、どうしてオルコットとの戦いであんな卑怯な事が出来たんだよー！」

「卑怯？ああ、コピーの事か？使えるものは何でも使う。戦の基本だろ」

「それでも卑怯な事せずに正々堂々戦うのが男つてもんだろ！」

「あのな？これは戦いなんだよ、命の危険が伴う戦いなんだよ。それに正々堂々とか抜かす奴は正直、ぶっ潰してやりたいもんだ」

織斑の問いに景秋は丁寧<sup>まじまじ</sup>に答えるも、呆れる答えが返つて来たことに景秋は頭が痛くなる。景明は「もういいや」と一人呟く。

「千日の稽古<sup>ちから</sup>を劔とし、万日の稽古<sup>まもり</sup>を冑まもりとす。以つて此れ我が

劔冑なり！」

セシリアの時とは違い、腕を天へと伸ばし口上を唱える。

「お前にゃ俺は倒せねえよ」

「やってみなくちゃわからないだろ！」

「ならやってみろよ」

織斑の雪片と景秋の大太刀がぶつかり火花を散らす

「どうだ！」

「どうだ…… ってまだ刀がぶつかったただけだろ？それで自慢されてもなあ」

景秋は溜め息を吐きながら織斑の右脇腹を蹴って距離を取る。景秋は大太刀を中段に構えた。

「お前、空中戦苦手だろ」

「だったらどうした」

「邪険にするなよ。お前の苦手な空中戦でお前を倒したとして『俺は空中戦苦手だから負けたのは仕方がない』なんて言い訳されても嫌なんだな、だから陸で戦ってやろうって言ってんだ。まあ、陸で負けても『俺は初心者だから負けても仕方がない』って言い訳出来る訳なんだが」

景秋の言葉に腹を立てたのか、織斑は血相を変えて景秋へと迫る。

「ウルセエ！ならお望み通り、陸戦でお前を倒す！」

「お前じゃ俺は倒せねえよ。剣士としてもIS乗りとしても！」

織斑の雪片と景秋の大太刀が再度火花を散らす。だが、織斑が少しだけ押している。

「どうした！押されてるぞ！」

「お前は…… 利用するって言葉を知らない」

押されていた景秋が小馬鹿にするように織斑に告げる。織斑の顔が更に険悪へと変わっていく。

「だったら利用してみろよ！」

「ああ、そうさせて貰う」

景秋は大太刀を手放し、織斑の首を掴んで背負い投げの要領で地面へと背中から叩きつけた。

「グエツ！」

「これが… 利用するって事だ。突っ込むだけじゃあ勝てはしない。女の子だっけそうだろう？ 押すだけじゃあ靡かない。引くことも覚えなきゃな」

叩きつけられた織斑は蛙の鳴き声の様な悲鳴を上げ、地面に突っ伏す。

対する景秋は手放した大太刀を拾い、織斑の周りを回りながら演説の様に言葉を発する。

「もうギブアップか？ 情けないなあ… それでもかの有名なブリュンヒルデの弟君か？」

ああ、もう一人の弟君のが才能優れてたんだっけ？」

「あんな… あんなヤツと一緒にするな！」

「あんなヤツ？ おいおい、もう一人の弟君に失礼だろう？… ツ！」

景秋の言葉に腹を立てた織斑は馬鹿の一つ覚えの様に直線的に突っ込む。だが、景秋は軽口を叩きながら雪片の振り下ろし終わりに合わせて片足で踏みつけた。がら空きなのにも関わらず、景秋は攻撃せずに言葉を続けた。

「お前は弱い、弱すぎる。さっきも言ったな、突っ込むだけじゃあ勝てはしないってよ、これがそのザマだ。」

自分のコンプレックスだか凶星だか突かれて逆上して、突っ込んだ挙げ句に自分の武器を片足で踏まれてあしらわれてる。俺だったら刀手放して殴るぜ？」

景秋の言葉にハツとして雪片を手放すも時既に遅し。景秋は左拳で織斑の顔面目掛けて殴るも、ISのシールドに阻まれ織斑は吹き飛ばされる。雪片を手放した事で、雪片は景秋の足元、いや足の下敷きになっている。

「ハア… 最低なヤツだよお前は」

「チクショオオオ!!」

「意味ねえっての！」

景秋は左手に小太刀を持ち、織斑へと投げる。投げられ、槍の如く飛ぶ小太刀は織斑を掠め、地面に突き刺さった。

「ッ…」

「そこで攻撃辞めるのもナンセンスだ」

景秋は足の下敷きになっていた雪片を拾い織斑へと投げる。雪片は無様に転がり、織斑の足元で動きを止めた。

「ほら、掛かってこいつて。周りから見たらさぞや無様に見えるだろうよ。この会話すら聞こえてんだろうしな。」

まあ、仕方無い。一撃だけ斬らせてやるよ。切り落とさなきゃ何処だって良いぜ。ほら、ご自慢の零落白夜使って斬りかかって来いよ。ほらー！」

景秋は言葉と共に自分の胸を叩く。織斑は雪片を拾い、俯いている。

「ねえ〜まくだ〜か〜な〜?」

「ウルセエ… ウルセエ… ウルセエ… ウルセエ… ウルセエ！」

景秋の挑発にキレた織斑は景明の言葉通り、零落白夜を使用して景秋へと突っ込んでいく。

「これが！俺の剣だ！」

「ッ！」

宣言通りに斬られて『あげた』景秋は胸を袈裟斬りされ地面に大の字に倒れる。

「どうだ！これが、これが、これが！俺の剣、零落白夜だ！」

「先程までの項垂れようはどこ行ったのか」皆がそう聞きたくなる程の掌返し。観客席にいる生徒も呆れてしまい、声援が途絶える。

「いつてて… これ、ビームコーティングしても痛いもんなんだな」

景秋は斬られた胸を押さええながらゆっくりと立ち上がる。

「全く… その威勢はどこから来るんだよ。さっきまで俺にボロクソ言われて項垂れてた癖によお。あ、そうそう。お前に一つ良いこと教えてやるわ。—— 剣の間合いと欠点は把握しとけ、ボケナス」

「は？な、なんで無事なんだよ！」

「逆に聞くが、お前は俺に何かある様にしたって事だよな？怖いことするねえ… 武州五輪、零落白夜をコピーしろ」

《諒解。だが、御堂。なぜこのようなの？》



「何故？これはある種の復讐みたいなもん。心配すんな」

武州五輪との会話を終わらせると、景秋は織斑の問いに答えた。

「お前のISと雪片の欠点を解説してやるから、耳の穴ドリルでも何でも良いからかつぽじって聞きやがれ」

景秋はそう言つて演説者の様に歩きだす。

「お前のIS：白式って言ったな。白式には雪片以外の武装は無い。俺はこれまでの戦闘でそれを理解した。つまりは刀一本で戦わなけりやいけないって事だ。これが白式の弱点、欠点だな。加速力、機体性能は流石、篠ノ之博士が作っただけの事はある。

さて、次は雪片の欠点を話してやろう。雪片は実体剣でもあり、ビームソードにもなる優れものだ。だが雪片は零落白夜つて言うワンオフアビリティ単一仕様能力を使うのにエネルギーを食われる。

更に、間合いに入る為にスラスタを吹かす。それにもエネルギーを食う。攻撃を食らえばエネルギーを食う。悪循環だな。

間合いに入る為には攻撃を避け、近づく必要があるが、お前は直線的に突っ込む事しかない。

そりゃ攻撃も受ける。んで余計にエネルギーを食う訳だ…」

「だ、だったらなんだつて言うんだよ！」

景秋の言葉に織斑は言葉を放つ。それ景明は答えた。

「今から説明してやるつてんだよ、ボケ！話聞きやがれ… エネルギーを食らわずに避ける方法は幾つもある。それは搭乗者の工夫が必要になる訳だ。

さて、雪片の欠点だが、先も言ったようにエネルギーを食う事。それが一番の欠点に思われるがそうじゃない。まあ、十分な欠点では有るんだが… 間合いの変動が一番の欠点だ。

エネルギーを刀身に集めてビームソード化させる事で多少は刀身の長さが長くも短くもなる。そして、その刀身の長さはエネルギー量によって左右される訳だ。エネルギー量が多ければ多い程長くなり、エネルギー量が少なければ少ないほど短くなり、発動すら儘ならなくなる。それがお前のISと雪片の欠点な訳だ。

お前は発動してからスラスタ吹かして俺を斬った。その間にエ

エネルギーがどれだけ減ったと思う？だからお前が俺を斬っても装甲に傷が付いただけなんだよ」

景秋は説明を終えて満足したのか大太刀を肩に担いだ。

「…そんなの…関係ねえ!!」

大声で叫び、零落白夜を発動したまま突撃する織斑。景秋は小さい声でその技の名を呟いた。

「零落白夜……」

装甲は先程のセシリアと同じように青色と金色に変色。肩に担いでいた大太刀の刀身も青白い光を放っている。

「さあ、皆様お待ちかねのコピーだ。お前より俺のが零落白夜の扱いが上手いって所見せてやるよ」

「俺の弱点は全部お前が言ったんだぜ？それはお前もだ。なら俺にだって勝てる！」

「勝手に盛り上がってる所に悪いんだが、俺の能力はコピーであって零落白夜じゃない。発動するしないは操れる。お前みたいに垂れ流しって訳じゃないんだな、これが」

織斑の雪片と景秋の大太刀がぶつかり合う。お互いにエネルギーは減っていく。尽きるのは時間の問題。そこで景秋は鏢迫り合いと零落白夜を一度切って、逃げる様に距離を取る。

「どうした！逃げるのか!?!」

「違エよ、テメエ相手に逃げたらそれこそ恥だぜ」

景秋は投げて地面に刺さっていた小太刀を左手に握り、再度零落白夜を発動した。

「二刀流で零落白夜だ、お前よりエネルギー消費量は増える。だが、手数も増える。これなら負けない」

「何をー」

織斑の振り下ろしを左の小太刀で受け、右の大太刀で攻撃。織斑が下がって距離を取ろうとした所に小太刀を納め、大太刀で止めの一撃を食らわせる。

「もう終わりだ」

「この距離はお前にも詰められないだろ！」

景秋がこれから放とうとしている技はセシリアの時に放った渾身の一撃。その劣化版。

「雲耀——」

「しまっ！」

一瞬で距離を詰めた景秋は振り上げていた大太刀を振り下ろす。

「轟雷ツ!!」

零落白夜を纏った大太刀、ISの絶対防御すら斬り破る絶対攻撃。その一振りはセシリア戦よりも小さい轟音を伴って振り下ろされた。

その一撃は織斑のISを解除まで追い込み、織斑の前髪を少し斬り落とし、地面にクレーターを作って止まる。

「零落白夜破れたり…」

『白式、シールドエネルギーエンプティ！勝者、東雲景秋!!』

アナウンスの声に観客席は一気に盛り上がり、歓声が景秋へと向けられる。

景秋はピットに帰ると待っていた妹とセシリアに声を掛ける。

「お疲れ、兄さん。中々にスッキリする倒しっぷりだったよ」

「おう、俺もそう思うぜ円香」

「お疲れ様ですわ、景秋」

「セシリアもお疲れ… って言う程、動いてはいなさそうだな」

景秋の言葉にセシリアは頷く。

「ええ… それよりも、織斑さんは大丈夫ですか?」

「まあ、斬っちゃいねえから死んではいねえよ。前髪は少しばかりパツツン気味に斬り落とすしちまったけど…」

「それくらいなら大丈夫だよ、セシリア」

「え、ええ… そうですわね」

円香の言葉にセシリアはひきつった笑いを見せる。

「ありや、箒は織斑の方が」

「うん。さつきまで居ただけど、織斑の方に行っちゃったよ」

「まあ、箒がこつてり絞るだろうさ…。俺は少し織斑先生の所に」

「うんわかった」

景秋はそう言って千冬の元まで歩いて行った。

「さて、織斑先生。賭けは俺の勝ちですね。おまけに零落白夜までコピーさせて貰っちゃって感謝しかありませんよ」

「この外道！貴様はどこまで人を侮辱すれば気が済む！どれだけ馬鹿にすれば気が済むのだ！」

「俺は織斑の伸びた鼻っ柱粉碎して心を折ろうとしただけです。まあ、これで心が折れてるかは解りませんがね」

千冬の怒号の問いに景秋は普通に答える。

「逆にお聞きしますが、あの程度の実力・技量で俺に勝てると思ってるアンタの方が俺を馬鹿にして侮辱してるよ。俺があんなのに負けるん？いやいやいや。負ける方が難しい」

景秋はそう言つて小馬鹿にする様に鼻で笑いながら言葉を発し、その後もケラケラと笑う。

「貴様ッ！」

「そんな生温い拳が俺に届く訳が無い」

「ッ！」

千冬の右ストレートにカウンターで左ストレートを食らわせる景秋。千冬は鼻血を出してその場に座り込む。

「ありや。力加減ミスりました。すみません。でも先に殴つて来たのそつちだし。勘弁してくださいね」

「貴様、覚えていろ。この借りは必ず返す！」

「楽しみに期待せず待つてますよアハハハハ」

景秋は笑いながらその場を後にした。

その日の夜。景秋は箒と屋上に居た。

「景秋……」

「ん？」

「私は……解らなくなってきた……。景秋と一緒にいるべきなのか、一夏と一緒にいるべきなのか……。私は解らないんだ」

箒の言葉に景秋は返す言葉を選びながら返す。

「箒の心に従つたら良いんじゃないか？箒が私はこうしたいんだって

思った事に従ったら良いと俺は思う。まあ、俺の側に居てくれると俺は嬉しいけどさ。けど、強制は出来ない。あくまでも俺は箒の味方だからさ」

「そうか…」

「今はな…」

「何か言ったか？」

景秋の聞こえぬ呟きを気にした箒は聞き返すが、景秋が帰って眠る事を勧める。

「なんも言つてねえよ。もう帰って寝な。冷えるぞ」

「あ、ああ… おやすみ、景秋」

「おやすみ、箒」

帰っていく箒を景秋は淋しそうな顔で見つめていた。

「ん？… もしもし、なんだい姉さん」

『いやいやくかー君も隅に置いておけませんなあ』

「見てたのかよ。こっ恥ずかしい」

『お姉さん的にはいつくんよりかー君と付き合ってくれる方が嬉しいんだよね』

東の言葉に景秋は頭を掻く。

「それは俺じゃなく箒が決める事でしょうに。あくまでも俺は箒の味方である事が今の俺の立場なんですから」

『フフフ私に任せてくれれば付き合えるよ？』

「俺が自分で想いを伝えますよ」

『なら私は見届けるとするよ』

景秋の答えを聞いた東は笑って答えて、電話を切った。

『それじゃあねーバイビー』

「相変わらず嵐みたいな人なこと…」

景秋は星空を眺めながら微笑んでいた。

## 第四話：戦鬼でも教えるのは優しい

第四話：戦鬼でも教えるのは優しい

クラス代表決定戦の翌日。景秋は憂鬱だった。セシリアは自分からクラス代表を辞退し、残るは自分と織斑のみ。

周りからは「織斑じゃ絶対に無理だから東雲君がやってね」と目で訴えかけてくる。それでも景秋はやりたくないものはやりたくない」と辞退を申し出たのだ。

「ということ、クラス代表は織斑一夏君に決定しました。一繋がり縁起が良いですね」

…… 山田先生…… 今のクラスにその言葉は地雷ですぜ……

景秋は頬付いて窓の外に見える空を見上げる。周りからはコソコソと「織斑君じゃ無理だよ〜」とか「ああ、対抗戦終わったね」などの言葉が聞こえて来るが、織斑は持ち前の鈍感さでスルーする。

「な、なんで俺なんだ！勝ち数が多いのは東雲だろ」

「そりゃあ、俺は辞退したからな。企業の方から正式に学園で役職に就くなどお達しが来た。だから辞退したし、セシリアも辞退。残ったのはお前だけって訳だ。まあ、決定権は俺にあるわけだから文句言うなよ」

景秋は投げ槍にそう言って休み時間になるのを待っていた。

「景秋はなぜ辞退しましたの？」

「言つたら。企業の方からってさ」

「いえ、景秋自身の考えをお教えくださいな」

「別に、無理に経験を積む必要も無いってだけの事だ。俺がコピー出来るのはアビリティと第三世代ISの専用武装のみ。

けどこの学年にや、専用機持ちは五人だけ。しかも日本代表候補生の更識簪って奴は未完成のISを未だに作ってる。なら辞退するが吉だろ」

景秋の言葉にセシリアは納得したのか頷く。景秋は思い出したかのようにセシリアと箒に問う。

「そう言えば、セシリアは今日の夜にある就任会とやら行くか？箒も

行くのか？」

「私は顔だけでも出しに行こうかと。姉さんから連絡するって言われてな。夜は空けておきたいのだ」

「私も今回は欠席しようかと。あのような暴言を口にして顔を出せる筈がありませんわ」

二人の答えに景秋は頷く。円香はセシリアの言葉に反応して、言葉を返す。

「気にしなくて良いと思うけどねえ。正直、兄さんと織斑の戦いでセシリアの暴言なんて忘れてるでしょ」

「そう祈るしかねえって訳だ。ほら授業始まるぜ、席に戻んな」

景秋は時計を見ながらそう言っただけで皆は解散して各々の席に着いていく。

……さあて……眠い一日の始まりだ……

景秋はそう心の中で怠そうに呟いて眠るために目を瞑った。

時は進み、IS実習の授業。アリーナに集められた景秋達。

「専用機持ちは前が出る」

千冬の指示に面倒臭がりながら景秋は前に出た。

「なぜお前ら兄妹はISスーツを着ていない」

「そりゃ、全身装甲ですので。要らないです」

景秋はそれだけ言っただけで黙ってしまう。

「はあ……まあ良い。ISを展開しろ」

そう言われて一番速く展開したのはセシリアだった。景秋と円香は手を前へ伸ばす。

「やるか。いくぞ、円香」

「わかった……世に鬼あれば鬼を断つ。世に悪あれば悪を断つ。ツルギの理ここに在り！」

「千日の稽古を劔とし、万日の稽古を冑とす。以って此れ我が劔冑なり！」

二人は揃って劔冑を装着。周りからは驚きの声上がる。

「円香さんのISって東雲君のと似てるんだね」

「鎧みたいでカッコいい！」

などの声を制止して、千冬が指示を出す。

「旋回や上昇、停止、下降などの飛行動作を行って貰う。アリーナを三周、各自自由に始めてくれて構わない」

その指示が出た途端に、セシリアは上昇する。その顔は真剣そのもので、意識の高さが伺えた。

「お先に失礼しますわ」

「行くぞ、円香」

「うん！」

景秋と円香はセシリアを追って上昇する。だが、織斑は一人遅れていた。

「他の三人はもう既に飛んでいる。何をモタモタしている！」

「わ、わかってるよ！白式！」

ロケットの様に飛び出した織斑だが三人に追い付けず、フラフラと飛んでいる。

「遅いですわね、織斑さん」

「そりやな。白式は性能だけで言えば俺の武州五輪とドッコイかそれ以上。そんな機体を初心者に乗って操れるかと言われれば答えはノーだからな。Ｆ１カーを初心者ドライバーが運転出来るわけがないのと一緒にだ。お先！」

「私もお先に行くよセシリア！」

景秋と円香は更に加速する。だが、円香は装甲の重さ故に思うように加速しない。

「そろそろ三周かな」

「そうだな。止まるぞ」

円香の言葉に答えて景秋と円香は空中に留まる。

「やっぱり織斑がビリッケツか」

「お疲れ、セシリア」

「やはり、織斑さんの機体性能は侮れませんわ…。」

織斑が三人に合流したのを見た千冬は降りてこいと指示を出す。

「そうだな、陸から10センチの所で制止してみろ」



「なら私から行きますわ」

「おう。んじや次は俺で」

セシリアがある程度のスピードで降りていく。

「12センチと言った所だ。流石だな」

「ありがとうございます」

セシリアは頭を下げて完全に着地する。

《御堂。後、2秒で10センチだ》

「オーケー」

景秋は武州五輪のナビに従って停止。横を見れば円香も一緒に降りてきていた。

「二人とも10センチピッタリだ」

「ども」

問題は最後の一人、織斑一夏だった。加速に加速を重ね、隕石の如く地面に突撃。三人は咄嗟に他の生徒達の前に立ち、飛んでくる土砂を弾く。

「誰が飛んでこいと言った！降りて来いと私は言ったんだ！」

「だ、だって千冬姉」

「織斑先生だ！」

織斑は頭を生徒名簿で殴られ続ける。眉間を指で押さえ、千冬は溜め息吐く。

「もうそろそろ時間だな。織斑はその穴を埋めておけ。そうだな…残りの時間は各自、専用機持ちに疑問などを聞いて解消しておけよ」

千冬はそう言っただけかへ行ってしまふ。

…… いやいや…生徒ほっぼってどこ行くのよ…

「東雲君、ISの操作って何を意識してやってるの？」

「そうだなあゝなるべく動作を小さくする事かな」

「動作を小さく？」

「そう。ISに乗るとどうしても一つ一つの動作が大きくなりがちなんだ。歩くとか走るとかね。それをいかに自分の体と同じように扱えるか。それが重要なんじやねえかと俺は思う。結局は自分で動かすわけだからな。普段と同じように動ければ自然と上達するさ」

一人の女子生徒の問いに景秋は丁寧に応えた。景秋は他の専用機を持ちを横目で見やる。すると全員、丁寧に質問に答えていた。

……よくやるよ…俺、もうキツイです。普段無意識だし…  
鎧となんら変わらないから……

そこで救世主の如く、景秋の元に箒がやって来た。

「ほ、箒。どうしたんだ？」

「夜、姉さんからの連絡に景秋も連れて来いって言われてな」

「ああ、その事か。わかった。いつもの屋上か？」

「いや、今回は違う。私が案内するから待っていてくれ」

「わかった」

そうして時間が過ぎていった。

「束姉さんはどこにいるんだ？」

「そろそろ来る筈なんだが……」

「やあ二人とも」

箒と景秋の真後ろに束が立ち、二人に声を掛ける。

「姉さん……」

「直に会うのは久し振りだね、箒ちゃん」

「束姉さん。なんで俺まで」

「かー君には私と一緒に本来の目的を話して貰おうかなって」

「もう話すのか？まだ早いんじゃない？」

「変に拗れるより良いよ」

景秋の言葉に束は真剣に答えた。その真剣な顔に、景秋は冷や汗を流す。

「束姉さんの判断に任せるよ」

「うん。それじゃあ、箒ちゃん。これから言うこと、忘れずに覚えておいてね」

「何が……」

箒の言葉を束は遮って言葉を発する。

「黙って聞く…… 私達の目的はISを元々の所に戻す事、それには危険も伴う。だからかー君と一緒にいて。」

私が調べた感じ、千冬は危険だ。裏で色々やってるみたいだから、あまり深入りしちゃいけない」

「箒、東姉さんの言ってる事は正しいよ。俺も調べた。これだ」

景秋はそう言っただけで携帯を箒に見せる。そこには千冬が誰かと会っていた写真が写っていた。

「誰か解らないが、学園と専用機のデータの資料を渡してる。プリントされた履歴が学園に残ってた。嫌な予感しか無い」

「そりゃ初耳だ。その相手探しくよ」

「わ、私は何をすれば…」

箒の問いに景秋が答えた。

「強くなることだ。専用機が無くても訓練機で俺と円香と訓練すれば強くなるからな。それだけだ。」

東姉さんがお前の専用機を作ってる。それを受け取っても戦えるようにすることが箒の今、やるべきことだ」

その時の景秋はまさしく鬼の顔になっていた。

## 第五話：編入生は戦鬼を知っている

第五話：編入生は戦鬼を知っている。

景秋と束が箒に目的を話した夜から何日か経過したある日のSHRを終えた朝。景秋は睡魔に襲われ欠伸をする。

「随分と眠そうですね、景秋」

「ああ、セシリア。最近は何のISの武装設計とか色々立て込んでてな、寝れてないんだよ…。クアア…。眠い…。」

セシリアからの言葉に答えている途中で、欠伸をする。景秋の後ろの席である円香がセシリアに景秋が眠い理由を話した。

「兄さんが眠いのは自分のISじゃなくて会社の方で作るISの武装設計だけじゃなくて機体設計とOSの開発もやってるんだよ」

「因みにどのような機体で？」

「高速射撃戦に特化した機体。兄さんがセシリアのブルーティアーズ見てからイメージが固まったからって」

景秋は円香の頭を鷲掴みして力を込める。そして口を開いた。  
「痛い痛い痛い！」

「余計な事を話すな。確かに俺が設計してるのはセシリアのブルーティアーズから着想を得た。けど全くの別物。」

セシリアが精密射撃なのに対して俺が設計してるのは、兎に角弾幕を張るのがメインだ。それにな、設計してて気付いたんだが…。」

景秋は円香の頭を離してそのままガリガリと頭を搔いた。

「多分、ピーキー過ぎて量産出来ないんだわ。G耐性があれば乗れる機体だけど、女でそうそう居ないからな。多分、性能を二段階位落として漸く誰でも乗れるISになる」

「元々の性能を下げておけば良かったのでは…。」

セシリアの言葉に景秋は反対の言葉を伝える。

「いや違うんだな、それが。考え方の違いだけど、元々の性能を下げるとその上が無い。つまり人によっては使い辛いものになる。それは何としても避けたいからリミッターを設ける事の方が長く使えるし、個性も出せる。量産機でも専用機に勝てるのが俺の理想だ」

景秋の言葉の後に箒が景秋に話し掛けた。

「なあ、景秋。知っているか？二組に編入生が来たらしいぞ」

「それって多分、代表候補生だろ」

「やはりそうか。セシリアと円香は知っていたか？」

「ええ。ルームメートがその様な話をしていましたわ」

「私は初耳だな。けど、強ければ問題ない」

箒の問いに二人が答えたとほぼ同時に大きな声が聞こえてくる。

「なんだ？」

「行ってみようか」

景秋と箒の会話の後、セシリアと円香を連れて二人は声の主の元へ赴いた。

「誰だ、朝から大声を出す阿呆は。こっちは寝不足の人間なんだ。揉め事は外でやってくれ」

「誰よ、アンタ」

景秋は一歩前に出てツインテールが特徴的な少女に文句を言う。その少女はイラついた様に景秋に名前を問う。

「人の名前を聞く時はまず自分から名乗るのが礼儀なんだがな……。まあ、良い。俺は東雲景秋、エヴァンスエレクトロニクスの企業代表だ」

「景秋……なの？」

「ッ……誰の事だ？俺は確かに景秋だが、君とは初対面だ」

……どっかで会ったっけなあ〜この子。名前聞けば思い出すかね……

景秋はそう思いつつ誤魔化して名を聞いた。

「私は凰鈴音、中国の代表候補生よ。その名前で思い出したけどアンタね、一夏が言ってた武者ってのは」

「ああ、恐らくは俺の事だろうな」

「なら話は早い。放課後、私と戦いなさい！アリーナは申請しておくから、逃げるんじゃないわよー」

凰鈴音と名乗った少女はそれだけ言い残して嵐の様に去って行った。

「なあ、箒。なんだったんだ、一体？」  
「さ、さあ？ただ戦いを挑まれたと言う事だけだな。解るのは」  
「だよなあ……お前達との訓練もあるのに……」  
「ま、まあ……アリーナを借りられるのは良いことじゃないか。空いてるスペースで皆と訓練するさ」  
残された景秋と箒はそんな会話をして授業の為に席に戻るのだった。

放課後。約束の模擬戦の為に景明達はアリーナに来ていた。

「逃げずに来たわね！」

「そりゃストーカー並に後ろ付けられてちゃ逃げるに逃げれないだろ」

「それもそうか。まあ良いわ。まどろっこしい事は抜きにしてちやっちやと始めちゃいませよ。後ろのお友達と訓練するならね」

景秋の言葉に同意しながら鈴は体を解し始める。景秋は棒立ちのまま。

「そりゃ有り難い。俺が勝ったらお前にも訓練に混ぜて貰う」

「なら私が勝ったらアンタの事、話して貰うから！」

15メートル程離れた二人は、お互いにISと劔冑を纏う。

「来なさい、甲龍！」

「千日の稽古を劔ちからとし、万日の稽古を冑まもりまもりとす。以って此れ我が劔冑なり！」

鈴は二振りの青竜刀『双天牙月』を構え、景秋も小太刀と脇差しの二刀流で構えた。

「アンタの武装、随分と小さいのね」

「いや何、小回りを重視しただけさ。アンタ相手にや大太刀じゃキツそうなんぞな」

開始の合図も無しに二人は共に飛び出して脇差しと双天牙月がぶつかり、鈍い金属音を鳴らす。

「まずは合格……って所かしらね」

「お誉めに預かり光栄……なんて言うとも……ッ！」

景秋は左足で鈴の横つ腹を蹴り飛ばして距離を取る。  
…… あぶねえ…… 氣イ抜いてつと下手やらかせば簡単に折られる……

「そら次いくわよー！」

「なら…… 迎え撃て、ティアーズ」

武州五輪の装甲が青に変色し、腰部に接続されていたティアーズ達は鈴へと射撃を行う。

「なによこれ！」

「ブルーティアーズ。俺が初めて手に入れた力だ」

ティアーズ達に阻まれ、鈴は動きを止める。その瞬間を景秋は見逃さず、景秋は鈴へと小太刀を振り下ろした。

「この程度で！」

「斬れる筈も無いか…… だが、傷は付けられた。なら斬れる」

振り下ろされた小太刀を受け止めた双天牙月に罅が走り、欠片が飛び散る。その事に腹を立てた鈴は無茶苦茶に双天牙月を振るった。

「さつきまでの冷静さでいられたら俺の勝機も低かったと思う。けど、今のアンタは…… 怖くない」

「口だけじゃ、格好付かないわよー！」

「そうだな。零落白夜！」

青かった装甲の青みが増し濃紺色に変化。更に装甲の所々が金色に変化し小太刀と脇差しが青白い光を放つ。

「IS相手にや零落白夜は最強の矛だ」

「それって！」

「気付いたか。でもな、遅い！」

脇差しで罅欠けていた双天牙月を折り、小太刀で鈴本人を攻撃した。

「零落白夜最大出力！」

刀身の輝きが増し、ビームサーベルの様に刀身が伸びる。

「早速新技だ。雲耀ノ太刀——」

鈴は景秋の異様な姿に警戒し、防御の体勢になる。

「一閃！」

太刀の長さになった小太刀による不可侵の速さによる振り下ろし。最大出力の零落白夜により、甲龍のシールドエネルギーはゼロになった。

「俺の勝ちだぜ。鈴」

「そうね…勝てると思っただけだなあ」

「正直、小太刀と脇差し、大太刀のどれでも対処は厳しい位には鈴の力は強かった。俺が勝てたのは既に勝負は終わってたからだ」

景秋のその言葉に激昂し、鈴は胸ぐらを掴み怒鳴る。

「私が貴方より弱いって言いたいなら直接言えば良いでしょ！遠回しに言わなくたって良いわよ！こっちだって自分が弱いこと位解ってるのよ！」

「それがお前の強さだ。弱さを認め、それでも尚、強くあろうとする。それが強さだ。けどな、勝負つてのは前提条件で勝敗が左右する。

それは精神状態、武装、ルール、ISの性能、当人の才能、能力…色々ある。俺はその…千変万化していく無数の数の前提条件…戦況の中で変わっていくモノのどれかが勝つただけだ」

景秋はそう呟くように告げる。その声は低く鬼の声とも思える声だが、その時だけは…優しく聞こえた。

「なんで…アンタなんか、あの時の景秋と同じ事言ってるのよ」  
「さあな、他人の空似だろ。さて、時間も迫ってきてる事だし皆で訓練やろうか」

景秋のその言葉に今か今かと待ちわびていた皆が一斉に景秋へと飛び付いていった。

その日の夜。景秋は夜風に当たるために一人で屋上に居た。

「やっぱりここにいた。貴方、何がしたいの？」

「なんの事ですかねえ、生徒会長殿」

「盗聴機。何機か仕掛けたのに全部綺麗に焼却されてたわ。何が目的？いえ、何をやる気？」

楯無の言葉に景秋は狂気を孕んだ笑みで答える。

「俺の目的？決まってるでしょう。俺は俺の為に戦うだけですよ。さ



て、ここからは交渉の時間です」

景秋はそう言って先程の会話を流す。

「脅そうって訳？」

「脅しではありませんよ、言ったでしよう？交渉の時間だと」

「何が目的？私の体？それとも専用機かしら？」

楯無の言葉に反論する形で答える。

「いえ、貴女の専用機の情報が欲しいんですよ」

「言うとも思ってるのかしら？」

「なら俺はこの録音を学校側に提出します。貴女は生徒会長の座から必ず下ろされる。幾ら貴女に後ろ盾があろうと盗聴なんて事、揉み消せますかね？」

「…」

楯無が黙ったのを良いことに景秋は言葉が続けた。

「今ならまだ俺と貴女しか知らない。ここで無かった事出来る。随分と美味しい話だと思いませんか？勿論録音は消します。どうですか？」

「… 本来はこんな事しないけど、背に腹はかえられないわ。このUSBメモリに私の専用機の情報全てが入ってる。但し武装とワンオフアビリティについてだけだけど。これで満足かしら」

「…………… 確かに確認しました。では俺も」

USBを受け取った景秋は記録を確認してポケットに仕舞う。そして録音していた録音機を地面に叩き付け壊す。

「これで復元も不可能です。お互いにとって良い話し合いが出来て良かったですね、会長？」

「ええ、そうですね…」

「それではこれで」

景秋はそう言ってその場を後にした。

「円香、あの話し合いは録音、録画出来てるか？」

「勿論。一秒たりとも逃してないよ」

部屋に戻った景秋は円香と話していた。

「兄さんも卑怯だね。データを壊したフリをして私に録画と録音させるなんて」

「油断するあの人が悪いんだよ。さてこれでミステリアス・レイディのデータは手に入った。」

そのデータ、もしもの為に色んな所でデータのバックアップしとけよ。俺らのスマホ、パソコン、会社、タワマンの俺らの家のパソコンとかにも色々」と

「わかった。スコール達の携帯にも一応バックアップの為に送つとくよ」

「ああ」

景秋は円香にそう指示してベッドに横になる。

「ねえ兄さん。ミステリアス・レイディのデータなんて手に入れてどうするの。コピー？」

「それもあるけど、一番は敵になるであろう人の情報は持つておきたい。対策が立てられるからな。それに……あの人は日本の暗部だ。必ず敵になる。」

俺の予想だけど、三つ巴になる気がするんだよ。ISを兵器として使いたい世界、兵器としてのISの数を最低限に減らして元の目的で使おうとする俺ら、まだ姿すら捉えられない第三者の組織。この三つ巴になる筈だ」

景秋はそう言つて円香に聞かせる。円香は「よくそこまで考えるよな」と呆れに似た感情を抱いた。

「その第三者は味方？」

「恐らく敵だ。でも世界の味方でも無い。予想の域を出ないからなんとも詳しくは言えないけど、その第三者は織斑千冬を利用してる奴がボスなんじゃねえかなあ……って。目的は……ただ戦争をしたいだけなのか……それともほかに何か目的があるのか……わからねえけどな」

景秋は円香の問いに答えてから目を瞑つた。まるでそれは眠るのではなく、これから起こるであろう大戦の為に策を考える様にも見え

## 第六話：戦鬼は新たな力に目を輝かせ

第六話：戦鬼は新たな力に目を輝かせ

ミステリアス・レイディのデータを手に入れてから始めての休み。景秋はエヴァンスエレクトロニクスへと赴いていた。

「久し振り……って程でも無いか。帰ったよ、昇さん」

「ああ。おかえり、景秋。束博士なら開発部の方に……今一瞬でこっちに来たよ……」

「呼ばれて飛び出て束さんだよ」

「ああ……昇さんの苦勞が目に見えますよ」

景秋はそう言っつてポケットに仕舞っていたUSBを束に放り投げた。綺麗な放物線を描いて飛ぶUSBを束は難なくキャッチする。

「危ないなあ……USBは精密機械なんだからもっと大事に扱ってよ」

「束姉さんはその精密機械とやらを某猫型ロボット並みにポイポイ投げますけどね」

景秋の言葉に笑いながら流れる様にUSBから情報を抜き取り、閲覧する。

「あれ？これって専用機の武装データじゃん！珍しい物手に入れたね」

「心優しいお姉さんが俺に譲ってくれたんですよ」

「嘘付くなよ、景秋。それ、ほぼ脅して手に入れたデータだろ」

昇がそう言っつと景秋はバツが悪そうになる。

「気付かないと思っつたか？あれだけ変な録画、録音データを送っつてくれば嫌でもわかる。全く……そんな交渉術、誰から習っつたんだか……」

「多分……と言っつか十中八九、私だよね」

昇の言葉に束はパソコンを弄りながら答えた。景秋はそれに反応すること無く、コーヒーを啜る。

「うん……」

「束姉さん、どうした？」

「このデータがあれば武州五輪はコピー出来る。そう思っつたの？」

「まあ、少なからず思ってはいたよ。でもそれ以前に、情報が欲しかった。これから敵として現れるであろう人物の専用機のデータは持っていて損は無いからね」

東がパソコンを見て唸っている所に景秋が声を掛ける。返って来た問いに景秋は答えた。

「コピーするにしても、実物を見てからじゃなきゃダメだよ。データだけでコピー出来たら、今でさえISキラーとして最強の武州五輪がいよいよ手が付けられなくなる」

「なら一緒に訓練してくれて言っとくべきだったかなあ」

「なに言ってるの。実物を見ればコピー出来るんだぜ？東さんに任せなさいよ。この位の武装、試作品程度ならすぐに作れるぜ」

東の言葉に景秋は苦笑いを溢す。

「試作品程度の物なら今日中……いや、3時間位あれば作れるかな。設計図もあることだし。クーちゃんはとてご立腹だよ、話して来たら？」

「わかったよ……」

景秋はそう言っただけでその場を後にし、東もそれに続くようにラボへ向かった。独り取り残された昇もコーヒーを啜り、一言呟く。

「青春……だな」

「く、クロエ……は、入るぞ？」

景秋はクロエの自室の前まで行くとドアにノックする。けれど中からの声は同意ではなかった。

「連絡すると約束したのに、それを破る人なんて私知りません」

「……し、仕方無い……って言い訳するつもりは無いが……すみん……」

「本当に思ってますか？」

「思ってます……すみませんでした」

景秋は頭を下げる。ドアを隔てている為、見えている訳ではない。

だが、景秋は自身の持てる最大限の誠意を持って頭を下げた。

「今回は許します」

「ありがとう、クロエ」

クロエはドアを開けながら景秋に告げる。頭を上げた景秋はそのまま中に入った。

「それで、目の方はまだ・・・」

「束様が景秋のデータも合わせて試作なら作っていました。半日が限度です」

「それでも半日も見えるようになったら？リスク無しで」

「そうですね」

「ならもう半日見える様に完成させれば1日は見えるって訳だ。これでクロエの目は見える様に出来るって事が解った。それだけでも十分な進歩だ」

クロエの言葉に景秋はそう言った。クロエは首を傾げる。

「何故です？いつも過程より結果を重視する景秋らしくない」

「確かに結果は大事だ。『これだけ頑張った』とか『俺は努力したんだ』なんて言い訳には・・・慰めしかない。

俺はそんなのは嫌だ。結果は大事だ。けど、過程だって重視するさ。過程を慰めに使うか躍進の為に使うかの違いだけ・・・」

景秋の説明にクロエは「ああ、そういうことか」と心の中で納得した。

「どうしてそこまで親身になるのですか？」

「クロエには幸せに生きる権利がある。ISという物の為に産み落とされたクロエにだって幸せに笑う権利がある。そんな当たり前な事をする為に俺らはここにいます」

クロエの問いに景秋はそう答える。

「辛気臭い話して悪いな」

「いえ、景秋の思いが聞けて良かったです」

「思いつて程じゃねえけどな」

景秋は照れ臭そうに頭を掻く。クロエはそんな景秋を見てフツツと笑う。

「なんか変か？」

「いえ、景秋はもつと冷静で計算で物事を判断していると思っていた

ので」

「俺だつて人の意思とか気持ちとかそういうったモノはあると思つてるからな。」

確かに冷静に計算する事も大事だけど、それ以上に人の意思とか気持ち持つてのは大事だ。意思一つで計算を引っくり返す事だつてある。人間の武器は意思の強さ、勇気の強さだと俺は思う」

景秋がそう言つて語つた。そこで束が部屋に入つてくる。

「中々面白いことを言うね、かー君は。意思と勇気が強くても英雄になるか蛮勇になるか…。若しくは道を踏み外して鬼になるか。だね」  
「縁起でもねえ事を…。それで完成したの?」

「試作機程度ならね。ほらアリーナ行くよ」

束と景秋はテスト用のアリーナで模擬戦をすることになり、二人はアリーナに立っている。

「かー君、いつたい何時から人の意思なんて曖昧なモノを大事に思う様になったのかな? 君はその『人の意思』が怖くなつたんじゃなかつたのかな?」

束は影秋へと問う。影秋は噛み締める様に言葉を発した。

「そうだ。俺は全てが怖くなつた。……。そんで逃げた。けど、逃げて解つた事もある」

「解つた事?」

束が聞き返すが、影秋はハッキリと自信を持って答える。

「ああ、その人の意思とやらは良い方にも働かつて事さ」

「やつぱり君は面白い。普通、そんな事解ろうとは思わないよ」

「だろうな。けど、それが俺だ」

影秋の言葉に束はポカンとする。

「そうだね、それでこそ君だ。君はいつでもそうだった」

「話は変わるけど、束姉さんが乗るの?」

「うん。久し振りだなあ…。それと……。手加減は無しだよ」

「ッ……!」

お前を容赦無く殺す。そんな意思が感じられた殺気を最後の言葉

が言い終わる前に放つ。殺気に怯みかけた影秋は半歩後退る。

「こんなので怯んでちゃ、話にならないよ」

「……」

影秋は束に相對する様に下がった半歩では無く、一步前に出た。

「…… そうだ…… こんな所でビビってちゃ何も出来ねえ…… 護りたい大切なものも手の隙間から零れ落ちちまう。そんなのは嫌だ…… ツ！……」

「覚悟は出来たみたいだね…… なら行くよ。来て、バウンサー！」

「千日の稽古を劔とし、万日の稽古を胄まもりとす。以って此れ我が劔胄なり！」

二人はISと劔胄を纏う。影秋はいつもと変わらず鎧武者であるが、束の纏うIS——バウンサーは全身白の装甲を持つISだった。

「先手必勝！」

「行け、ティアーズ！」

束のビームライフルでの射撃を、放ったティアーズで相殺する。そして影秋は大太刀を握り締め、前に出た。

「零落白夜！」

「またそれに頼る。かー君の悪い癖だ。相手がISだから…… そうじゃ無いでしょ。それじゃアレと一緒にだよ」

影秋の腹部に束は蹴りを入れた。ダメージを殺せず、地面を転がる。胃の中の物が逆流し、吐くのをなんとか堪えて息を吸う。

「一体、君はいつからそんなに弱くなったのかなあ〜」

「……」

「君はIS学園と言うぬるま湯に浸り過ぎた。だからそんな綺麗事が吐ける。今までの君ならあんな綺麗事は吐かなかつたよ。君はISで箒ちゃんと再会して思い出してしまった。『俺は正義の味方でなければならぬ』って」

影秋は反論出来ず黙り込む。事実だった。IS学園では自分より強い相手はいない、本気で戦うと口では言いながらも、頭では知らず知らずセーブして戦っていた。それが解ってしまったから何も言えない。

「勝手だよ。正義の味方なんて幻想はありはしない。夢を見るのは君の自由だ。けど、その夢を周りに押し付けるのは良くないよ。影秋、現実を認識しろよ」

束の一言は鈍器の様に影秋を襲う。影秋は深呼吸して立ち上がる。「現実を認識しろ…か。中々にキツイ一言だ。けど、目が覚めた」  
「なら本気で来なよ。ISの産みの親に勝ちたいならね」  
「勿論、勝たせてもらう」

大太刀を八相に構えて束に迫る。

「さつきよりはまともになったじゃん！」

「あれだけボロクソ言われれば目エ位覚める！」

影秋の大太刀と束の刀が交錯し、金属音を鳴らす。

「目が覚めた気分はどうかかな？」

「最悪だよ。こんな気分は最悪な気分だ」

影秋の大太刀による横腹への突き。その突きは何か軌道を反らされ、地面に刺さる。

「今のが……」

「そう。今のがミステリアス・レイデイの武装、アクア・ナノマシン。意外と便利だよ、これ」

「武州五輪、コピーは？」

《可能だ、御堂》

「なら仕掛ける。俺らで勝つぞ、武州五輪！」

《応!!》

影秋は自身の大太刀にコピーしたアクア・ナノマシンを纏わせる。

「刀に水を纏わせてどうするのかな」

「まあ見てなっつて」

振り下ろした大太刀から高圧水流で形成された刃が飛んでいく。

「へえ…面白い使い方するね」

「行け、ティアーズ！」

「同じことの繰り返しに意味は無いよ！」

束はなりふり構わずに影秋に突っ込む。影秋は笑ってそれを待っていた。



「同じことの繰り返しでも、誘導とフェイント位にはなるさ」  
影秋はナノマシンで作った水の檻で束を捕らえる。

「まあ、IS相手にはこの技じゃねえとな。零落白夜、発動」  
大太刀は青い光を放ち輝く。

「雲耀——閃!!」

大太刀の振り下ろしで束はIS解除を余儀無くされる。

「ありやりや…まあ、コピー出来たなら何よりだよ」

「姉さん…ありがとう」

「どういたしまして」

束はそう言ってアリーナを後にした。

「これが新しい武器か…」

一人残された影秋は呟いて拳を握り込んだ。

## 第七話：乱入者

### 第七話：乱入者

休日を終え、クラス代表対抗戦当日。景秋は円香や箒達と観戦する為、観客席に座っていた。

「なあ、景秋。一夏の奴、勝てると思うか？」

「無理だ。初戦が確か…。鈴とだったな。なら尚更無理だ」

「仮に零落白夜を当てられたとしても、一回だけだ。一回じゃ削りきれない。最大出力なら別だけどな」

箒の問いにそう答えて景秋は腕を組む。

「始まるな…」

景秋の一言で周りはアリーナに視線を向ける。言葉を発した景秋の視線は空を見詰めている。

「鈴、お手並み拝見といこうか。お前の専用武装…貫う為にもな」

景秋は誰にも聞こえぬ声でそう呟いた。

鈴の前には白いISを纏うもう一人の男性IS操縦者——織斑一夏がどこから来るのか解らない自信に満ち溢れた表情をして立っていた。

……似ているけど、やっぱり違う。景秋はあんな自信のある表情はしてなかった。あんなに無神経じゃなかった……。あんなに希望を持ってはいなかった……

鈴は心の中でそう感じる。覚えている景秋の表情は全て暗いものだった。似ても似つかぬその顔に段々と苛立ちを覚える鈴。

……つくづく腹が立つ……。なんでこんな馬鹿が伸う伸うと生きてて、景秋が死ななきやならないのよ……

……景秋がなんであんなのか知ったとき、胸が裂けるかと思う位に痛かった。剣道を辞めた途端に態度を変える…。そんなのが本当に家族なのかと疑問に思った。剣道一つでそこまで変わるなんて景秋も思ってたなかった筈なのに……

その時、過去に一度だけ景秋から言われた言葉を鈴は思い出す。  
「鈴、勝ちが決まった勝負なんてありはしないんだよ……。ルールや当人の才能や能力……。そんな戦況の中で変わってく前提条件が一つでも多く勝っていれば勝てる。そんなものなんだよ」  
…… わかつてる、景秋。私は目の前のバカを殺してでも勝つ……

そこで試合開始のブザーが鳴り響く。織斑一夏はいつもと変わらず、ただ突っ込んで雪片を振り下ろす。

「そんな攻撃……。私に効くと思った？」

鈴は双天牙月の二刀流を左右交互に振り下ろす。戦況は一変した。織斑が攻撃の主導権を握ったと誰もが思っていた。だが、実際は鈴が織斑を押ししている。左右交互に振り下ろされる双天牙月の猛攻が織斑を襲っている。

「…… 殺す気か…… 鈴」

「殺……。え？」

「鈴の奴、殺気だだ漏れだ。あんなの、私は相手を殺しますよと大っぴらに言いながら戦ってる様なもんだ。何を思ったのか知らねえが、あんなのはただの八つ当たりだ」

景秋の呟きに箒が反応する。景秋は答える様に言葉を続けた。

「見てれば俺の言葉の意味が解る」

実際、目に見える試合はそう見えた。憤りを晴らす様に双天牙月を振るい、それでも近付いて来れば蹴りを入れる。戦闘とも呼べない一方的な蹂躪に影秋は心底イラついていた。

「ちよ、ちよっと待てよ！」

「待つ訳無いでしょ！…… オラア！」

鈴は双天牙月で雪片を上を吹き飛ばしてバランスが崩れた所に蹴りを入れて蹴り飛ばす。

「プライベートチャンネルにしたわ。あの時、モンドグロツソであった事を全部話さない」

「な、何を……。話す事なんか……」

「居なくなってたらしいけど、何も思わなかったわけ？」

鈴の言葉に織斑は叫んで答える。

「思うわけねえだろ、あんな奴がいなくなろうと！」

「書き置きがあつたつてのは？」

「俺が政府の人に言われて書いたよ。なんでも証拠だかなんだかに使  
うつてよ！」

織斑の答えに鈴は呆れて何も言えなくなる。それを隙だと勘違い  
したのか織斑は相も変わらず突っ込んでの振り下ろし。

「隙だらけだぜ！」

「ハア…… あんたら家族はつくづく腐ってるわね……」

振り下ろしを回転する様に避けて回し蹴りを放つ。

「アンタは詳しい事知らなそうね」

「詳しい話は千冬姉が全部してたからな。でも俺も千冬姉もあんな奴  
が居なくなつて清々したよ！」

織斑は答える。鈴は見下す様な目で織斑を見ながらまたも問う。

「そう…… なら最後の質問よ、本当の事を話なさい。兄さんが居な  
くなつて、どう思つてたの？」

「あんなの兄でも家族でもねえよ。誰よりも強くて才能持つてたの  
に、何が「飽きたから」だ。ただ飽きたつてだけで剣道辞めたクソ野  
郎の事なんて何とも思う訳ねえだろうが！」

織斑の答えを聞いた時、鈴の中で何か切れた。人として越えては  
いけない最後のラインを越えてしまった。

人間としての最後のライン——人を殺してはいけないと言うラ  
インを越えた。

……ふぎけるな…… お前のせいで景秋は剣道を辞めたんだ……  
お前が弱いから剣道を辞めなくちゃいけなかつたんだ…… お前ら  
が…… お前らが…… お前らが……

「お前の…… お前の…… お前のせいでええ！」

「な、なんだよいきなり！」

「うっさい！お前のせいで！」

鈴は我を忘れる事なく純粹な殺意と怒りだけで織斑へと攻撃して  
いく。織斑の反撃は空しく避けられ、逆に双天牙月での連打を食ら

う。織斑が距離を取った瞬間、景秋が待ち望んでいたものを放った。「これでも食らって沈め」

激しい衝撃音を伴って織斑が吹き飛ばされる。

「漸く出したな…… 武州五輪、コピーしろよ」

《諒解した》

景秋は誰にも聞こえぬ様に呟く。実際、全員が試合に夢中であつた。

「な、なんだよそれ！」

「言うとな…… 冥土の土産に聞かせてあげるわ。衝撃砲って言うてね、空間そのものに砲身を作る砲台とでも考えれば良いわ」

「反則だろ、それ……」

「反則もクソもないわよ。どこかの誰かさんとは違ってね」

鈴はそう言つて織斑へ迫ると双天牙月を振り下ろす。織斑は寸での所で避け、反撃するも衝撃砲で吹き飛ばされる。

「ウワアッ！」

「その程度で私に勝てると思つてたのかしら？」

「ま、まだ負けてない！俺は勝てる！」

「ハア…… アンタとのお遊びももう飽きたわ。さっさと止めを刺して終わりにするわよ」

地面で膝を着き、肩で息をしている織斑へと鈴は一步步近づいていく。

その時、上空からシールドバリアを破り、何者かがアリーナに現れた。

「セシリアと箒、観客席にいる生徒全員避難させろ。非常時ならIS使つても良いぞ、責任は俺が持つ。ほら行け！」

「兄さん、私は？」

「俺と一緒にアイツの相手だ。俺らじゃねえと相手出来ねえ」

景秋と円香は二人でアリーナへと向かう。だが、そこで箒の音が響く。

「ドアがロックされてて外に出れない！」

「ッ…… 円香、頼んだ」

「わかった。……世に鬼あらば鬼を断つ。世に悪あれば悪を断つ。ツルギの理ここにあり！」

円香はそのままドアに近付き、太刀を構えた。

「皆、下がって。……臙・焦屍剣！」

極限まで熱された太刀でドアを焼き斬ると皆が避難していく。

「ありがとう、円香」

「ツ……うん。速く逃げて……」

円香はそのままアリーナへと向かう。箒は逃げる前に景秋へと声をかける。

「景秋……気をつけて……」

「箒……ああ、行ってくる」

景秋はそう答えて円香の後を追う。

「お前、何者だ！」

「僕は狭間、狭間悠騎はざまゆうきと申します……。一応、君達の敵ですね……はい……」

狭間悠騎と名乗った男は頭を下げる。そこで息を整えた織斑が突っ込んでいく。

「よせ！お前じゃ無理だ！」

「ウルセエ！俺ならやれる！」

「おやおや、元気の良い事で……。あまり調子に乗るんじゃねえぞ、クソガキ！」

狭間は歪に笑って織斑の頭を部分展開したISの腕で掴むと地面に叩きつける。

「グアア」

「ヒヤハハハハ!!面白れえ声で鳴くじゃねえか」

……まずい……。あの男の能力が解らない以上、迂闊に近づく訳には……

景秋がそう思って距離を取ろうとした時、鈴と円香が突っ込んでいく。

「おい、よせ！」

「ハアアア!!」

「私と円香ならなんとかなる！」

太刀と双天牙月二刀流の振り下ろし。それを難なく掴む。

「この地べた這いずつてるクソガキと同じ様にしてやって良いんだぜ？ヒヤハハ」

「…………… 千日の稽古を劔ちからとし、万日の稽古を胄まもりとす。以つて此れ我が劔胄なり！」

景秋が劔胄を纏つて二人を助ける為に大太刀を担ぐ様に構え、接近する。

「…………… コイツらに比べりや、面白そうなヤツだなお前」

「そうかもな。ソイツらよか俺の方が強いぜ」

景秋は狭間を指で挑発する。

「ヒヤハハハハ！良いぜ、お前エ！ウロボロスウ!!」

狭間は黒に緑のラインが塗装されたISを纏う。だが、ISにしては小さく、景秋達と同じ、劔胄の様にも見えた。

「これが俺の専用機、ウロボロスだ。さあ…行くぜえ！」

狭間がバタフライナイフを両手に握り景秋に迫る。景秋も中段に構え直し、攻撃に備える。

「お前以外に仲間は居ないのか？」

「居るには居るが、この場にいるのは俺だけだぜ。オラ、余所見すんな！」

狭間のナイフと景秋の大太刀が金属音を鳴らす。鏝迫り合いになり、絶え間なく金属音が流れている。

「オイオイ、時間稼ぎは詰まんねエぞ！」

「これが時間稼ぎに見えるか？」

景秋は狭間の体を支える軸足である右足を引っ掛けて後ろに転ばせる。バランスを崩した所に、そのまま大太刀の振り下ろしを食らわせる。

「ウロボロスの武装はなア… ナイフだけじゃねえんだよ！ウロボロス！」

ナイフを手放した狭間の腕の装甲の隙間から鎖が飛び出し、大太刀の振り下ろしを防ぐ。

「アブねえ……ヒヤハハ！良いぜ、良いぜ！」

「畜生……ッ！」

「良い作戦だったが……一歩及ばなかったなあ」

「狭間がバランスを立て直し、鎖がギシギシと軋む。」

「今のが決まってるや……」

「オイオイ、今更後悔すんなよなあ。白けるだろうが」

「こんな博打に出なくて済んだのによお！」

「景秋は一瞬で距離を取る。狭間も後を追おうとするが体が動かなかった。」

「生徒会長殿に感謝だな……。その拘束、生半可な力じゃ解けないぜ」  
「透明な鎖で体を拘束されていた。」

「生徒会長殿の武装のアクア・ナノマシンを散布、その後に鎖に形状変化させてお前を拘束。ハア……こんな博打は二度としたくねえ」

「クソがアアア!!」

「景秋は大太刀を構え直し、警戒態勢に入る。」

「鈴、円香。大丈夫か？」

「大丈夫だよ、兄さん。織斑も回収済み」

「助かったわ、景秋」

「警戒しながらも景秋は二人に連絡を取る。狭間からは目を外さずに会話を続ける。」

「…………… チツ…… わーっただよ！」

「狭間も誰かと会話していたのかぶつきらぼうにそう言った。」

「この拘束外してくんねえか？」

「誰が外すと思ってる」

「何もしねえよ。相方が仕事終わったから撤収だよ」

「…………… させる訳ねえだろ」

「なら良いぜ、自力で壊すからなあ」

「景秋の答えに狭間は納得せずに力を込める。すると鎖は音を立てて千切れた。」

「中々の鎖だが、俺には及ばねえなあ…………… それではまた会いましよう」



狭間はそれだけ言い残して去って行った。

「狭間悠騎……三人目の男性IS操縦者……俺や織斑以外にもいたのか……」

アリーナに一人残された景秋はそう呟く。

今回の件に関わっていた、景秋・円香・鈴・織斑は学園長室へと呼ばれる事となった。

## 第八話：戦鬼は真実を語る

第八話：戦鬼は真実を語る

謎の狭間悠騎なる男が去ってから一時間が経った。関わっている件の四人は学園長室へと呼ばれ、事情聴取を受ける事となる。

「さて、まずは東雲君。君から話を聞こう」

「どこから話すべきでしょうか？」

「最初からお願いします」

景秋の問いに轡木十蔵が答えた。答えを聞いた景秋は話を始める。「自分は篠ノ之やオルコット、円香と観客席で観戦していただけです。まさか侵入者が来るとは思いませんでした。自分は織斑や鳳では対処は難しいだろうと思ひ援護を……」

景秋の言葉を遮って千冬が言葉を発した。

「あの程度の侵入者など、一夏だけで事足りた。それに教師部隊も待機していたのだ。貴様が余計な事をしなければ……」

「ほう？一瞬で頭を掴まれ、地面に叩き付けられた挙げ句、足蹴にされていた織斑だけで事足りた？鳳も円香も歯が立たず、自分ですら足止めが精一杯だった相手が織斑だけで事足りるとは思えませんがね。更に、貴女の言う教師部隊とやらも結局は駆け抜けてこなかった……」

景秋がそう言うと千冬は親の仇を見る様な顔で景秋を睨み付ける。だが、景秋は意に介さず言葉を続けた。

「円香にISの使用を許可したのは確かに自分です。実際にドアはロックされ、円香のISの武装が無ければ避難誘導すら儘ならなかった事もあり、円香には情状酌量の余地はあるかと思ひます」

「なら自分はどの様な罰でも受けるか？」

轡木の言葉に景秋は頷くと言葉を続ける。

「はい。円香のIS無断使用に関しては自分が責任を取ると言いました。どの様な罰であろうと甘んじて受けさせて頂きます」

「それは捉え方によっては妹を庇っている様に思えますか？」

その言葉に景秋は心の中で苛立ちながらも淡々と答え続ける。

「円香では無く、篠ノ之やオルコットがISを無断使用した場合であつても自分は責任を負います。自分はそう言つて、彼女らを避難誘導へと送り出しました。非があるとすれば自分です」

景秋はそう言い切つて一步下がる。

「本人がここまで言つてる事ですし……情状酌量の余地はあると判断し、東雲さんには原稿用紙一枚の反省文の提出。代わりに東雲君、君が彼女の罰も加えて二週間の停学だ。良いね？」

景秋が頭を下げてその場を去ろうとした時、鈴が異を唱える。

「ま、待つてくださいい！」

「どうしました？」

「かげ……東雲さんと東雲君だけが罰を受けるのはどうかと思います。私と織斑も罰を受けるべきだと思います。私は東雲君の制止を振り切つて乱入者へと向かつて行きました。織斑も同様です」

鈴はそう言つて意見する。轡木はその意見に唸り声を上げて考える。

「それでは二人にも反省文二枚の提出を罰としよう。それでいいかな？」

鈴は納得したのか頷いたが、織斑は納得出来ずに声を荒げる。

「なんで俺も反省文書かなきやいけいないんだ！」

「聞いた話によると君は命令無視に加え、東雲君の制止も無視。その結果、乱入者……狭間と名乗った男にいいようにやられ、周りも危険にした。違つかね？これ以上、文句を言うようであれば罰を重くする事も可能だよ」

轡木がそう言うも、織斑は止まらず文句を言い続ける。

「なら仕方無い。織斑君、君も二週間の停学だ。良いね」

轡木は有無を言わせず話を切り上げた。

「皆、解散で良いよ。ああ、東雲君は少し残りたまえ」

「はい」

皆が帰り、景秋一人が残された。

「まずは乱入者、狭間悠騎と名乗った男について。何も知らないつて

事で良いのかな？」

「はい。俺はあの男は初見です。俺や織斑以外にも男性 I S 操縦者がいるとは…… 轡木さんはご存知で？」

「いや、私も初めて聞いたよ。それに見付かっていれば、この学園に話は来る。つまりは……」

「秘密裏に見付かった操縦者と言う事ですか？」

「その可能性が高い。若しくは、人工的に作られた可能性も少なからずあるね…… そうだ、二週間で良かったかな？」

轡木は話を変えて景秋に問う。

「はい。二週間もあれば、俺は十分です」

「なら今すぐにでも帰りなさい。時間は有限ですよ」

「はい。失礼します」

景秋は頭を下げ、その場を後にした。

「兄さんはどうするの？」

「俺は会社に戻ってあの流派教わる」

部屋に戻った後の円香と景秋の会話。

「でも停学じゃ……」

「轡木さんに事前に言っておいたからな。だから二週間って時間をくれた」

「わかった。気をつけてね」

「ああ、わかっている。さて、そろそろ行く」

景秋がそう言っ指輪を嵌める。

「来てくれ、ダークホーク」

景秋の体を流線型の黒い装甲を持つ I S を展開した。

「あれ？ I S なんて持ってたっけ？」

「移動用のステルス機。戦闘は最低限しか出来ないけど、レーダーにも写らないし、サーモにも写らない。最強のステルス機」

「兄さん。がんばってね」

「おう。行ってくる」

景秋は窓を開けて飛び立って行った。残された円香は窓を閉めて

その場に座り込んだ。

「これで独りか……慣れてた筈なのにな……兄さん……」

景秋はエヴァンスエレクトロニクス社に到着し、社長室への道を歩く。景秋は声を掛けられるが、別の人だと思い、無視してそのまま歩く。

「おっ！その少年！」

謎の長身の男は景秋の頭を掴み、景秋を止める。

「どなたですか？」

「ああ、自己紹介がまだだったな。俺の名前は加々美かがみ一条いちじょう。そうだな……君に剣術を教える仕事を担った男だ」

「は？」

景秋はその言葉に首をかしげる。そして答える様に一条は言葉を返す。

「いやいや、今更剣術なんて教わった所で……」

「でも君の剣術は我流だ。雲耀……って言ったっけ？……確かに示現流で言う所の雲耀に近い剣速は持ってる。けど、技の引き出しの少なさ、応用も利かない技に拘る意味は無い。君もそう思ったからここに来たんだろ？」

「……」

一条の言葉に景秋は言い返せずに黙る。  
「今の君は良く言えば才能任せ、悪く言えば傲岸不遜ってところかな。君の荒削りの才能と天賦の才を使い物にしてやる」

「……俺のどこが才能任せなのか教えて頂きたいものだ」

景秋は一条に言い返す。けれど自分でも才能任せな事は理解していた。その事実を受け入れられず、異を唱える。

「今、言っただろ？君の我流剣術自体が才能任せな証拠だ。示現流をイメージして剣を振ってるんだろうけど、本物の示現流に遠く及ばない。それどころか中伝の剣士にすら劣るよ、君は。其ほどまでに君は弱い。弱すぎて話にならない」

突き付けられた現実に景秋は吐きそうになる。吐き気をなんとか

堪えて言葉を出す。

「アンタは信用出来るのか？」

「安心しろよ。君は二週間ここに居られるんだろ？なら一週間半で君の荒削りの才能と天賦の才を使い物にしてやるよ」

一条はそう言つて歩き出す。

「ついてきな。時間は有限だぜ」

景秋は言われた通りについていき、辿り着いた先は社内に設置された道場だった。

「なんでここに？」

「そりゃ、剣術を教える為だからね。アリーナでバチバチやりあうもんだと思つてた？」

「まあ…」

「君には吉野御流合戦礼法つて剣術を覚えてもらう」

一条はそう言つて景秋に木刀を放り投げる。景秋は軽々とそれを掴んだ。

「一週間半で覚える？」

「ああ。君の特技、見たものを再現する。その特技があれば一週間半で技は覚えられる。後はひたすら実践あるのみだ」

「はあ…」

一条はそう言つて景秋を道場の中へと引つ張る。

「これから一週間半、地獄だぜ？覚悟しろよ」

一条はニヤリと笑つてそう言つた。

## 第九話：絶望を知って

### 第九話：絶望を知って

景秋が一条から吉野御流合戦礼法を教わり始めてから、一週間半が経過した。

「まあ、技だけなら免許皆伝と遜色無いけど、やっぱり何処かぎこちな  
い。実践の中で流れる様に技が出せないとな」

「ハア……ハア……なら、早く実践とやらをやらせてくれよ」

道場の床に倒れながら息をする景秋はそう言う。既に景秋の着て  
いる胴着と袴は汗でビショビショで、その稽古量を物語っている。

「いや、まだだ。景秋、お前にはまだやって貰いたい試験がある」

「試験？」

「試験より試練と言った方が良いかも知れないな。それは【兜割り】  
だ」

一条の言葉に景秋は立ち上がり、首を傾げる。一条は道場の倉庫か  
ら兜を括り着けた柱の様な物を持ってきた。

「まあ、見て貰った方が早いな。この兜……劔冑の装甲に使われてる  
金属で出来た兜だ。この兜をこの刀で真つ二つに斬って貰う」

「いや、どう考えたって無理ですよね？」

景秋の言葉は最もだ。人の筋力、なんの変哲も無い刀などで斬れる  
訳が無いのだ。それでも一条はその言葉を否定して言葉を続ける。

「いいからやれ。良いか、出来るまで実践はやらせねえからな」

一条はそれだけ言い残して道場を後にした。

「随分と無茶な事させてるじゃない？劔冑の装甲を刀で斬るなんて」

「篠ノ之博士……これでも優しい方ですよ。才能がある彼は簡単に  
に技は覚えたかもしれない。けど、これで彼の本当の力量が解る。才  
能に溺れて阿呆か、はたまた才能を生かす天才かどうかが」

一条はすれ違い様に声を掛けてきた束にそう答える。

「それに元々の目的は出来ないと自分で言いに来る事です。【自分は  
常に人の身である】と心に刻み込む為にやっつてる事。劔冑を纏って  
も、ISを纏ってもそれは変わらない。俺らは皆、等しく人間ですか

ら

「かー君はどうかかな？ 言いに来そう？」

「さあ？ でも稽古や剣を見る限りだと言いに来ると思いますが。でも……」

一条は少し考え、言葉に詰まる。その時、束は聞き返した。

「でも？」

「でも、もしも兜を真つ二つに斬り落としたなら…… アイツの剣は最早、魔剣ですよ。何人たりともその存在を止める事は出来ず、止められるのは、同じく魔剣を持った者のみ」

一条の言葉に反応した束は嫌味っぽく聞き返す。

「君はその魔剣とやらの域に達したのかな？」

「言つたでしょ。自分は常に人の身であると刻み込む為にやる行為だと。普通は出来ませんよ。もしも出来たとしたら…… あれは化ける」

一条はそれだけ言い残してその場を後にし、答えを聞いた束も何処か嬉しそうにその場を後にした。

「ハア……ハア……ハア……ハア……」

兜割りなる試練を開始してから一時間が経過した。景秋の額や腕、体の至る所から汗が滝の様に流れ落ちる。既に景秋の足元は小さな水溜まりの様になっていた。

そんな風になってまで続けても達成していない。刀の刃は既に刃毀れを起こしボロボロ、切っ先も欠け落ちて鋭さは全く無い。

……畜生！ なんで出来ねえんだ……何が足りない……俺には……

景秋の手から刀が滑り落ち、ガシヤンと金属音を鳴らす。それにすら気付かず、景秋は崩れる様に膝を着き四つん這いになる。

額から流れ落ちる汗と涙で出来た水溜まりに自分の顔が反射する。景秋の顔は挫折や悔しさなどの感情が入り交じった何とも言えない表情になっていた。

……どうすればいい……どうすれば……



初めての挫折。景秋にとって、これが初めての挫折だった。今まで負けたことも無ければ、何かに挫折して諦める事もなかった。それ故の脆さ。

景秋は挫折に対してはとても脆く、ガラス細工の様に心が砕けた。

景秋がそれを自覚した途端、流れ落ちていただけの涙は勢いが増し、溢れ出る。

「……………クツ……………ウツ……………」

声にならずに、嗚咽音だけが道場に響く。手から滑り落ちた刀は景秋の姿を鏡の様に写す。

……………まさかここまで脆いとは……………でも、これで良い。こうでもしなきゃ、景秋に成長は有り得ない。乗り越えろ、景秋……………

道場に戻っていた一条は心の中でそう呟いて道場を再度離れた。

……………泣いてる場合じゃ無いだろう、東雲景秋！……………俺は強くなるためにここに居るんだろ！……………

景秋は立ち上がりながら涙を拭い、刀を拾い上げて兜割りを再開する。ボロボロの刀でも尚、兜を斬る為、ただそれだけの為に刀を振るうのだった。

景秋が兜割りを開始してから3日経過した。残された時間は後、五時間。それでも兜割りは達成していなかった。

「ハア……………ハア……………」

折った刀は10本以上。それでもまだ足りない。

「もう少し……………後、もう少しで……………なにかが掴める……………」

景秋は折れた刀を後方へ投げ捨て、自身の隣に置いてある籠から刀を引き抜いて、兜割りを再開する。

……………もつと疾く……………もつとだ……………もつと疾く、もつと強く！……………

「景秋、次の一振りですラストだ。そろそろ学園に戻らないと怪しまれる」

「待つてください！まだ……………まだ！」

「解ってる。だが、後一振りだ。後一振りです答えが出なければ、お前に

吉野御流合戦礼法印可を与える事は出来ない」

一条にそう言われ、景秋は声を荒げる。だが、一条は景秋を宥めて景秋の最後の一振りを見守る。

……これが最後、失敗すれば全てが台無し。成功すれば、最強の一振りが完成する……面白い……やってやる!!……

景秋は刀を構えて息を整える。その場には張り詰める殺気と緊張感が流れる。

「ハアアアアアアアアア！」

轟音とも言える叫びと共に振り下ろされた一太刀は押し込まれる様に兜を斬り割っていく。兜は真つ二つに切断され、刀は衝撃に耐えきれずに音を立てて碎けた。

——ここに、魔剣を持った男が誕生した瞬間だった——

「や……やった…… やったんだ!!」

「おいおい……嘘だろ…… 本当による奴があるか……」

二人の表情は全くの逆さ。一人は成功の喜びに歓喜する者。一人は現実を受け止められず、呆然とする者。

「これで、認めて貰えるんですよね？」

「あ、ああ……。東雲景秋、貴殿に吉野御流合戦礼法印可を与える……。良くやったな、景秋」

「ありがとうございます……」

一条はそう言って手を差し伸べる。景秋もそれに答える様に手を取って握手をした。

「だが、忘れるなよ景秋。俺らは人だ。自分は常に人の身であると刻み込め。いいな？」

「はい、わかりました」

「解ったなら行け。俺が教える事はもう何も無い。お前は本当に天才になった」

一条の言葉を背に景秋は道場を後にした。

「その様子だと成功したみたいだね。かー君」

「え、ああ、うん」

「なら良いかな。はい、武州五輪とダークホーク。ちゃっちやとIS学園に戻らないと、心配されるよ?」

束から言葉と劔冑、ISを受け取った景秋は制服に着替えてISを展開するとそのまま学園へと飛び立って行った。

「どうだったの、かー君は」

「ありや化けましたね。挫折した事無いって聞いてましたが、そんな事無く、立ち直りも早かった。あれは本物の天才です。けど、過去と折り合いつけられてませんよね、あれ」

一条はそう言つて束の方を向く。

「だろうね。過去を忘れようとする度に思い出す。私だつてそうだし、だから慰霊碑に献花して頭下げて謝り続けてるんだもん。」

私ですらそうなるならかー君は相当辛いと思うよ。だから受け入れて前に進むか、今のままズルズルと引き摺るのか。どっちを選ぶかはかー君次第だよ」

言葉を言い終えた束は、景秋が飛び立って行った方角の夕空を見上げた。

## 第十話：戦鬼と出会う銀髪の兎達

第十話：戦鬼と出会う銀髪の兎達

停学明けの景秋は何事も無かったかの様に教室に入り、自身の席に座って時間が来るのを目を積むり適当に待つ。

……そう言えば、結局実践やらせてもらって無いぞ……一条め……

クラスの中に居ても誰かが話し掛けてくる。なんてことは無い。景秋のクラスでの立ち位置はあくまでも近寄りがたい男。一度だけ乱入者と戦ったからと言ってそれが変わる訳は無い。

「兄さん、久し振り」

「おう、円香。心配掛けた」

「別に。兄さんのやりたい事が出来たならそれでいいよ」

教室にやってきた円香に声を掛けられ、景秋も言葉を返す。そこで見えたのだ、銀髪の小柄な少女と金髪の青年を。

「あの二人……」

「ああ、編入生のラウラ・ボーデヴィツヒとシャルル・デュノアだな」  
「箒……」

「久し振りだな、景秋。と言っても二週間だけだが」

「確かにな。それにしても俺が居ない間に編入生なんて来てたんだな」

景秋の呟きに、箒は答える。

「確かに珍しい時期ではあるな。けど、私と同じような境遇なら納得も出来る」

「そうかもしれないな。……何もなければ良いんだがな」

景秋の憂いだ呟きは誰にも聞こえる事はなく、消えた。

IS 実習の時間。景秋を含めた男性 IS 操縦者三人はアリーナに備え付けの更衣室にて着替えていた。

「それにしても、IS 学園って思ってたより大変だね」

「デュノアはそうだろうな。そこまで顔が整っていれば、さぞ苦勞す

るだろう。これからもな」

「アハハ・・・それは勘弁して欲しいかなあ」

景秋は制服の上を脱いでTシャツ姿になるとアリーナを出ていこうとする。

「あれ、東雲君・・・だったかな？ ISスーツに着替えないの？」

「俺の IS は特別製でな、 IS スーツに着替える必要は無いんだ」

景秋はそれだけ伝えて、更衣室を出る。その後、遅れて来た二人は千冬に名簿で殴られていた。

二組との合同訓練。景秋の周りにはいつものメンバーが集まってならんでいる。

「二週間の間、皆と訓練してても暇だったのよねえ」

「私達では役不足とでも言いたげですね、鈴さん」

「そんな意味じゃないわよ。景秋ほど接近戦が出来る人って少ないから」

「その言い方だと捉え方によっては『お前は私より弱い』と言われているように感じるからやめておいた方が良くぞ、鈴」

景秋は話をしていいる横で鈴に注意する。注意された鈴は少しバツが悪そうにしていた。

そこに織斑とシャルルがやって来る。

「おい、景秋。俺ら置いていくとか酷くないか？」

「別に酷くないだろ。お前らが時間なのに会話してるのが悪い」

「はあ?!なんでそうなるんだよ?!」

景秋と織斑の会話にシャルルは苦笑い。周りも同様。

「..... 独りでやってろ」

景秋はそう言って黙った。少しすると千冬がやって来て、織斑を名簿で殴る。その後、織斑は景秋を睨んでいたが、景秋の一瞥でそれすらも止んだ。

「今日の授業の前に少しだけ模擬戦を行って貰う。今から名前を呼ばれた生徒は前に」

千冬がそう言うと周りの雰囲気ガラリと変わる。まるで自分が

選ばれると思っっているかの様な雰囲気漂う。

「そうだな… 東雲兄妹にやってもらおう」

「あれ、あからさまに嫌がらせよね」

「鈴さん、もう少し声量を下げてくださいまし。あの教師に聞こえますわ」

「聞こえる様に言っつんのよ」

千冬の選抜に鈴は文句を言う。セシリアは声の大きさを注意するも鈴は聞く耳を持たなかった。

「相手が誰でも負ける気は無いよ。例え、兄さんであつたとしても」  
「同意見だ。誰が相手だろうと相対するなら斬り伏せるだけだ」

円香と景秋はそう言っつて列から外れ、前が出る。

「貴様ら兄妹の相手は山田先生だ。この間の件もある。絞られてこい」

空を見上げると山田先生がラファール・リヴァイブを纏つて現れる。景秋と円香は二人共、右手を前に突き出して口上を唱えた。

「千日の稽古を劔とし、万日の稽古を胄とす。以つて此れ我が劔胄なり」

「世に鬼あらば鬼を断つ。世に悪あらば悪を断つ。ツルギの理ここにあり」

それぞれ劔胄を纏つた二人は刀を抜刀し、空へと向かう。

「2対1でやるのも後味悪そうだな。円香、やれるな？」

「勿論」

「ならやっつてやれ」

「わかった」

二人はプライベートチャンネルで会話を済ませて戦闘へと頭を入れ換える。

「それでは… 始めろ！」

千冬の声と同時に円香は全速力で山田先生へと斬りかかる。初撃を食らつたのみで、その後は山田先生もブレードを出して斬り結ぶ。

「東雲君の影に隠れがちですが、中々やりますね」

「兄さん相手なら誰だつて霞みますよ、先生」

鏢迫り合いの最中の会話。景秋はと言うと、遠く離れた所で腕を組み、戦闘を観戦している。

鏢迫り合いで膠着した円香は右手首にある筒を山田先生へと向けた。

「正宗、力を貸して…ッ！」

《何を今更!!》

鈍い痛みを感じながら円香は山田先生と鏢迫り合いを続けた。すると、筒から弾丸が射出される。

砲から放たれた弾丸には速度は無く、威力も無い。それはまるで押し出したかの様だ。そんなものを攻撃に使うのはあまりにも無謀だった。だからこそ円香は使った。

激しい轟音を伴いながら爆発するそれからは何かの破片が混ざっていた。

…… IS相手じゃこの攻撃は通じないか… ああ… チクシヨウ… 滅茶苦茶痛い……

周りは声を失った——自身の目に写り、目の前で起こっている事象を受け入れられずにいる。

「こ、これ…… 骨と装甲… ですか？」

「ええ、まあ。そういう武装なんですよ、これ」

円香はそう言い終え、痛みを噛み殺すと刀を中段に構えた。

「朧・焦屍剣！」

炎獄の如き灼熱に手を焼かれると同時に刀が熱を帯びていくのが分かる。刀身の周りには陽炎が揺らめき、空間を歪ませて見せる。

「仕切り直しですね。勝たせて貰いますよ、先生！」

円香はそう言って再度山田先生へと迫る。対する山田先生も円香と同様に前に出る。

「二度目は通じないか…」

「流石に対策立てますよ」

もう一度鏢迫り合いになる。だが、山田先生のブレードを熱せられた円香の太刀が切断する。切断されたブレードの切断面は溶けていた。

「なっ！」

「これで終わりです、先生」

円香の言葉通り、円香の猛攻に反撃の機会を見出だせずに山田先生は敗北した。

「…… やっぱり、臙・焦屍剣は使うタイミング考えないと…… 私の腕が焼け焦げる……」

円香は劔冑を解除した後、自身の焼けた掌を眺めながら思う。幾ら治癒力が高かろうと痛いものは痛いのだ。

物思いに耽っていると景秋が円香の元に向かい、円香の頭を撫でた。

「頑張ったな、円香。よくやった」

「兄さん……」

「だが、自傷行為はなるべく控えろ。姉さんに打診はしてみるが、そう言う劔冑だからな。使うなどは言わない。だが、多用はするな。痛いのを我慢するのも大変だろ？」

「う、うん…… ありがと、兄さん」

円香は恥ずかしそうに俯く。景秋はそんな円香の気持ちを知らずに言葉を続けた。

「けど…… 怪我が無くて何よりだ。正宗の治癒能力に感謝だな」

景秋はそう言って皆の所へ戻っていく。円香も景秋の後を追って皆の所へと向かった。

「タハハ…… 負けちゃいました……。東雲さん凄いですね。これで東雲君まで参戦していたらと思うと…… もっと速く敗けてたかもしれませんね……」

山田先生の言葉に千冬は円香と景秋に親の仇でも見るような目付きで睨むものの、姉弟揃って景秋の一瞥には勝てなかった。

「…… この兄妹が放課後に訓練をしているのは皆も知っているだろう。東雲がここまで強くなったのも、その訓練での努力の賜物だ。専用機を持っていない者は借りる事だけで精一杯だと思うが、努力だけは怠らないようにな」

千冬 of 言葉に事情を知らない生徒は返事をする。だが、事情をある



程度知っている者は怪訝な表情を見せた。

「あれ、絶対心にも思っただけ無いわよ」

「その位、分かりますわ」

「ほら、そろそろ訓練の時間だ。お喋りは控えろ」

景秋は鈴とセシリアに注意し、訓練の準備を進めていく。

「…… そんなに睨むな、織斑千冬…… 貴様がこの学園すら裏切っている事をバラされたくなければ、だがな……」

その日の訓練は飛行訓練で専用機持ちが指示を出しながら進めていったが、シャルルや織斑の元へ生徒が集まることは容易に想像出来ただろう。

放課後、景秋を中心としたメンバーでの訓練。そこにはなぜか織斑がいた。

「なぜ織斑がいる。俺の居ない間になにがあった?」

「あのバカ姉が告げ口したのよ。そしたら『俺も混ぜてくれよ。皆でやった方がいいだろ?』だと。なにバカな事抜かしてるんだか」

「…… 追い出せないのか」

「無理ですわ。私や箒さんでお引き取り願おうと何を言っても聞く耳を持ちませんの」

「ああ、一夏め…… あそこまで酷いとは……」

景秋の問いに各々が答えていく。皆、腹立たしいのだろう。鈴に至っては地面を何度も踏みつけては「クソ」と連呼する始末。景秋も見つめられなくなったのか、織斑の元へ向かう。

「織斑、なぜ貴様がここにいます」

「え? 訓練するんだろ? 俺も一緒に……」

「正直に言う。邪魔だ、織斑一夏。誰に唆されたのか知らんが、許可も無く、他人の借りているアリーナにずかずかと……。その歳にもなつてマナーと言うものを知らんのか」

景秋の言葉に織斑はあっけらかんとしている。その態度に呆れた景秋はその場を去る。

「…… はあ…… もう知らん。好きにしろ」

「どうだったのよ、景秋」

「あれは無理だ。」

戻って来た景秋に鈴は問うが、景秋は首を横に振った。

「アレは無視して訓練すべきだ。時間が勿体無い」

「まあ、それもそうね」

景秋の言葉に頷いて、準備体操等をしながら体を解す。

「それじゃ最初は高速飛行訓練からだな」

皆が一斉に空へと飛ぶ。皆が自分の持てる最大速度でアリーナを縦横無尽に飛び回る。まるでそれは演舞の様に見えた。

10分程飛んだ後に地面に着地し、次のメニューへと移った。

「次はそうだな…回避訓練と遅滞戦闘を同時にやるか。時間無し」

「でも同時についてどうやってやるんですの？」

「遅滞戦闘訓練だと反撃もOKだ。でも今回は時間制限を設けて何秒間は反撃OK。それを過ぎたら回避行動のみ。これの繰り返しなら同時にやれる」

景秋はそう言って円香と二人で実演して見せた。実演を見たことで他のメンバーも納得したのか、皆で訓練を再開する。

訓練を続けて数十分が経った。そこで織斑がやって来る。

「俺にもやらせてくれよ。好きにしろって言ったんだし良いだろ？」

「……勝手にしろ。鈴、セシリア。相手してやれ」

景秋はそう言ってセシリアと鈴に指示を出す。

「ブツ殺す！」

「鈴さん、死体処理が面倒です。塵一つ残さずに消し炭にしますわ」

二人はそうして織斑と訓練を始めた。

「ちよつと！ちゃんと避けなさいよ！」

「ハア?!なんで反撃しちやいけないんだよ！」

「反撃するタイミングは参加してない方が指示する様になってますわ！」

織斑の言葉に鈴やセシリアは声を荒げ、その光景を見ていた東雲兄妹も苦言を溢す。

「酷いな…。」

「アレは救いようが無いね…。」

その後の訓練も鈴の攻撃にのみ集中していて、セシリアの攻撃を食らう。やり直してもセシリアの攻撃に集中していて、鈴の攻撃を食らい、反撃の機会を与えられてもまともに反撃出来なかった。

「ちよつと！やる気あんの！」

「正直、時間の無駄ですわ」

「少しくらい俺に合わせてくれたって良いだろ！」

「はい？すると思いますの？私達は遊びでやってる訳じゃありませんの。遊びのつもりなら辞めてくださる？」

「そうそう。お陰で模擬戦やる時間すら無いわよ」

遠くで織斑達の口論を見ていた景秋。その目には転入生のラウラ・ボーデヴィツヒの姿が写る。

「えっと…ボーデヴィツヒだったか？織斑目当てならやめておけ。もうアリーナの閉館時間まで少ない。また日を改める事をおすすめするが？」

「そうか。忠告感謝する」

「それと一つだけ言っておく。アレはお前が復讐対象にする程強くないぞ」

「それは私が決める事だ」

踵を返すラウラへ景秋は言葉を送る。だが、景秋の言葉を否定してラウラは帰って行った。

「じゃじゃ馬ってやつだな…。ほら、セシリアと鈴はいつまで口論してる。もう閉館時間だぞ！」

景秋は帰る為に、皆の元へと駆け寄って行った。

## 第：十一話：放つ一撃——電磁抜刀

### 第十一話：放つ一撃——電磁抜刀

織斑が乱入し特に意味の無い訓練を終えて、景秋はシャルルの元へ来ていた。

「デュノア。少し話がしたいんだが、時間はあるか？無いなら出直そう」

「ううん、大丈夫だよ。どこで話す？」

「あまり人に聞かれたくないからな。ついてきてくれ」

景秋はそう言ってシャルルを連れて屋上へと向かう。屋上に着くと、景秋はドアを塞ぐように背にして寄り掛かる。

「それで、僕になんの話かな？」

「そう警戒するな。と言っても無理な話だな。別に只の世間話をしに来ただけだ」

景秋はそう言ってシャルルの方へ向かうとシャルルの肩に手を置いた。

「ッ……」

「おいおい、俺は肩に手を置いただけだぞ。そこまで警戒する意味が解らないな」

「話す気が無いなら僕は帰るよ」

シャルルは機嫌が悪そうに言ってドアへと向かうも、肩を掴まれた腕を振りほどけなかった。

「まあ落ち着け。元気良いな、何か良いことでもあったか？」

「それで、話って？」

「そうだな。お前、妹か姉いるか？」

景秋の言葉にシャルルは表情を強ばらせた。

……顔に全て出ているぞ、シャルル・デュノア。たかが兄妹の有無を聞いたただけだぞ？腹芸が達人な様には見えないし、良くこれでスパイなんてやろうと思ったな……

「双子の姉ならいるけど、どうしたの？」

「少しデュノア社の事を調べていたらシャルロット・デュノアという

君そつくりの人が出てきたからな。更にその人が代表候補生の筈だ。なぜ弟の君がこの学園に？」

景秋は至って普通の疑問を口にする。だが、シャルルは動揺を隠せない。その一瞬を景秋は見逃さなかった。

「え？ああ、姉さんはデユノア社でテストパイロットもやって忙しいからね。だから適正が見つかった僕に白羽の矢が立ったって訳さ」

「そのペンダント、専用機か？」

「うん、僕の専用機のラファール・リヴァイブカスタムだよ」

「姉と同じ専用機を使うなんて、姉想いなんだな」

……なんて、コイツに姉がいないことなんて端から解ってる。目的が分かるまでもう少し泳がせるか。俺や俺の周りの奴等に害がなければそれで良い……

景秋の言葉に戸惑いながらもシャルルは言葉を返す。景秋にはその全てが見えているようだった。

「う、うん……まあね……」

……目を反らすなよ。笑顔がぎこちない。こういう時こそ笑わなきゃな……だからどこかボロが出る……

「ISの設定とかも姉と同じなのか？」

「流石にそれは無いよ。武装とカラーが同じなだけ」

「まあ、確かにその方が整備はしやすいだろうな」

景秋はそれ以上の事は言わなかった。いや、言えなかったのかもしれない。だが、結果として何も言わなかったのだ。

「僕からも一つだけ良いかな？」

「俺が答えられる範囲の事なら」

シャルルは景秋の答えを聞いた後、じゃあ……と言葉を続けて質問を投げ掛ける。

「東雲君は助けを誰かに求める事はある？助けを求められたとして、助けようと思っ？」

「随分と面白い問いだな。禅問答をしたい訳ではなさそうだし、正直に答えよう」

景秋の長い髪が風に吹かれ揺れる。それを気にする事なく、手摺を

背凭れに座り込んだ。

「俺は助けを求めた事は無い。この言葉だけ聞けば俺は相当強い人間だと思われるだろう。だが、違う。」

助けを求めた事が無いんじゃない。助けを求める事が出来なかったんだ。誰にも声が届かない孤独な世界で、独り孤独に耐えていただけだ。だから求めた事は無い。

助けを誰かに求められたとしても、俺はその人を助けたとは思わ無い。その人が勝手に助かるだけなんだよ。俺はあくまでも、手助けをするに過ぎない」

景秋はそう言って立ち上がる。そこでシャルルは少し笑って景秋に言葉を掛けた。

「面白い考え方するんだね、東雲君って」

「あまり考えたことはない。だが、言葉にしなければ、解らない事と言うのはこの世の中沢山あるんだ」

景秋はそう言って屋上に唯一の出入口であるドアへと向かう。

「貴重な時間を割かせて悪かった」

「良いよ、僕も有意義な時間を過ごせたから」

景秋はその言葉を聞いて屋上を後にする。そして帰り道、景秋はどこかへ電話を掛けた。

「もしもし…… ああ、あの件だけど、念のために進めといてくれ。」

ああ、俺の口座から引き抜いてくれて構わない。頼んだぞ」

景秋は電話を切るとポケットに携帯を戻し込む。

「さて、どうなることやら……」

景秋は歪に笑った。

翌日、教室に入ると何やら教室がざわついている。言葉の断片は聞き取れても、内容の把握までには至らない。

「随分、騒がしいな。何があった？」

「なんでも今回の個人対抗戦で優勝したら男子の誰かと付き合えるらしい」

「要は俺らが知らない所で景品にされている……って事か、箒？そ

れにしても俺ら男子の人権無視も良いところだ」

「まあ、そういう事だな。誰が言い出した事なのかわからないが、実際そうなっている。噂の一人…なんて事かもしれないが…」

「そうである事を祈っている…」

箒の言葉に頭を抱えながら景秋は答えた。箒は何かを言いたげにしている。

「どうした、箒。何か言いたいこともあるのか？」

「ああ、いや、別に急ぎの用でも無いから大丈夫だ」

「……そうか。わかった」

箒と会話しているとセシリアと鈴が景秋の元へやってくる。

「その顔、例の噂聞いたわね？」

「ああ。誰が言い出した事かわからないが、もしも知っていたら頭を真つ二つに割っている」

「ぶ、物騒ですわね…随分と」

「これでも優しい方だ」

セシリアの言葉に景秋は答えて席に座った。

「ほら、そろそろ時間だ。席に座れ。鈴も自分のクラスに戻ったらどうだ？」

「そうね、それじゃ放課後、模擬戦よろしく！」

「ああ、わかったよ」

景秋の日常はそうして過ぎ去っていく。その後起こるであろうハプニングを知らずして……

---

放課後、景秋は鈴達との模擬戦の為にアリーナへ向かっていた。

「あの馬鹿教師め…俺になんの恨みがあるんだ。いや、恨みしかない…」

景秋は千冬にISパーツの運搬作業を強制的にやらされ、集合時間に間に合わず、駆け足で廊下を進む。

「し、東雲君！」

「なにか用か？」

廊下で見かけた事がある生徒に景秋は声を掛けられる。景秋本人

は急いでいる時にと内心で毒突く。

「お、オルコットさんと鈴さんが、ボーデヴィツヒさんに！」

「落ち着け、落ち着いて状況を話せ」

「う、うん。景秋を待ってたらしくて、そしたらいきなりボーデヴィツヒさんが二人に模擬戦を・・・速く行つてあげて！二人共もうボロボロなの！」

生徒の言葉を聞き終えるより先に体がアリーナへと動いた。1分でも速く、1秒でも速く、アリーナへ辿り着く為に――

「間に合つてくれ――ッ！」

肺だけでなく身体中が酸素を求める。口の中に血の味が滲み、顔を歪める。そんな事に今は構ってられない。ただ目的地であるアリーナへと疾走する。アリーナの観客席への入り口を通り過ぎ、景秋は倒れる様にアリーナの様子を見た。

「――ッ！」

凄惨だった。専用機の装甲があちこちに散らばり、その専用機の持ち主であろう二人はアリーナの端で倒れていた。

景秋は息を整えながら箒や円香の元へ駆け寄る。

「これはどういう事だ。なんで織斑とデュノアがボーデヴィツヒと戦っている」

「兄さん・・・これは織斑とかデュノア、ボーデヴィツヒだけじゃなくてセシリアと鈴にも原因が・・・」

「それを聞いているんだ」

景秋が迫つて漸く円香は話した。

「鈴とセシリアが勝敗で少し揉めてたみたいなんだ。そこにあの二人が乱入。そこから2対2の模擬戦に発展。そしたらボーデヴィツヒも参戦してぐちゃぐちゃになった感じだよ」

「止めには入ったのか？」

「私のISの武装じゃ二次被害で余計に怪我人を増やす様なものだよ」

円香の答えを聞いて景秋は劔冑を装甲する。



「なら俺が止めに入る。武州五輪、ボーデヴィツヒのレールガンをごピーしろ。見ているのだろうか？」

《急な指示だな。御堂》

「良いから速くしろ！」

景秋の怒号がアリーナに響く。武州五輪は景秋の言葉を了承した。

《諒解だ、御堂》

「千日の稽古をちから劔とし、万日の稽古をまもり冑とす。以って此れ我が劔冑なり！」

武州五輪を纏った景秋はボーデヴィツヒと織斑の間に飛び込んで小太刀と脇差しの二刀流で二人の攻撃を受け止めた。

「この場にいる全員、ISを解除しろ」

「はあ?!なんでだよ!悪いのは勝手に入ってきたラウラだろ!」

「話は聞いた。貴様らも元々はセシリアと鈴の模擬戦に乱入した側だろう」

「揉めてる感じだったから止めに入って……」

「そうしてまたお前は零落白夜に頼って、人を殺せる程の刃を振るうってのか?」

景秋はそう言って、武州五輪越しに織斑を睨み付ける。

「な、なんだと!千冬姉の技が人を殺す訳ないだろ。それにISに乗ってるんだ、死ぬ訳が無い」

「自分の武器の特性すら解らねえほど馬鹿だとはな。テメエの零落白夜はISのシールドをも斬る。その特性故に人を殺せる刃だって事を肝に命じとけ、馬鹿が」

「それだったらお前だって一緒じゃないか。それにラウラだって鈴とセシリアを痛め付けて……」

景秋は織斑の言い訳に沸々と殺気が沸く。そして一言だけ言い放った。

「織斑、お前……少し黙れ」

「ッ!」

「良いから、ISを解除しろ」

景秋の殺気を感じたシャルルと織斑はISを解除するものの、ボー

デヴィツヒはISを解除しなかった。

「俺の言葉を聞かなかったか？それとも日本語がわからないか？『俺はISを解除しろ』と言ったんだ。俺はお願いしてるんじゃないぞ。命令してるんだ」

景秋の言葉にボーデヴィツヒは驚きを隠せず、声を漏らす。

「ど、ドイツ語ッ！……喋れたのか？」

「ん？なんだ、日本語が解らないのかと思ってドイツ語で話してみたが……話せたのか。なら俺の言った言葉も解る筈だ。なぜ解除しない？」

「敵を目の前に武装解除などするものか」  
「……」

景秋は黙ってボーデヴィツヒを睨む。ボーデヴィツヒはそれに対して煽る様に言葉を掛けた。

「あの二人も、その二人も、相手にならなくてな。準備運動にもなりはしなかった」

「……そうか。その安い挑発、乗ってやる」

景秋は少し間を取って、大太刀を構えた。

「フッ……貴様ごときが私を倒せるかな？」

「知るか。少なくともお前に負ける自信は無い」

景秋の大太刀とボーデヴィツヒのプラズマ手刀が交錯する。景秋はすれ違い様に小太刀での攻撃を与え、再度距離を取った。

「武州五輪、さつきコピーしたレールガン。抜刀に応用出来るか？」

《不可能では無い。が、ぶっつけ本番でやるには危険過ぎる。相当な賭けだぞ》

「それでもだ。勝つためならなんだってやる」

《……諒解だ。失敗しても文句は無しだぞ、御堂》

ボーデヴィツヒと景秋はその後も剣戟を演じる。数十回切り結んだ所で、景秋の振り下ろしがボーデヴィツヒを捉える。だが、景秋の動きが止まった。

「う、動けん……」

「どうだ。私の停止結界は。指一つ動かさないだろう」

ボーデヴィツヒは動けない景秋にワイヤーブレードで攻撃する。

「仕方ない。勝つためには、レールガンでの抜刀を使うぞ」

《応ッ!》

景秋は大太刀を鞘に納める。武州五輪の装甲が黒と赤に変色。鞘に雷が纏う。景秋はその状態でボーデヴィツヒへと迫る。

「抜刀、レールガン!」

景秋のレールガンで強化された抜刀がボーデヴィツヒを襲う。だが、実際は強化される事は無く、不発に終わった。

「クッ……」

景秋は大太刀を構えて、武州五輪の中で顔を歪める。そこに千冬がやって来て、景秋とボーデヴィツヒを止めた。

「そこまでだ。個別対抗戦まで一切の模擬戦を禁止する。これ以上、他の生徒への被害が出ることは看過できんからな」

ボーデヴィツヒはISを解除せずアリーナのピットへと飛んでいき、景秋はその場で武州五輪を解除した。

「何が足りないって言うんだ……」

アリーナに一人残された景秋は悔しそうに拳を握り締めた。

## 第十二話：戦いに正義を飾る者達へ告げる

第十二話：戦いに正義の二字を飾るの者達へ告げる

鈴とセシリアが医務室に運ばれたと耳にした景秋はボーデヴィツヒに呼ばれた時間の前に医務室へと足を運んだ。

「怪我の様子はどうか？二人共」

景秋の言葉にセシリアと鈴はなんとか体を起こして景秋の問いに答えた。

「まだ少し痛いわよ…っ…」

「私もですわ」

「痛むなら無理せず寝ている。傷に障る」

景秋は二人にそう言つて寝かせると、二人の寝ているベッドの間に椅子を椅子を置き、座った。

「二人のIS、ブルーティアーズは損壊レベルC、甲龍は損壊レベルDと言つた所だ。対抗戦は出ない方が良い。尤も、その傷では出れないがな」

「そう…ごめんね、甲龍…」

「…ブルーティアーズ…」

「安心しろ。二人のISは俺の知り合いの整備士が完璧以上に直してみせる。国の方からも許可が降りたらしいからな」

景秋は持つている端末を見ながら二人に告げる。二人は納得したように頷いた。

「勝敗で揉めたのが発端らしいな、二人共。勝敗に拘るのは構わない。だがな。模擬戦の勝敗で揉めるのは阿呆だ」

「……………」

景秋の言葉に二人は黙つた。景秋は溜め息を溢して二人に告げる。

「俺は別に怒っている訳では無い……………二人にも少し話しておこう。戦いに正しさなど求めるな。正義と言う大義名分を掲げるな。正義と言う二字で戦いを飾るな……………戦いの醜さを隠さない為に…次ぐ戦いを生まない為に…」

「ええ、わかつたわ」

「わかりましたわ」

二人はそれぞれ返事をして、頷く。それに安心した景秋は椅子から立つ。

「俺はボーデヴィツヒに呼ばれているからこれで失礼するが、絶対に安静にしているよ」

景秋はそう告げて医務室を後にして、ボーデヴィツヒの元へと向かった。

「それで、俺になんの用件だ？俺は俺で忙しいのだ。手短かに頼む」

「なぜあそこで止めに入った。あのまま続けていれば織斑一夏を殺された」

校舎裏、話の内容を知らない人が見れば恋愛物の告白にでも見えるだろう。だが、話の内容は真逆の内容。景秋はボーデヴィツヒの問いに対して、淡々と答える。

「確かに、あのまま続けていれば織斑を殺せただろう。だが、一歩間違えれば、お前も殺されていた。知らない訳ではなからう。

零落白夜、ISの絶対防御すら突破するエネルギー無効化の絶対攻撃の矛。

相手を殺しかねない、殺すまでいかなくとも今後の生活に支障が出てくる怪我を負わせかねない武器。…ヤツは躊躇いもなく振るうぞ。他人から与えられたISを自分のモノと勘違いし、信じて疑わない。そんな奴を殺せるのか？」

「……何が言いたい」

ボーデヴィツヒは景秋の言葉が気に食わなかったのか腰からコンバットナイフを景秋へと向けた。

「そんな矮小な刃物を向けられた程度で俺が怯むと思ったのか？だとしたらナメられたモノだ。……なぜそこまで織斑に突っかかり、恨みを持つ？織斑景秋失踪に関係でもあるのか？」

……正直、自分の旧姓を口にする事すら嫌になる。だが、仕方あるまい……

景秋の言葉にボーデヴィツヒは舌打ちをしながらナイフを鞘に納

めて、事の顛末を話した。

「ああ、そうだ。奴の兄であった織斑景秋が失踪したのだったって奴がしっかりしていれば、防げた筈だったんだ。奴は兄を見捨てたのだ。教官も大切な弟を失わずにすんだのだ……」

「それは織斑景秋が失踪しなければ良かっただけじゃないか？つまり織斑景秋を恨むのが筋じゃないのか？」

……あの馬鹿姉が大切な弟だと言う訳がない。奴が大切なのは俺じゃなく、一夏の方の筈だ……哀れだな、ラウラ・ボーデヴィツヒ。貴様の様な盲信者の末路は奴に利用され、捨てられる運命しか待っていない……

景秋は心の中で顔を歪める。そしてボーデヴィツヒに対しても少しの哀れみを持った。

「教官は国家代表で忙しかったと言っていた。気付いてやれるのが血の繋がった家族と言うものではないのか？」

「その意見には同意するが、あの家庭にはそう言った感情は無かったと俺は思う。当時のネットの掲示板の記録位、調べれば出てくるさ」

景秋はそう言ってポケットの中からUSBメモリーを取り出して、ボーデヴィツヒに放り投げた。

「これは……？」

「俺なりに当時のログを纏めたものだ。これだけヒントを与えたんだ、言われるままに動く人形じゃないのだから自分で調べて答えを見付け出せ。そしてもう一度考え直す事だ」

景秋はボーデヴィツヒにそう言って聞かせる。景秋の言葉にボーデヴィツヒは頷くも、去ろうとする景秋に質問を投げ掛けた。

「ま、待ってくれ！」

「どうしたボーデヴィツヒ。まだ何か用か？」

「お前はなぜ、そこまでする。お前から見た私は赤の他人だろう？なのになぜ？それに……お前は何を知っている？」

「随分と多い質問だな。まあ、いい。答えよう」

景秋はボーデヴィツヒに投げ掛けられた質問に答える。

「俺がここまでする理由は……見てられねえからだ。お前は織斑千冬

の幻想に取り憑かれてる。そんな奴を放っておいたら利用されて捨てられる運命しか待っていない。だから手助けをする。そして最後に……俺は俺の知ってる事しか知らねえよ」

景秋はそう答えると、踵を返す。一人取り残されたボーデヴィツヒは小さくなつていく景秋の後ろ姿を眺めて呟いた。

「… 幻想に取り憑かれてる… か…」

ボーデヴィツヒとの会話を終えた景秋。夕飯を終え、後は眠るだけ。そんな時、後ろからデユノアに声を掛けられる。

「ねえ、東雲君。少し良いかな？」

「ダメだと言つても引き下がらないのだろうか？」

「まあ、そうだね。良いかな？」

「聞いてやるから早く話せ」

景秋は少し呆れの混じった溜め息を溢すと、デユノアの話聞く為に、近くの休憩用のベンチに腰掛けた。

「実は… 僕、女の子でさ…」

「知っていた。貴様がデユノア社からのスパイだと言う事も」

「ええ！知つてて黙つてたの?!」

「当たり前だ。俺の様な奴が何を言つても周りは信じない。そもそも、言い触らすのが面倒だ」

デユノアの言葉や驚きに微動だにせず景秋は淡々と答える。

「大方、織斑にバレたから俺にも話す。と言つた所だろう。若しくは織斑が役に立たないから俺に助けを求めに来た感じか？」

「…… なんで東雲君はそこまで一夏を邪険にするのかな？」

「俺が織斑を邪険にする理由?… 決まっているだろう。奴が薄っぺらな信念なんぞ掲げ、大切な事から目を反らし、ISとも向き合おうとせず、馬鹿な事をやっているからだ」

景秋はデユノアの問いに対して心底嫌っているかの様な渋い顔をして答えた。

「どういう意味…?」

「奴は自分のやっている事が正義だと言う。正義なんてものを掲げて

何になる。戦いとは本来、凄惨なものだ。

それを誤魔化すかの様に正義なんて都合の良い言い訳を飾る。それがそもそも間違いだ。

奴には正義なんて大層なものを掲げられる程の力も無ければ、責任感も無い。ボーデヴィツヒとの喧嘩とお前の始末に困ったのが最たるモノだ」

景秋はそうデュノアに伝える。デュノアは景秋へと更に言葉を続けた。

「何もしてない東雲君に言う権利は無いと思うけど？」

「あの二人の仲裁をしたのは俺なんだが。それにお前は自分の身分を話した。」

つまり、暗に助けってくれと言ってる様なものだ。それに俺を頼る事しか助かる道は無い」

「理由は……聞かなくてもわかるよ。僕がスパイだからでしょ」

デュノアの言葉に景秋は頷いて言葉を続ける。

「ああ、そうだな。お前が誰かに助けを求めるには自分がスパイだったと告白しなければならぬ。それが国にバレれば、強制送還を命令される……位なら御の字だ。」

最悪の場合、お前は口止めの為に殺される。俺が国のトップなら殺す。自国の機密を持った人間だからだ。自白剤でも打たれてペラペラと機密を喋られても困る」

「なら僕はどうすれば良いのさ！どこにも居場所が無い僕はどうしたら……」

「知らん。俺は聖人君子ではない。助ける人間と見捨てる人間との線引きはする。」

今のお前を助けたところで俺にとってなんの旨味も無い。そここそ織斑にでも助けを求めろんだな」

景秋は狂気的な笑みを浮かべてデュノアに告げる。デュノアは涙目になりながらも、言葉を漏らす。

「君は鬼だよ……人間の考える事じゃない！」

「何を今更……俺は鬼だ。正義やら何やらは耳に挟むだけで吐き



「気がする」

「ッ……！」

景秋の狂気的な笑みにデュノアは涙目で睨み返す。その目が気に入った景秋は一つの条件を提示した。

「フツ…… フフフフ…… アハハハ!! 良い。気に入ったぞ、貴様のその目! その目に免じて手を貸してやらんでもない」

「…… 信じられるもんか!」

「俺は一度口にした事は貫く主義だ」

「…… 本当に?」

「ああ。だが、一つだけ条件を提示させて貰う」

景秋は人差し指を上に向け、デュノアの目の前に持っていく。

「じよ、条件……?」

「親が憎いか? 自分を捨てた親が。妾の子と言うだけで迫害した親を恨むか?」

「……」

デュノアは黙って頷く。デュノアのその姿を見た景秋はまたもや笑みを浮かべる。

「なら俺が提示する条件は一つ。親を殺すのは俺じゃない。お前だ。自分の親に引き金を引く覚悟があるのなら手を貸してやる。猶予は個人対抗戦当日までだ。それまでに覚悟を決めておけ」

景秋は右手で顔を覆いながらクツクツと嗤う。

「鬼……」

「助けを求めた相手を間違えた自分を恨む事だ。シャルロット・デュノア」

「シャルって呼んで良いよ」

「どうしてだ? 何故、俺に愛称で呼ばせる?」

「共犯者でしょ? 僕達」

デュノアの答えに景秋は更に笑みを深めた。

「良いだろう。シャルと呼んでやる。…… 契約成立だ」

「うん……」

景秋とシャルは握手をした。

「一つ聞いて良いかな。どうやってデユノア社まで？」

「当日まで黙っておくつもりだったが……仕方がない。俺の姉が勤めている企業がデユノア社を買収したらしい。デユノア社に俺が赴いて視察して来いと頼まれてな。」

その日が丁度、個人対抗戦の日。試合の途中で抜けても誰も気にしない。シャルは俺の秘書としてついて来てくれれば良い。

その時の服も今後の生活もこちらで支援させて貰う。どうだ？悪くない条件だろう」

景秋のその言葉にシャルは苦笑いを溢した。

「企業代表とは聞いてたけど……か、景秋って役職とかあるの？」

「ああ。社長補佐やってる。まあ、ほぼ雑用任されるだけだ」

「改めて君の凄さがわかったよ……」

「さて、俺は用事が残ってるから先に行くぞ」

景秋はそう言って自室へと戻って行った。

「さて、どうなることやら……」

## 第十三話：鬼は涙を流さない

第十三話：鬼は涙を流さない

翌日の朝、景秋は朝練をする為に5時に目を覚ました。赤色のジャージに着替えて外へと向かう。

「武州五輪。レールガンを応用した抜刀、どうやったら成功する」

「御堂よ。刀を弾丸と考え、鞘を砲身と考えてやってみてはどうだろうか」

「……………それでやってみるか。千日の稽古を劔ちからとし、万日の稽古を胃まもりとす。以って此れ我が劔胄なり」

景秋は劔胄を纏って居合いの構えを取る。前回と同様に鞘に雷が纏う。極限まで体の中で溜めを作り、一気に放つ。

「レールガンッ！」

前回とは違い、刀身が鞘と同じ様に雷を帯びていた。

「違う……………疾さが足りない……………もう一度だ」

それから1時間程、同じ事を繰り返したものの成功する事は無かった。

「御堂、やはり無茶だったのではないか？レールガンとは本来、銃器。抜刀に応用は難しいのではないか？」

「難しいって事はつまり、不可能じゃない。何か足りないだけだ。何か……………」

「四苦八苦しているな」

景秋は声の主の方を見る。そこには先日、話をしたラウラ・ボーデヴィッツヒが立っていた。

「お前には関係あるまい」

「レールガンは電磁誘導で加速させて発射する。それが弾丸だろうと刀だろうと変わりはない。銃器だからとか刀だから出来ないとかややくいしい事は抜きに考えてみる。出来ると思わなければ、出来るものも出来んぞ」

「……………武州五輪、次でラストにする。次で必ず成功させるぞ」

《諒解》

景秋は再度抜刀の構えを取る。鞘だけでなく、鞘を支える腕にまで雷が纏う。目に見えて先程とは違うのが明らかだった。

「… レールガンツ!!」

先程よりも加速した抜刀。景秋はそのまま刀を鞘に納めると一息着いた。

「ほう…。どうして急に出来るようになった?」

「お前の言葉がヒントになった。それだけだ」

景秋はそう言つて武州五輪の装甲を解き、ジャージ姿に戻る。

「それで、俺に何か用か?連日、用事ばかりだが…」

「昨日、お前に渡された記録を見て考えた。あの罵詈雑言は事実なのか?」

「ああ。俺も詳しくは知らんが、事実らしい。お前が盲信して止まない織斑千冬は…。織斑景秋を見捨てて、家族である事を放棄したんだ」

ボーデヴィツヒの問いに、景秋は答える。問いに答えている時の景秋の顔は少し怒りを孕んでいた。

「それで、俺に何かあるのか?まさかそれを聞きに来ただけか?」

「いや、対抗戦のパートナーを申し込もうかと思つてな。貴様程、剣術に長けた者なら織斑の剣も見えるのだろうか?」

「アイツのは剣術でもなんでもない。殺傷能力が高いだけの刀の形をした棒を振っているだけだ。技も何もあつたもんじゃない。動きも直線的だしな。戦闘の心得が少しでもあれば簡単に捌けるさ」

景秋はそう言つて、踵を返す。そこにボーデヴィツヒは景秋へと問う。

「どこに行く」

「走りに行くんだ。日課だからな」

「私もついて行って良いか?貴様の身体能力も知っておきたい」

「…… まさか、もう俺と組む気にいるのか?」

「駄目なのか?」

ボーデヴィツヒが首を傾げて景秋に聞き返す。景秋は断るに断れ

ず、捨て台詞の様に言葉を吐いて走り出した。

「…… 勝手にしろ」

「なら決まりだな。お、おい！勝手に行くな！」

…… はあ…… 俺も甘いな……

景秋はボーデヴィツヒに追われる形で走っている最中、そんな事を考えていた……

走り終えた景秋とボーデヴィツヒ。景秋は普段通りの事をしていただけなので普通にしていたが、ボーデヴィツヒが膝に手を着き、肩で息をしている。

「いつも…… あんなハイペースであの距離を走っているのか……？」「ああ。体力は多いに越した事はないからな。ボーデヴィツヒは…… 流石軍人といったところだな」

「貴様に言われても嬉しくはないがな…… それよりも、ラウラで良い。パートナーなのだからな。私も景秋と呼ぶ」

「ああ、わかった。ラウラ」

景秋は朝練を終えて円香と共に食堂に向かう途中、ラウラと再会した。

「景秋。さつきぶりだな」

「ああそうだな、ラウラ」

景秋は円香とラウラを連れて食堂に到着すると、朝食を乗せたトレーを持って席を探す。

「ん？鈴とセシリアじゃないか。もう体は大丈夫なのか？」

「あ、景秋じゃない。ええ、私もセシリアももう……… なんて、アンタが景秋と一緒にいる訳？」

「まあまあ鈴さん。朝食を摂りながらもお話は何えますわ。ねえ、ラウラ・ボーデヴィツヒさん？」

鈴はラウラに迫るもののセシリアが制止し、朝食を摂る事になったが、ギスギスした雰囲気朝食となった。

「それで？なんでアンタが景秋と一緒にいる訳？ドイツの国家代表候

補生さん？」

「トゲのある言い方だな。恨まれても仕方無い事をしたが……あの件についてはすまなかつた。織斑にイラついていて、八つ当たりする様に攻撃してしまった。すまない……」

ラウラはそう言つて頭を下げる。鈴は少しバツが悪そうに言葉を返す。

「別に謝つて欲しい訳じゃないわよ。あれは私達にも非があるし…… それよりも、なんで一緒にいる訳？」

「それは俺が答えよう。俺はラウラとペアで対抗戦に出ることにした」

鈴の問いに景秋が答える。景秋の答えに鈴とセシリアは声を上げた。

「な、なんで!?! どうしてよ!」

「そ、そうですわ。なぜ! 箒さんや円香さんがいるでしょう?!」

「誘われたからな。それにその二人はペアで出るそうだ」

景秋の一言で二人は黙ってしまった。

「それにお前らだつて出れる状況じゃ無いんだ。ならラウラと出たつて問題では無いだろう?」

「そうだけど……」

「そうですけど……」

「話は終わりか?」

景秋はそう言つて席を立つ。そこで鈴が再度、ラウラに問うた。

「ドイツの軍人なら少なくとも聞いた事はある筈よ、織斑景秋の事を」  
「ああ。だが、詳しい事は私も知らされていない…… 事実が知りたいのなら私に聞くのは間違いだと言っておく。そして我が祖国が不甲斐ないも事実だ。申し訳無い」

ラウラの言葉を聞いた鈴は黙つて席を立つてトレーを持っていった。

「私は間違えた事をしただろうか?」

「…… 鈴には酷な事をした……。あそこで止めておくべきだったな」

景秋もトレーを持って鈴の後を追った。鈴に追い付いた景秋は鈴に声を掛ける。

「大丈夫か、鈴。すまん、途中で止めておくべきだった…」

「なんでアンタが謝るのよ」

「それは……………」

鈴の言葉に景秋は言葉に詰まり、黙り込む。それを見かねた鈴が景秋に言葉を掛ける。

「まあ、良いわ。やるからには必ず勝ちなさいよ、景秋！」

「ああ、勿論だ。必ず勝つ」

景秋はそう答えて、差し出された拳に拳を重ねた。

放課後、ラウラと景秋は借りることが出来たアリーナでお互いの機体について話し合っていた。

「景秋のISはわざわざ口上を唱えなければ展開出来ないのか？」

「それが展開の条件だからな。面倒でもしなければならぬ」

景秋は言い終わると、武州五輪を纏う為に手を顔に当てて口上を唱えた。

「千日の稽古を劔ちからとし、万日の稽古を胄まもりとす。以って此れ我が劔胄なり」

「やはり、そのISは遠距離武装が無いのか？」

「いや、ラウラのレールガンとセシリアのブルーティアーズ、鈴の衝撃砲もコピーしてある万能型だと思うんだが……」

ラウラの言葉に、景秋はそう答えた。景秋の答えに対して、ラウラは更に言葉を続ける。

「……………確かにそれだけ聞けば万能型だと思うが、扱いきれるのか？」

「勿論、扱いきってみせるさ。俺だって剣術一辺倒の馬鹿じゃない。剣術には頼るが、勝つためならなんだって使う」

「武士道とやらはどうしたんだ？」

ラウラの問いに景秋は首を傾げて答える。

「そんなモノ、畜生にでも食わせたさ。戦場いくさばで何の役に立つ？ 道德精

神なんてもの、戦いに必要ない。だが、これは戦争じゃ無いから加減はいるが」

「加減がいるのか?」

「必要だ。相手が戦闘不能なのにあたぶるなんて事、俺はしない。人としての質が下がる。情けをかける……. と言う意味ではないぞ」

景秋はそう言っ言葉を続けた。

「まあ、良い。タッグ戦はお前が前衛、私が後衛で良いか?」

「それでも良いが、一人ずつに分断した方が楽だと思うが?俺もお前もタッグ戦が得意な方では無いだろう?」

「それもそうだな…….」

「なら無理にタッグとして戦わずとも、向こうもこっちを分断させようと動く筈だからな。それに大人しく従えば良い」

景秋の答えに、ラウラは頷く。だが、疑問を持ったのか景秋へと問う。

「必要最低限のコンビネーションは必要だと思うんだが……」

「面倒だが、その都度プライベートチャンネルで報告するしかないな。そうすれば少なくとも、味方への誤射は回避出来る」

「それもそうだな……. ならお互いの戦闘スタイルを確認する位はするべきだと思うが?」

「そうだな。それ位の事はしておくか」

そうして景秋とラウラは個人対抗戦へと向けて動き出した。

時は少し進み、夕食後。景秋はシャルと話していた。

「どうしたんだ?」

「……. やっぱり君を頼るしか無かったんだなあって思ってさ。癪だけど」

「逆にそれ以外に期待していたのか?織斑みたいな無能に一人の人生を背負うなんて事、出来ない所か誰かにぶん投げるのがオチだ」

景秋は片手に持った缶コーヒーを傾ける。そして言葉を続けた。

「織斑から俺の考えより良いモノが出たか?……. 出る訳が無いか。出たとしても猿知恵だな、浅すぎて話にもならないだろう。」



もしも、良い考えが出たとしたら、裏で誰か一枚噛んでいると考えて良いかもしれないな。シャルの親の会社にはそれほどの旨味がある」

「前は旨味なんか無いって言ってたじゃないか」

「ああ。シャル自身にはな。だが、デュノア社は違う。量産機ISのシェアが世界第三位の大企業……。普通のヤツはシャルを助けたとしてもその企業力が欲しいだけなんだろうな……」

景秋の言葉に落ち込んだ様子でシャルは景秋に問い掛ける。

「景秋、君もデュノア社の企業力目当てなの？」

「愚問だな。デュノア社は既に俺の企業に買収された。それなのに企業力目当てでも何も無いだろう」

「じゃあなんでさ」

「以前言っただろう。貴様が俺を憎み、恨み、睨み付けた時の貴様の目。アレは俺の同類の目だ。俺も親に、家族に棄てられてる。その時、世界に向けていた目があんなだったんだよ。」

お前は俺と同類だ。親に棄てられ、親への復讐を条件に助けて貰う道を選んだ」

「それは……」

景秋の言葉にシャルは言葉に詰まる。否定したくても事実なのだ。

「俺を鬼だと言ったな、人では無いと……。ああ、そうだとも。俺は鬼だ！人を殺し、その後流す涙などありはしない。それは醜悪な偽善に他ならない！俺にはもう、流す涙などありはしない。流す涙など、とつくの昔に枯れ果てたさ。貴様もそうなる。シャルロット・デュノア。お前は親を殺してどう変わる？俺と同じく鬼に堕ちるか？いや……どの道、親殺しをしたヤツが人間に戻れる訳もあるまい……。貴様は俺と同じ鬼とやらになるしかないんだよ！クツクツクツクツクツ……。フフフハハハハハ!!」

景秋は飲み干した缶コーヒの空き缶を握り潰して嘲る様に、狂気的な笑みを浮かべて高笑う。

「……。やっぱり景秋はそう言う事、ハッキリ言うんだね」

「誤魔化して何になる。事実を歪め、誤魔化しの幻想を夢に見て何に

なる。事実を知った時に、貴様の心は耐えられず、粉々に砕け散る」

「……………」

「…………… シャル。辛い時は辛いと言え。悲しい時は悲しいと言え。苦しい時は苦しいと言え。まだ人であるならば、弱音を吐く位は許される。鬼に堕ちてからでは、弱音を吐く事は出来ないからな…………… 胸や背中位なら貸してやれる」

景秋は先程とは打って変わって、優しい声音でシャルに声を掛け、頭を撫でた。

「じゃあ、少しだけ貸してもらおうかな……………」

シャルはそう言って景秋の胸に頭を置くと、子供の様に声を上げ、さすがの様に泣きじやくった。

「…………… グスツ…………… ごめんね…………… Tシャツ汚しちやって……………」

「いや、良いさ。楽になったか？」

「うん…………… 景秋って意外と優しい？」

「鬼だ何だと罵ったヤツの言葉とは思えないな」

「それは…………… ぼ、僕だつて考え位変わるよ」

シャルの言葉を聞いた景秋は微笑むとシャルの頭をポンポンと叩いて部屋に戻ろうとした。

「じゃあな、シャル」

「うん。おやすみ、景秋」

こうして一歩ずつ、シャルロット・デュノアは景秋と同じ鬼に堕ちていく。

## 第十四話：男装貴公子の涙

### 第十四話：男装貴公子の涙

時の流れは早いもので、学年別個人対抗戦当日である。景秋には一抹の不安があった。「ラウラとの連携が取れるのかどうか、レールガンが実践で使えるのか」そんな不安を抱えていた。

……ラウラと上手く戦えるだろうか。生身での訓練なら空いた時間にやってはいたが、ISとなると話は別だ。

幾ら何でも、たった5回の訓練で、パートナーと呼べる程にアイツを信用しているかと言われれば首を横に振るかもしれない。

それに、レールガンが実践で役に立つかも分からん。こればかりは使ってみなければ分からないか……。箒と円香が組むとは思っていなかったからな……。少し厳しいものがある……。

景秋はそんな事を心で思いながらトーナメントの発表を待っていた。

「当日発表の意味がわからん……。既にトーナメントは完成していただろうに……。」

「学園側のサプライズ精神とやらだろう。約束は忘れていないだろうな?。」

「ああ、織斑はくれてやる。だが、当たらなければ意味がないがな」

景秋がそう言い終えると同時にトーナメントが発表され、自分達の場所を確認する。

「……一年の一番最後だな。相手は……。織斑・デユノアペアか……。景秋、その心配は無さそうだぞ」

「その様だな。一体、どんな確率だよ……。それで勝ち上がれば箒達とか……。大変だな」

景秋はそう言つて肩を竦める。対してラウラは織斑と戦える事に心を踊らせていた。

「周りが試合で動き出したな。俺らも動くぞ」

「あ、ああ。遅刻するなよ景秋」

「勿論だ」

景秋はそう言つて箒や円香の元へ向かう。

「大鳥さん。来ていましたか」

「そりや、息子、娘同然のお前らが試合やるつて話だからな。見に来ない訳ねえだろ。それに、今日来てる各国大統領に挨拶をな。俺は挨拶に行くから、お前らは兎浪の所にでも行つてろ」

昇はそう言つて足早に何処かへ去つた。

「ハロハロく久し振りだねく3人とも」

「ね、姉さん!？」

「そうそう君達のお姉ちゃんの東雲兎浪しのめとなみだよ。久し振り、かー君に円香ちゃん」

そう。そこに現れたのは紛れもない、間違えようの無い人物。篠ノ之東——東雲兎浪である。

黒のタイトスーツに身を包み、シルバーフレームの眼鏡を掛けた優しそうな女性。それが彼らの姉が変装した姿であった。

「君は……かー君から話は聞いてるよ、篠ノ之箒ちゃん。大変だったんだつてね？」

「い、いや……別にそんな事は……」

東はそう言つて箒に近付くと、耳元で言葉を発する。

「箒ちゃん。この後、私の所に来て。まだ試作だけど、箒ちゃんの専用機を渡しておくから」

「わかった……」

「良しー箒ちゃん、かー君、円香ちゃん。私はクーちゃんの所に戻るから、またねく」

東はそのまま去つていった。その場に取り残された景秋は一言言葉漏らす。

「嵐みたいな人だな、相変わらず」

「確かに」

「姉さんはいつもああだからな」

景秋の漏らした言葉に二人は頷いて答えた。

シャルと景秋は他の生徒にバレない様に着替えると、皆が集まつて

いるアリーナと逆の方へ向かった。

「そうだな…：シャル、鳳おおとりノアと名乗ってくれ」

「わかったよ、景秋」

「ああ、それと。俺の事は社長補佐って呼んでくれ。怪しまれるかもしれないからな」

景秋は言い終わると指輪を投げた。

「指輪？」

「IS、名前をダークホーク。ラファールを使ったら向こうにバレる可能性がある」

シャルと景秋は同時にダークホークを展開すると、デュノア社へと飛び立った。

「速いね、ダークホークってIS」

「完全な移動用だからな。武装も最低限だし」

景秋とシャルはそう言いながらデュノア社内に入っていく。

「エヴァンスエレクトロニクス、社長補佐の東雲景秋です。社内視察に参りました」

「東雲景秋様ですね。御待ちしておりました。こちらへ」

景秋とシャルは受付嬢に案内され、社長室へと向かう途中のエレベーター内での会話。

「そちらの女性は…：入室をご遠慮頂きたいのですが…：」

「私の秘書の鳳です。彼女しか私のスケジュールを知らないのですよ」

景秋が冗談混じりでそう言った途端、受付嬢が景秋に銃を突き付ける。

「はて、なんの冗談でしょうか？」

「奥様の御命令です。シャルロット・デュノアに似た人物がやって来た場合、速やかに排除せよ。」

「そうですか。ですが…：…：死ぬのは貴女だ」

エレベーターが目的階に到着し、動きを止めて扉が開いた。景秋とシャルが降り、ドアが閉まる瞬間に受付嬢の首が音を立てて落ちた。

「鈍い女だ。斬り殺された事すら気付かないとは……」

景秋の右手にはダークホークの武装であるビームカタナが握られていた。

柄頭にはカラビナに括り着ける為の四角の穴が空いた独特の形状をした柄をジャケットの内側に仕舞い込む。

景秋は社長室のドアを蹴飛ばして中に入る。中にはシャルの父親とその妻がいた。

「どうも。エヴァンスエレクトロニクス社、社長補佐の東雲景秋と」

「その秘書のシャルロット・デユノアです」

景秋は一瞬目を見開いたがすぐに元に戻り、ニヤリと笑った。

「お宅の会社は我がエヴァンスエレクトロニクスの物だ。即刻明け渡せ、アラン・デユノア」

「断ると言ったら？」

アランは平静を保った声で聞き返す。だが、景秋はさも当たり前のように聞き返された問いに答えた。

「ハア…… 何を決まり切った事を。殺すに決まっているだろう」

「なら、これで君達はお陀仏だ」

アランが指を鳴らして自慢気な顔をして椅子にふんぞり返る。だが何も起こらず、声を荒げた。

「ど、どうして!」

「警備隊がやって来ないんだ…… か?」

「ッ!」

アランの表情が変わったのを景秋は見逃さず、狂気的な笑みを浮かべて言葉が続けた。

「なんでお前ら重宝してる警備隊が来ないのか。理由は簡単だよ。ここに来る前に全員殺したからだ」

時を遡ってほんの数十分前の事。景秋とシャルは社内に入る前に警備隊を全滅させてから社内に入ったのだ。

「ぐっ……」

「俺は何もしませんよ。デユノア社の権利書さえ手に入ればそれで良い。けど、シャルは違う。そうだろ?シャル」

「うん…………… 父さん、なんで母さんを見捨てたの？」

景秋の言葉に頷いてシャルは一步前が出る。それと同時に変装用のカツラを取った。

「……………」

「何か答えてよ！」

シャルは心からの言葉を投げ掛ける。だが、返って来た言葉に裏切られた。

「お前を娘だと思った事は一度も無いし愛した事も無ければ、お前の母親も愛していなかった。ただの一夜の関係だったと言っておく」

「そんな……………」

そこで今の今まで黙っていたアダムの妻が高笑いをしてシャルに言葉を投げ付ける。

「これで解つたでしょう？泥棒猫の娘風情が愛されてるとでも思ったのかしら？だとしたら勘違いも甚だしいわ」

「……………」

シャルの苦しそうな顔を見た景秋はアランの妻へとビームカタナを投擲した。

「あ、危ないじゃない！」

「少し黙れ、クズ女」

「な、なんですって！」

ヒステリックに叫ぶアランの妻へと近付き、景秋は思いきり、妻の頬を拳で殴った。

「テメエみたいな人間のクズにシャルの何が解る。何を知っている！！」

「な、何を……………」

「例えば自分が汚れ役になったとしても、それで父が振り向いてくれるのならと、出来もしない腹芸とぎこちない男のフリをしてスパイをしていたコイツの何をお前は知ってるって言うんだ！」

何も知らない癖に、何も解っていない癖にコイツを……………シャルロツト・デュノアの事を知った様な口で語るんじゃないやねえ！」

景秋は正しく鬼の形相で叫ぶ。それを止めたのはシャル本人だっ

た。

「止めて、景秋。助ける条件は僕がケジメを付ける事でしょ」

「…… ああ、そうだな。後はお前に任せる」

景秋はそう言って数歩下がって腕を組む。

「僕は僕の選んだ道で進んで行く。その一步がアナタ達を僕が殺して復讐する事だから……」

シャルはそのまま拳銃をアランに向ける。その手は震えていた。

「そんな震えた手で引き金が引けるものか！」

アランはシャルが躊躇っている最中に自身の引き出しから拳銃を取り出してシャルに向けた。

「私はお前を殺すのに躊躇いなど無い。後悔して死ぬと良い。お前は本当に使えない手駒だった」

「シャルロット、目を開け！覚悟したんだろ！引き金を引くと決めたらんだろ！なら引け！」

事を見届けていた景秋も声を出す。それでもシャルは僅かに躊躇った。

「…… ツ！」

シャルはアランが自分に銃を向けているのを少しだけ開いた目が捉えてしまった。その瞬間、シャルの中で何かがプツンと切れた。

「僕は、アナタを……」

シャルはそう言って引き金を引く。発射された弾丸は何にも阻まれる事無くアランの胸に着弾した。

「…… 良い気味だよ、全く……」

「…… こっちの女は俺が始末する。お前の母親じゃ無いみたいだな」

景秋は俯くシャルの肩に手を置いてそう告げる。そして一歩ずつ近付いていく。

「ま、待ちなさい！アナタが欲しいのは会社でしょ！なら命まで奪わなくたって良いじゃない！」

「勘違いするな。この会社は既に我がエヴァンスエレクトロニクスの物だと言っている。後の仕事はこのデユノア社にあるゴミを掃除す



るだけだ」

景秋は床に刺さったビームカタナを抜いてアランの妻へとカタナを振るった。たった一振りですんだ死体を景秋は冷えきった目で見下ろしていた。

「シャル、大丈夫……では無さそうだな……」

「……ウツ……グズツ……本当……良い気味だよ……ウツ……自業自得なのにさ……胸が……痛いんだ……」

「シャル……」

シャルは俯きながら涙を溢す。景秋は慰めの言葉が見付からず、ただ眺める事しか出来なかった。

「わかってたんだ……全部。僕はただの駒だって。でも、もしかしたら違うかも知れない。なんて頭のどこかで考えてたんだ」

「そうか……」

「でも違ったんだね……本当にただの捨て駒としか思われてなかった……」

シャルの声は消え入りそうに儂かった。

「シャル……別にお前の事を同情する訳じゃない。同情程、哀しい事はないからな。けどな、シャルにはシャルにしか出来ない事がある筈だ。こうやって苦しんで、悲しんで、その先にはシャルにしか出来ない事が見つかる筈だ」

「なにさ、さつきから！慰めてるつもりなの!?!だとしたらやめてくれないかな。景秋が殺させたんじゃないか！」

シャルは景秋の胸ぐらを掴んで叫ぶ。景秋は掴まれたまま言葉を返す。

「ああ、そうだ。俺が殺させた。だから俺が殺したのと同じだ。お前は自分が親を殺した苦痛に苛まれる。その苦痛に苛まれるのが辛い、親殺しの罪が重いと言うのなら、俺にも責任があるからな……半分背負わせろ」

「……やっぱり景秋は鬼の癖に優しすぎるよ……」

シャルはそのまま景秋に抱き付いた。

「俺だって始めから鬼だった訳じゃ無い。人として優しい時だって

あつたさ」

景秋はそう答えてシャルを自分から引き剥がして、アランの机を探し始める。

「どうしたの？」

「時間が迫って来ている。速く帰らないと怪しまれる」

景秋は目当ての権利書が入った封筒を胸ポケットに仕舞うと、ダークホークを展開して、二人はIS学園へと戻った。

IS学園に到着した二人は速攻で着替えて、それぞれのパートナーの元へ向かった。

「探したぞ、景秋。私達の出番だ！」

「ああ。行くぞ、ラウラ！」

「勿論だ」

景秋とラウラは拳を合わせてISと劔胄を展開、装甲した。

「来い、シュバルツエア・レーゲン！」

「千日の稽古を劔とし、万日の稽古を胄とす。以って此れ我が劔胄なり！」

二人はアリーナへと飛んで行く。アリーナへと降り立った四人はそれぞれ武器を構える。

「いざ………参るッ！」

試合開始のブザーが鳴り響いた――

## 第十五話：黒銀の兎、訣別の時

### 第十五話：黒銀の兎、訣別の時

学年別個人対抗戦。試合開始のブザーがアリーナに鳴り響き、試合が始まった瞬間。織斑は景秋へと迫り、雪片を振り下ろす。

「お前の相手は俺だ！」

「どこから来るか解らない自信に満ち溢れている所に悪いが、お前の相手は俺じゃない。ラウラが相手をする。残念だったな」

景秋は振り下ろされた雪片を受け流して、そのままラウラと場所を変わる為にスラストターを吹かした。

「よお、シャル。さつき振りだな」

「そうだね、景秋……ッ！」

景秋の大太刀の横薙ぎをシールドで捌くと距離を少し取って両手にレイン・オブ・サタデイを持ち、景秋に向けて発射する。

「幾ら反射神経、動体視力に優れた景秋でもこの散弾の嵐からは逃げられないよね！」

立て続けにシャルは高速切替ラビッド・スイッチを駆使して、ガラム、デザート・フォックスでも弾丸の嵐を降らせる。

「まだまだ!!」

シャルは止まること無く、攻撃を続ける。土埃が上がり、シャルは攻撃を止めた。

「景秋でもこれで、戦闘不能でしょ……！」

「シャル。相手がどんな武装を持っているかも知らない状況で無闇矢鱈に攻撃するもんじゃ無い」

球体状の水が、景秋を護る様に覆っていた。球体状の水を解除した景秋は

「アクア・ナノマシン。射撃武器は無力化出来る」

「そんなのって……」

「シャル、俺の劔胄の能力を言ってなかったな。今見せてやる」

そう言った景秋の劔胄、武州五輪の装甲が変化する。

「ブルーティアーズ+龍咆……舞え、ティアーズ。そしてシャル、

テイアーズ達が奏でる円舞曲ワルツで踊れ」

武州五輪の装甲の色が青と紫に変わり、大型化した肩には鈴の専用機である甲龍の衝撃砲。そして景秋の周りをセシリアの専用機、ブルーテイアーズのBT兵器が舞う。

「その二つを同時に扱うのって難しいんじゃないの？攻撃が安定してないよ！」

シャルはそう言ってブラッド・スライサーを右手に握り、景秋に近接戦を挑む。

「俺に近接戦で勝てるん？」

「思っていないけどさ、その二つの武装の制御で手一杯みたいだしね。BT兵器だけなら戦闘と平行して扱えるみたいだけど、衝撃砲の制御が追い付いてないからね！」

ブラッド・スライサーの振り下ろしを景秋は大太刀で受ける。

「ほら、砲撃が止まったよ！」

「貴様こそ、足を止めたな。感謝するよ、俺の罠にまんまと引っ掛かってくれてよお！」

景秋はそう言って衝撃砲をシャルに食らわせる。シャルは吹き飛ばされるが、途中で動きが止まった。

「沈セックヴァベックむ床。超広範囲指定型空間拘束結界ってアビリティでな。貴様を誘導させてもらったよ」

「クツ……」

身体が動かないシャルは顔を歪めた。

「このまま倒しても良いんだが、少し不憫だからな。解除してやる」

景秋はそう言って結界を解除した。解除したと同時にシャルはブラッド・スライサーで再度斬り掛かった。

同時並行で行われている織斑とラウラの戦い。その戦いは常にラウラ優勢で進み、織斑は満身創痍だった。

「ハア…… ハア…… ま、まだ終わってねえ！」

「もう諦めろ。確かに、景秋の言った通りだった」

ラウラはプライベートチャンネルに変え、織斑に告げる。織斑はラ

ウラの言葉に顔を歪めて、齒軋りする。

「なんだと…ッ！」

「貴様は全く強くない。自身の専用機の性能に振り回され、闇雲に武器を振るうだけ。貴様が何故教官の弟なのか理解出来ん……………私は貴様の様な奴を恨み、倒そう等と考えていたんだな……………そんな自分が恥ずかしい」

その言葉を聞いた途端に織斑はラウラへと雪片を振るう。だが、ラウラはあくまで冷静にプラズマ手刀で受け止める。

「言った筈だ。諦めろとな！」

ラウラはワイヤーブレードで織斑を攻撃し、吹き飛ばされた織斑へとレールカノンを放った。

「グウアアア！」

「まだだ！」

ラウラは追い討ちを掛ける様に、更にプラズマ手刀で斬り付ける。そして織斑は地に伏した。

「……………まだ落ちないか」

「ま、まだ……………まだ終わってない……………零落白夜！」

「その能力は景秋から対策を教わっている！」

ラウラは迫る織斑にワイヤーブレードとレールカノンを放つ。織斑はそれを避けながら迫るものの、ラウラは距離を一定に保ち、同じ攻撃を繰り返す。

「クソツ……………近づけない……………」

「確かにエネルギー無効化能力は恐ろしい。絶対防御すら越える攻撃力は称賛物だ。だが、接近させなければ良いだけの話だ」

ラウラは呆れた様に動きを止めると景秋の方へ向かうと景秋へ告げる。

「相手が変われ、景秋」

「織斑への復讐は良いのか？」

「あんな奴には、復讐する価値すら無い」

「わかったよ……………俺が織斑の相手をすりゃいいんだな」

景秋はそう言いながら大太刀を構えて、迫って来た織斑を迎え討

つ。

「退けエ、東雲エ！」

「今度はお望み通り、俺が相手をしてやる。来い、織斑ア！」

零落白夜を纏った雪片を振り下ろす織斑に対して、同じく零落白夜を纏った大太刀を振り上げる。

「織斑、お前……あの時から一步の成長してねえな」

「ウルセエ！」

「止めの一撃に使うだけで十分の零落白夜をこんな中盤で使うとか馬鹿かお前」

景秋は織斑との鏝迫り合いの後、零落白夜を解除して織斑と剣戟を繰り広げる。

「退けよ！俺はラウラを倒す！」

「違うだろ。お前の倒すは殺すと同意義だ。簡単に人の命を奪える刃なんだ！少しは成長しろ！」

景秋の叫びすら聞かずに織斑は雪片を振り回す。

「チツ……ならお前を倒して黙らせる」

景秋は再度、零落白夜を発動すると織斑に接近する。

「ハアアアア！」

「ウオオオオオオ！」

景秋と織斑の振り下ろしが交錯し、火花を散らす。何度も刀同士がぶつかり合う。距離を取った景秋は大太刀を鞘に仕舞う。

「武州五輪……磁波鍍装——菟窮……ツ！」

《諒解——菟窮開闢。終焉執行。虚無発現——》

以前より更に威力や速度が増したと思う程の電磁拔刀。景秋の腕や刀、鞘だけで無く、全身に雷を纏う。

「吉野御流合戦礼法……」迅雷が崩し——」

その瞬間、一気に自身の間合いまで織斑に接近して大太刀を振り抜いた。

「電磁拔刀——」禍ツ！」

振り抜かれた大太刀は寸分変わらず織斑を捉え、白式のSEをゼロにした。

『びゃ、白式、シールドエネルギーエンプティイ!!最初の脱落者は織斑一夏だ!』

アリーナに実況のアナウンスが響く。その後、会場も景秋の技をパフォーマンスと勘違いした生徒が盛り上がった。

「ラウラとシャルは…… 武装の多さでシャルが若干だが有利に事が進んでいるな……」

景秋はそう呟いて二人の戦いを眺めていた。

「流石、景秋。消耗してたけど、一夏を簡単に倒すとはね……」

「余所見してられる程、余裕があるのか!」

ラウラはシャルへとワイヤーブレードで攻撃する。シャルはそれを避けて、ガラムとレイン・オブ・サタデイの2丁拳銃で反撃する。

「チツ…… ちょこまかと!」

「なら、お望みの接近戦で倒してあげるよ!」

シャルが右手に持ったブラッド・スライサーとラウラのプラズマ手刀が交錯する。

「この程度で!」

「終わりだと思わないでよね!」

ラウラの言葉に続く様にシャルは言葉を発する。ラウラは顔を歪めるものの、シャルの顔は景秋の様な狂気を纏った笑顔をしていた。

「今の貴様の顔、鏡で見せたいものだ」

ラウラはプライベートチャンネルに変えて、シャルへと呟く。シャルはラウラの言葉を聞き返す。

「どういう意味かな?」

「景秋がいつぞや見せた笑みと瓜二つだ」

「そうかもね。僕だって、景秋と同類だ。自分の命可愛さに親を殺した。そりゃ、自分の命が何よりも大切なんだから間違いではないと思う。」

けど、正直に言えばまだ受け入れられてない様な気もする。それでも、景秋は言ってくれた。辛いなら、苦しいなら半分背負わせろって。その言葉だけでも随分と楽になったよ」

ラウラの言葉にシャルは答えた。シャルは鏢迫り合いを切つて体当たりをすると、アリーナの壁へとラウラを押し付けた。

「これで、反撃は出来ないよね」

シャルはそう言つてシールドをパーズする。そこから姿を現したのは69口径のパイルバンカー——グレー・スケール灰色の鱗殻。シャルはグレー・スケールを連続してラウラに浴びせる。

「グツ……カハツ……」

アリーナにラウラの呻き声が響く。シャルはそれでも攻撃の手を緩めない。

「うう……ウアアアア」

シャルは危険を察知し距離を取る。景秋も何かを感じ取ったのかシャルの元へ駆け寄つた。

「あれは……VTシステム…禁止武装の筈じゃ……」

「ドイツがそれだけ懲りていないという事だろう…ツ！」

——VTシステム——ヴァルキリートレースシステム。言わばそれは織斑千冬をコピーする能力。過去のモンド・グロツソでの戦闘データをそのまま再現する為のシステム——

ISだった物はラウラを包み、巨大な女性の姿へと変わった。

「シャル、教師陣へ連絡しろ！それとそこで倒れてるバカをピットに！」

「景秋は!?」

「コイツの相手は俺がやる！」

景秋はそう言つて大太刀を構えてラウラを迎え討つ。だが、景秋が劣勢となる。

……コイツの剣、重い…そして速い。俺ですら目で追うので精一杯だ……

「ツ！」

景秋とラウラは鏢迫り合いになるも景秋が徐々に後退し、吹き飛ばされた。

「ハア……ハア……」

「景秋、一度下がって補給を受けて！」



「シャル！お前じゃ無理だ！」

景秋はそう叫ぶ。だがシャルは聞かずに援護射撃を続ける。

「私にも半分背負わせてよ。景秋の負担」

「……………五分で良い。持ちこたえてくれ！」

「わかった！」

景秋はそう言ってピットへと飛んでいった。

「…姉さん！」

「事情は知ってるよ、だから武州五輪のリミッターを解除する」

東はそう言って景秋から武州五輪を受け取ると、パソコンに繋いで操作を始める。

「リミッター？」

「そう、リミッター。景秋の能力に応じて出力を上げ下げしてたの。けど、こんな状況じゃ、そんな悠長な事言ってもらえないからね」

「何分で終わる？」

「三分で終わらせる」

東は言い切るものの、景秋は不安そうにする。

「大丈夫。シャルちゃんの事が心配なんですよ？それももう手は打つてあるから」

東はそう言って笑った。

アリーナではラウラ相手にシャルは追い込まれていた。

「流石に織斑先生のコピーと相手は厳しいな…アハハ…」

シャルは乾いた笑いを溢す。

「ここでお仕舞いか……………ごめんね、お母さん……………」

ラウラが雪片を振り下ろし、シャルを捉える寸前に誰かか雪片を止めた。

「景秋…？」

「ご期待通りに景秋じゃなくて、済まないな」

「ほ、箒！」

鋼色のISを纏った、二刀流の箒がそこには居た。

「シャルロット、ピットへ速く。今のシャルロットではこれ以上、戦え

「まい」

「……悔しいけど、任せたよ。箒」

「ああ、任せられた。……行くぞ。私の相棒『天津鋼』！」

箒は一度ラウラから距離を取ると、右手に握った刀——空裂を振るう。空裂からはエネルギー刃が放たれ、ラウラへと飛ぶものの、雪片に斬って落とされる。

「流石、千冬さんのコピーだ。生半可な攻撃では掠りすらしないか……ならッ！」

箒は加速してラウラへと接近して刀での勝負に持ち込む。

「千冬さんならここで……」

ラウラは箒の想像通りに振り下ろしの攻撃を仕掛けた。箒は左手に持った刀——雨月あまつぎで限界まで引き絞った突きを放つ。その突きからも先程と同様にレーザーを放つものの掠るだけで終わる。

「これでも避けるか……景秋、速く来てくれ」

箒は好戦的な笑みを浮かべて、そう呟いた。

「これで武州五輪のリミッターは外し終えたよ」

「ありがとう、姉さん」

「どういたしました。一刻も早くあの子を助けてあげて」

「わかってる」

時は少し遡る。出撃の準備を終えた景秋の前に織斑が立つ。

「退け」

「退くかよ、俺も連れていけ」

「足手まといだ」

「俺だってラウラを助けない！」

景秋は織斑に呆れを通り越して残念に思う。

「お前の力じゃ無理だ。良いか？現実を教えてやる。お前は正義の味方面をして戦おうとするが、お前に正義云々、大義名分を掲げて戦える程の実力は無い。ラウラにも言われただろうが。」

ISの性能に振り回され、猪突猛進と言わんばかりに雪片を振るう。ガキのお遊びに付き合っている程、余裕のある状況じゃねえ

んだよ」

景秋はそう言って織斑を無視して進もうとするも織斑は景秋の肩を掴んで離さない。

「離せ。いい加減、俺も我慢の限界だ。死にたくなければその汚ならしい手を離せ、ガキ」

景秋は織斑の手を捻り上げてそのまま地面に叩き付けた。

「大人しく眠ってろ」

景秋は落ち着く様に一呼吸すると武州五輪を装甲するため口上を唱える。

「千日の稽古を劔とし、万日の稽古を冑とす。以って此れ我が劔冑なり！」

景秋はピットから弾丸の様な速さで飛び出して行った。

「箒、下がれ！今のお前のISじゃ限界がある」

「景秋……！」

箒を避難させてから景秋は大太刀を構えた。

「ラウラ…… お前は強さを求めたな。織斑千冬の様になりたいと…… 織斑千冬の妄想に取り憑かれて……。戦え、ラウラ！戦って抗え！」

景秋とラウラはお互いがぶつかる寸前まで接近する。ラウラは雪片を振り下ろし、景秋は大太刀を振り上げる。

二人の刀が掠り、火花を散らす。景秋は退く事をせず、一歩ずつ前に出る。

「ラウラァ！その妄想から…… 抗ってみろ！」

景秋は大太刀を振りながらラウラへと叫ぶ。その声は虚しくアリーナに響く。

「なら…… 磁波鍍装——エンディング——菟窮——ツ！」

《御堂…… 良いのか？》

武州五輪の問いに対して景秋は途切れ途切れの声で答えた。

「良いも…… 悪いも…… ない…… ツ…… 俺には…… この手しか…… 無い……」

景秋の答えを聞いた武州五輪は電磁抜刀のモーションに入る。

《諒解——菟窮開闢——終焉執行——虚無発現》

「吉野御流合戦礼法——」迅雷が崩し——」

ラウラは居合の体勢に入った景秋の頭部へと振り下ろす。武州五輪の頭部装甲が割れ、景秋の顔が露になる。

「電磁抜刀——穿イイイイ!!」

景秋の大太刀はラウラを覆っていたISを振り払い、景秋はラウラを引つ張り出す。

「戻って来い、ラウラアア!」

景秋の意識はそこで途切れた。

景秋は真っ白な空間に立っている。そこにはラウラに似た誰かも立っていた。

「我がマスターを宜しくお願いしてもいいでしょうか?」

「お前は…… シュバルツエア・レーゲン?」

「はい。私は貴方の強さを知っています。だからこそ、貴方に任せたいのです」

シュバルツエア・レーゲンはそう呟いて笑う。景秋はそれに何も言えずに黙った。

「俺は……」

「強くないと?」

「……」

「貴方は十分強い。貴方は自ら進んで悪の道に堕ちた。違いますか? だから貴方に任せたい。貴方なら、我がマスターを正しく導ける」  
そうして周りの空間が消え始める。

「俺にはそんな大層な事をする力は……!」

「あります。私があると言うのです。それに…… 私が貴方になら、と思ったからです。それでは、任せましたよ」

景秋はそうして目を覚ました。

結果、学年別個人対抗戦は中止と言う事になり、景秋はラウラの見

舞いの為に医務室へと赴いていた。

「調子はどうか、ラウラ？」

「体の節々が痛い。これがVTシステムの負担なのだろうな……」

「ラウラのIS……シユバルツエア・レーゲンはラウラの負の感情とダメージレベルがDになるとVTシステムが発動する様になってたようだ」

景秋はラウラに資料を渡す。ラウラも一通り目を通して資料を景秋に返した。

「お前が織斑景秋だったんだな……」

「ISの共鳴で俺の過去を覗いたか」

「ああ……あれが教官の本性だったんだな……」

ラウラの言葉に景秋は黙る。

「私は……誰なんだろうな……織斑千冬になりきれず、何者でもない……そんな私は誰なんだろう……」

景秋は座っていた椅子から腰を上げた。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ……だろ？」

「え？」

「何者でもない。なら言い換えれば何者にもなれるって事だ。違うか？」

景秋の言葉にラウラ首を横に振る。それを見た景秋は言葉を続けた。

「俺だって今は東雲景秋だ。ラウラもいつか自分を認めて、心の底から自分の名を名乗れる様になる日までは……ラウラ・ボーデヴィツヒを名乗ると良いさ。」

それで、そのままラウラ・ボーデヴィツヒとして生きられる様になれば良いじゃないか」

「そうだな……。私には言ってくれないのか？」

ラウラの問いに景秋は首を傾げた。

「その……半分背負わせろ……と」

「……自分の名前が重荷になって堪えきれない、自分が何者か解らないってんなら……俺に半分背負わせろ。幾らでも寄り掛かって

こい。それでラウラが楽になるならな」

「ああ…… ありがとう、景秋」

「どういたしまして、ラウラ」

景秋はそう言って医務室を後にした。

---

「何者か解らないなら、何者にでもなれる…… か。今の俺が言えた言葉では無いな……」

景秋はそう呟いて夜空を見上げる。夜空には満天の星が輝いていた。